

古代への招待状

埋もれていた遺産

1

須恵器(すえき)は5世紀前半の古墳時代中期から平安時代にかけて用いられた土器で、陶磁器同様に登り窯などを使って約11

に「陶器・すえのうつわもの」と記載されているものに当たります。須恵器には釉薬(つわくすり)は用いないことから、当時の釉薬を用いた施釉陶器と区別するために現代語として須恵器という言葉が生まれました。

須恵器を作る技術は5世紀前半に朝鮮半島から伝わった新しい技術です。須恵器製作ではろくろを使って形を作り、また大きなめやつぼなどは、焼成時のむらや破損を防ぐために形作った粘土をたたきしめる技法を用いました。

須恵器生産が大きく

土器(焼き物)・須恵器

00度で焼かれ、窯の中の還元焰(かんげんえん)焼成作用によって灰色に焼かれたものです。平安時代の文献「延喜(えんぎ)式」

発展した地域は今の大阪府でした。「陶器窯跡群(すえむらかまあ

とが分かってきまし

古墳^{中期} 朝鮮から伝来

還元焰焼成作用で灰色

とぐん」と呼ばれる一大須恵器生産地帯が発見され、古墳時代を

た。全国各地でも須恵器生産が営まれますが、それぞれは短期間でやめてしまう小規模

紀前半ころに生産されたと考えられる窯跡が発見されています。松ノ山窯跡の須恵器は赤



赤茶色が特有の松ノ山窯跡の須恵器(市立博物館蔵)

なものでした。

長野県内では、長野市信更町田野口で「松ノ山窯跡」という6世

茶色をし、須恵器としては焼成に失敗したものと考えられます。また、この松ノ山窯跡よ

これらの須恵器は陶器窯跡群や他地域産ではないと考えられています。このことから、須恵器の生産技術が伝えられて間もない5世紀中ごろから後半にかけての時

◇還元焰焼成 酸素の供給が不十分なため、一酸化炭素や水素などが含まれる炭で粘土が焼かれると、粘土中の鉄分が酸化されないで土器がたいだり色にならず、灰色や灰色に近い色に焼き上がる。

として発展し現在に至っています。

た。全国各地でも須恵器生産が営まれますが、それぞれは短期間でやめてしまう小規模



須恵器は奈良・平安時代を通して各地で多く生産されていますが、発見して釉薬を意図的に用いる灰釉陶器などが生産されるようになり、特に鎌倉時代以降には陶器類として発展し現在に至っています。

りも古い須恵器が長野市上松の長野高校敷地内にある「本村東沖遺跡」や飯田市内の集落遺跡から発見されています。

期に、長野市周辺や飯田市周辺地域においても、須恵器生産が行われていた可能性を示す資料として注目されています。

西山克己・泉埋蔵文化財センター調査研究員

肥よくな長野盆地には、はるか昔の旧石器時代から人が住んできました。その足跡は数多くの遺跡に残されています。これらの人々の暮らしや文化は、21世紀の私たちが忘れてしまった知恵や教訓を呼び覚ましてやみません。県埋蔵文化財センターの協力で、「信仰」や「環境」など11のテーマを設け、新たな研究成果を踏まえた身近な古代の文化の実像を100回にわたってお届けします。

古代への招待状

埋もれていた遺産

2

普段何げなく使っている飯茶わんは、「手のひらの大きさ」に合わせて作られ(直径4寸Ⅱ約12センチ)、その重さも最近「手」を

で決まっています。

隣の中国では、今から約3000年前の周の時代に「中婦人の手長(しゅちよう)」を基準とした「咫(あた)Ⅱ17センチ前後」という単位が使用され、体の一部を基準にした「身体尺」が単位の起源の一つになっていたことが分かります。フット(feet)など、その他の国でも体の一部が尺度として使用されていた例は多く見られます。

果たして、縄文時代にもこのような基準が存在し、縄文土器はそれを使って作られていたのでしょうか？

土器(焼き物)・大きさ

な100センチにほぼ統一されていることを知っていますか？ 背広の内ポケット、札入れ、そして当然お札そのものの丈も、「手の長さ」

れまでの縄文土器研究の成果から、遅くとも今から約4500年前

などを考えて作られていたことが分かってきています。また、その

「手の長さ」を基準に 縄文時代は17センチ前後

の縄文時代中期には、土器製作時に、その容量や法量(ほうりょう)

「長さ標準」(縄文尺)は、17センチ前後と前に示した「手の長さ」(咫)に一致します。つまり、

内の遺跡から出土した土器にもうかがうことができます。長野市内にはまとまった資料を



手の長さを基準に作られた宮崎遺跡から出土の縄文時代晩期の土器(市埋蔵文化財センター所蔵)

縄文土器も体の一部(手のひら)を基準に作られていたのです。

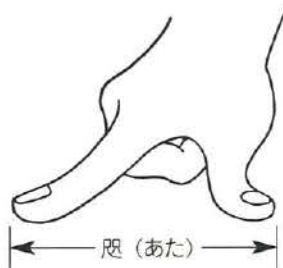
このことは、長野市

持つ縄文時代の遺跡は少ないのですが、その中でも住居跡から多くの完全な形に近い土器

が出土した若穂保科の宮崎遺跡を取り上げてみましょう。

今から約3500年前の縄文時代晩期前半の2号住居跡からは、最も多くの土器が出土

4つの深鉢の口径がそのちょうど2倍の36センチ前後となっているのです。3つの深鉢は、器の高(土器を置いたときの高さ)、底径(底の幅)も似



通っています。

も完全な形に復元できた土器を計測すると、口径(土器の口の部分の広さ)に規則性が見られ、一つの深鉢は17・9センチで1咫の幅となり、一緒に出土しているほかの土器の中で

縄文時代から、手のひらの各部位を基準にして土器を製作している

◇法量 考古学で、土器(うつわ)の口径、器高、底径、最大幅などの各部位の計測値をいいます。



黒岩隆・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

3

平成元(1989)年、上信越自動車道長野インター北隣の松原遺跡の地下2メートル、およそ2000年前の弥生時代中期の大規模なムラが発見されました。発掘された壺

穴式住居跡は250軒以上ですが、ムラ全体では2000軒は超えるだろうと推定されています。掘り出された弥生中期の「栗林式」といわれる土器も、今までの常識をはるかに超えた大量なもので

す。

さて、ここで発掘された弥生時代の土器は縄文時代の土器とどこが違うのでしょうか。つぼとかめが、形も

文様も変えてはつきり区別されていて、共に大量に作られています。主に、つぼは米の貯蔵に、かめは米の煮炊きに使われていたといわれています。これが深鉢中心の縄文時代と最も違う「弥生土器」の特徴になるのです。

ほかに、お供えに使った高坏(たかつき)が作られていること、縄文時代とは違う技法による赤彩土器が多いことなども、弥生土器の特徴といえます。

土器(焼き物)・弥生土器

なぜこのように土器が変わったのでしょうか。

縄文時代、人々は狩・漁・採集によって食物を手に入れている

した。弥生時代に入ると、大陸からもたらされた米作りを中心とした農耕によって、主な食物を調達するように

ムラ発展 大量生産へ つぼとかめは使い分け

また、安定した食物調達によってムラも大きくなり、土器は大量生産されました。それが弥生土器です。

北九州に始まったこ



した。粘土ひも作りで野焼きをするその作り方、つぼやかめに縄文文様がたくさん使われている様子などに、大きな違いはありませ

松原遺跡の栗林式土器

の大変化は、およそ2100年くらい前、この地域に伝わってきた。地域性の強い縄文土器を作っていた人々が、新たな弥生土器を作るようになった。

さらに、米作り社会が発展した弥生後期、

栗林式土器を引き継ぐ「箱清水式土器」が作られました。つぼ・かめ・高坏が、一層はつきり規格化されます。また、かめ以外の器がほとんど赤くされ、そ

の一部、さらに関東にも及んでいます。弥生時代に続く古墳時代、弥生土器を引き継いだ地域性は大きく失われていきま



の割合は40%にも及んでいます。この地域性の高い弥生土器は、千曲川流域を中心に作られ、その影響は中南信

徳永哲秀・奥埋蔵文化財センター復興担当

◇弥生土器 この名称は最初に発見された東京本郷の弥生町にちなむものです。
◇北九州の米作り 約2800年前に始まったという見解が最近出されていますが、今後の研究によって明らかになるところでしょう。
◇栗林式・箱清水式土器 特色ある一群の土器に付けられたこの名称は中野市栗林遺跡・長野市箱清水遺跡に由来します。

古代への招待状

埋もれていた遺産

4

灰釉(かいゆう) 陶器と緑釉(りよくゆう) 陶器は平安時代(9世紀-12世紀)に窯で焼かれた焼き物です。灰釉陶器はそれまでの須

恵器(すえき) などと違い、人工の植物灰などの釉薬(うわぐすり)を意図的にかけて硬く焼いたものです。緑釉陶器は鉛釉をかけ、灰

投窯(さなげよう)で焼かれました。古墳時代以来の須恵器と違

土器(焼き物)・灰釉陶器 緑釉陶器

最初の灰釉陶器と緑釉陶器は名古屋市の東側の丘陵地帯にある猿

これらの焼き物が焼かれたのは、今の愛知県から岐阜県にかけての地域で、いわゆる瀬戸物のルーツとなる地域です。この地域ではカオリンを含む陶土が採れ、灰釉陶器などを生産する条件がそろっていました。

青磁(あおし)と呼ばれました。両陶器ともに現代の焼き物に近い形をしています。

当時は白磁(しろし)、青磁(あおし)と呼ばれました。両陶器ともに現代の焼き物に近い形をしています。

人工の釉薬 意図的に 平安時代 窯で焼かれる

代以来の須恵器と違い、碗(わん)や皿といった全く新しい器種

青磁などの形を写したもので、中には陰刻花文と呼ばれる花の模様。古代の役所跡)や特別な限られた遺跡から



南宮遺跡から出土の灰釉陶器と緑釉陶器
(市埋蔵文化財センター所蔵)

も作られました。生産され始めて間もない灰釉陶器は、長野県内では飯田市恒川

こば) 遺跡や細新(ほそあら) 遺跡などの南信地域や木曾郡日義村お玉の森遺跡などの木曾地域では灰釉陶器の出土する割合が高く、距離が遠くなる北信地



陶器が長野県内にもたらされ、県内のどここの遺跡でも灰釉陶器が出土するようになっています。しかし、生産地に近い飯田市猿小場(さる

域ではその割合が低くなります。そのため長野市南宮(なんぐう)遺跡では灰釉陶器や緑釉陶器が出土しているものの、北信では灰釉

陶器の形を模した土師器(はじき)や黒色土器(くろしきどき)を使用する工夫がされました。灰釉陶器は日常生活の中で多く用

◇カオリン 白陶土、白い粘土で耐火度が高い。
◇土師器 古墳時代から平安時代にかけての素焼き土器の総称。
◇黒色土器 古墳時代後半から平安時代の土師器の中で、表面をち密にするため炭素を吸着させたもの。内面、あるいは内外面に黒色の土器。
◇南宮遺跡 長野冬季カオリンピック開閉式場建設に伴い調査された遺跡。

石上周蔵・県埋蔵文化財センター調査研究員

いられませんが、緑釉陶器については希少品の焼き物となります。また両陶器ともお墓への副葬品としても使われ、塩尻市吉田川西遺跡のように緑釉陶器を多用するお墓もあれば、長野市鶴前遺跡のように灰釉陶器と土師器などを組み合わせる副葬したものもあり、これらの違いは埋葬された人物の身分や勢力をしのばせています。

古代への招待状

埋もれていた遺産

5

「かわらけ」とは、皿の形をした素焼きの土器です。中世では、主に武士の宴会に使われ、終わるとその場限

りで捨てられました。現代風には「使い捨て食器」といったところでしょうか。平安時代の後期(11

世紀)、京都で貴族の宴会儀礼用食器として使われ、やがてこの用法は東日本にも普及し、武士たちも京都と似た作りのかわらけを使うようになりま

8トにもなります。その量に遠く及びません

土器(焼き物)・かわらけ

皿状の使い捨て食器 武士の宴会に使われる

が、長野市内の例として市埋蔵文化財センター

1が平成2年、5年、6年に発掘調査した栗



田城跡が挙げられます。ここは芹田地区の栗

て北信濃の豪族として活躍した栗田氏の館跡

栗田城跡から出土した「かわらけ」

(市埋蔵文化財センター所蔵)

田にあり、平安時代末ともいわれています。期から戦国時代にかけて現在宅地化が進み、



当時の姿はほとんど確認することができません。今の日吉神社社殿のある小高い場所が主郭(城の中心部分)で、

120畝四方もの主郭があり、全体の姿は二重の壕(こう)に囲まれていると推測されています。その栗田城跡から

北西隅に土塁の跡、その横の公園は堀跡に当たります。調査の結果、室町時代(14世紀代)には約

ど摩耗の痕跡が見られないことからやはり、1回限りの使用としか考えられない宴会用の皿だったことが分

出土した焼き物のほとんどが「かわらけ」です。市内には、平地の居館・屋敷跡が多く分布していますが、その中でも抜きん出た出土量でした。皿の多くの内面には、ほとんど身分関係をも象徴的に示す場であり政治的にも重要な場でした。強固な上下関係を明確にさせる場だったので、この宴会が頻繁に行われたかどうかは、このかわらけがひとつのバロメーターとして考えられるわけです。それにしても、かつてこの栗田の地で、武士たちが集い、かわらけに盛られた酒を飲み、どんな話をしていただろうか……。いろいろな想像を働かせてみてはいかがでしょうか。

豊田義幸・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

6

90(平成2)年、松代町東寺尾の松原遺跡で地表下約3メートルから、縄文時代と呼びます。縄文土器の名称の起源は古く、明治時代に東京大学で教えていたエドワード・モースが、現在の東京都大田区と品川区をまたぐ大森貝塚を発掘し、この貝塚から縄目の文様が付けられた土器を発見しました。モースはこれを「縄目文様の土器」と呼びました。これが縄文土器の名前の由来です。

鉢形土器や洗面器のような浅鉢形土器などが発見されました。これらは縄目などの文様が付けられた縄文土器で

す。このような縄文土器を使っていた時代を縄文時代と呼びます。縄文土器の名称の起源は古く、明治時代に東京大学で教えていたエドワード・モースが、現在の東京都大田区と品川区をまたぐ大森貝塚を発掘し、この貝塚から縄目の文様が付けられた土器を発見しました。モースはこれを「縄目文様の土器」と呼びました。これが縄文土器の名前の由来です。

縄文土器は約1万3000年前に登場した、日本列島の中で最も古い土器です。土器が大陸から伝わったも

かっています。土器の登場は人々の

縄目文様 主に深鉢形 煮炊きに使用 生活一新

のか、日本列島で発明されたのかはつきり分

生活を一変しました。土器は煮炊きすること

土器(焼き物)・縄文土器

ができる器です。煮炊きすることにより、食べ物を軟らかくしたり、食中毒などからも

は延び、さらには縄文人の生活は安定しました。こうして、土器の登場は縄文人が定住す

ところで、縄文時代は約1万3000年前から弥生時代が始まる2500年前まで、約

縄文時代全体を通してみると、土器は深鉢形土器が圧倒的に多く、もっぱら

かかったようです。縄文時代の中ころを例にとると、釣り手の付いた土器、靴形の土器、双口(2つの口が付いた



松原遺跡から出土したさまざまな形の縄文土器(県立歴史館所蔵)



松原遺跡の発掘調査＝90年(県埋蔵文化財センター提供)

逃れることができるため、衛生的にもなりました。このようなことから縄文人の平均寿命

る(一定の場所に生活する)一つの要因となりました。このようことから縄文人の平均寿命

1万年という長い間続いた文化です。その間、縄文土器は地域や時期により少しずつ変化し

は、弥生時代の土器のようにかめやつばによって、形や模様がはっきり区別することはな

縄文土器は器としてだけでなく、まじないの要素も加わって、器の範囲を超える形のものも作られました。

縄文土器は器としてだけでなく、まじないの要素も加わって、器の範囲を超える形のものも作られました。

中島英子・県埋蔵文化財センター調査員

古代への招待状

埋もれていた遺産

7

日本で土器が初めて作られたのは今から約1万3000年前のことです。縄文土器には

さまざまな形のものがあります。世界史の中で、最古といわれるほど早い段階に作られた

土器の底は円形の丸底や方形の平底でした。そして、今から約9500年―約6000年前の縄文時代早期・前期前葉に主流となったのは、底が砲弾状や乳房状など三角形にとがった形をした土器でした。これらの土器群を尖底土器(せんでいどき)といいます。

さて、現代の生活の中で底がとがっている器といえば、せいぜいソフトクリームのコーンを思い浮かべるくらいで、なかなか見つけることができません。なぜなら、そのまま立

しょうか。

このような非合理的

底が砲弾状や乳房状 地面に固定 食物を煮る

の先端を埋めたり、底の周囲に石を置いて固定したりして立て、その周りで火をたいて木の実などの食べ物を煮

で、これ以上の形のものはありません。尖底土器には、山形の格子目、だ円形などの連続した模様が付け

した。また、南信地域や東海地方では、文様のない無文(むもん)土器が作られました。長野市浅川の大地C

ます。小さな破片なので詳しいことは分かりませんが、尖底土器の中でも古い時期に位置付けられる可能性があ

底土器が、地表下約3メートルで見つかりました。山間地ではなく、千曲川の沖積地で発見された例はありませんでした。

石川条里遺跡から出土した縄文が付けられた尖底土器(県立歴史館所蔵)



その土器は今から約6000年前の縄文時代前期前葉のもので、この時期は尖底土器が、腰の落ち着いた平らな底をした平底土器に取って代わろうとする時期になります。それは、今よりずっと温暖な気候を迎え、木々に囲まれた台地に大きな集落が出現する時代への変化でもありました。

土器(焼き物)・尖底土器

な形の尖底土器は地面に小さな穴を掘って底

る深鉢形の器として用いられました。もちろん土器全体への火の回り様や、縄文、捺糸文(よりいともん)とい

は底の面積が小さいほど熱効率が良いの

られる押型文(おしがたもん)と呼ばれる文様や、縄文、捺糸文(よりいともん)とい

遺跡では、土器の表と裏に縄文を施した表裏縄文(ひょうりじょうもん)と呼ばれる土器の破片が見つかってい

り、大変貴重な資料です。また、篠ノ井の石川条里遺跡の発掘調査では、縄文が施された尖

小林秀行・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

8

写真をご覧ください。89(平成元)年、篠ノ井遺跡群で大量に発掘された箱清水式土器の一部です。

か。つばやかめの形や文様が少し変わってきていますし、お供えに使われた高坏(たかつき)が増えていますね。けれども際立った変化は「赤い土器」の大増殖です。かめ以外のつばや高坏、鉢はほとんど赤くしています。

篠ノ井遺跡群の全体に占める赤い土器の割合は、およそ40%にもなるのです。これは千曲川流域で作られた箱清水式土器にほぼ共通した割合です。これだけたくさん赤い土器が作られたことは、時代を超えて全国的にも珍しいことです。一体どうしてこんなことが

で作られた水(こり)式土器の浅鉢の多くは赤くされていました。

新たな技法で大増殖

独自の信仰と儀礼の象徴

中でみな色落ちしてしまっているからです。それは、赤彩の技法の

を使って色落ちしない赤い土器も作りましたが、多くは焼いた土器



土器(焼き物)・赤い土器

このシリーズの3回目に登場した「弥生土器」の松原遺跡の栗林式土器と比べてみてください。どうでしょう。

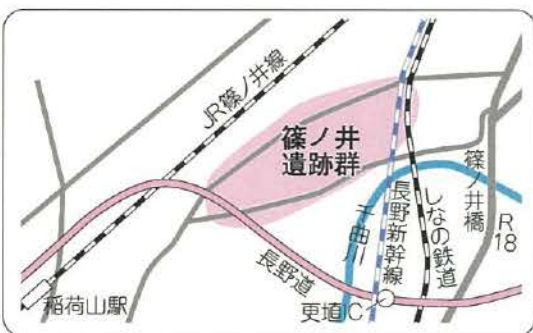
起ったのでしょうか。さかのぼって縄文時代晩期、実はこの地域

縄文人も赤い土器を好んでいたのです。それが目立たないのは、土

違いました。

縄文時代の赤彩技法はいろいろでした。漆だけのものでした。そ

篠ノ井遺跡群から発掘された箱清水式土器。赤く塗られた土器が目立つ(県埋蔵文化財センター所蔵)



ここに、新たな色落ちしない赤い土器の製作技法が米作りとともに大陸からもたらされました。

は、世界的に共通するものだと思われませんが、その特徴は、粘土で土器を作り、その表面に粘土に混ぜたベ

北信の千曲川流域で見事に「赤い土器のクニ」といわれるほどに盛んに作られたのです。

◇氷式土器 この名称は小諸市氷遺跡に由来します。◇世界に共通する技法 現在、国内を巡回中のトルコ三文明展で展示のおよそ3700年前の赤い土器も、全く同じ技法で作られていると推察されます。最も古いものは7000年も前に西アジアに現れています。◇伊那谷に登場した赤い土器 南信濃村尾の島館遺跡の小型赤彩壺(つば)が最も古いといわれています。

上げてから焼くところにある。新技法の赤い土器は、長野県には弥生時代中期の初めに伊那谷に登場しています。そして弥生時代後期の箱清水式土器の時代、東

徳永哲秀・県埋蔵文化財センター復興担当

「赤い土器」は、時代を反映した独自の信仰と儀礼のシンボルだといえましょう。

古代への招待状

埋もれていた遺産

9

93(平成5)年、千曲市・屋代遺跡群の地下4メートル、約4500年前の縄文時代中期後葉の集落跡が見つ

りました。写真は、そこから出土した深鉢形(ふかばちがた)の縄文土器です。同じ時期の深鉢形土器は、長野

市長門町の旭町遺跡でも出土しています。

これらの形を見て皆さんは何と呼ぶでしょう。煮炊きに使った

のだから鍋。いや、水をためるのに使ったかもしれないからかめ。あるいは、榎木鉢に似ているから鉢。諸説が出てくるでしょう。

一般的な使い道からすると「深鍋」ですが、すべてが鍋に使われたとは限りません。そこで、考古学の世界では「深鉢形土器」と呼んでいます。「鉢」の形をしたものの中で、深い方というわけです。

国立音楽大学教授だった故甲野勇先生は、横

浅鉢、それ以下を皿と呼ぶことを勧めていました。用途からきた名前

祭り 集中的に使用？

一方 リサイクルも盛ん

土器(焼き物)・深鉢形土器

幅に対して高さが3分の2以上のものを深鉢、半分―3分の1を

ではなく、あくまで仮の名称だったので。ところで、縄文時代

の遺跡を掘ると出土品のほとんどがこの深鉢形土器の破片です。縄文時代中期の集落跡では土器のかげらが10万

ではなく、お祭りのときに集中的に使われ、壊されたとする説があります。そして、住居の跡



屋代遺跡群から出土した縄文時代中期後葉の深鉢形土器(県立歴史館所蔵)

点以上出てくることもあります。かなり大量に消費していたのですね。その理由は、土器が割れやすかったから

地や集落周辺のくぼ地は次第に土器で埋め尽くされてゆきます。もちろん当時は生ごみも一緒なので、それが原

因でムラを移動したというところもあったようです。

や儀礼のため家の入り口付近や集落の境、中央広場の一角に土器を埋めた例

(埋蔵Ⅱうめがめ)が見つかっています。この場合、土

器の底を抜いたり穴を開けたりして、「もう日常的に使

えの土器ではありませんよ」という印を付けています。さらに、破

片は炉に敷いたり炉を囲うのに使われた例も

あります。アメリカに住むプエブロ族の陶芸作家たちは、古代の土器の破片



を粘土に加えて、土器を作ります。祖先の魂を吹き込むためだそう。近年、新潟県で出土した縄文時代中期の深鉢形土器にも、古い土器の破片が入っていることが分かってきました。これこそ究極のリサイクルといえるのかもしれない。

使うのに不便なほど装飾を凝らした縄文時代の深鉢形土器。その文様にもさまざまな意味や魂が込められていたようです。

寺内隆夫・県埋蔵文化財センター調査研究員

◇訂正 第8回「赤い土器」の篠ノ井遺跡群出土の箱清水式土器の写真で、つぼとあるのはかめ、杯は高杯、その他の赤い土器はつぼ、所蔵は県立歴史館でした。

古代への招待状

埋もれていた遺産

10

土師器(はじき)は3世紀後半の古墳時代から12世紀の平安時代にかけて用いられた素焼きの土器で、縄文時

うつわのもの」と記されていますが、現代語として読みやすいように「はじき」となりました。

ほぼ同時期に用いられた須恵器(すえき)はロクロで形を作り、窯の中で約1100度の高温による還元焰(かんげんえん)焼成(かうせい)の技法で灰色に焼かれたのに対して、土師器は地面を浅く掘った穴で野焼きされ、成形は基本的にはロクロを使わず手作業で粘土を積み上げたり、巻き上げるなどして作られていました。野焼きの温度は須恵器より低い

色は褐色・赤褐色・黄褐色をしています。土師器は古墳時代か

全国各地で広く出土 地域的な特色は希薄に

に限らず全国の同時代の遺跡を掘ると必ずといってよいほど出土します。ただし、時期によって使われる器種や形態などには違いが見

す。約2500年前の縄文時代晩期から平安時代にわたり営まれ、主に約2000年前の弥生時代から平安時代の集落や墓が確認され

を示すものとして興味深い資料を提供しています。土師器は長い歴史の中で時代とともに変化していきます。弥生時

な特色の希薄化・地域性の消失、すなわち全国的な「均一化」の傾向を見せ始めた時期です。つまり、この傾向は大和政権の全国統一

6世紀代や7世紀代の古墳時代後期になると、古墳時代中期に伝来した須恵器とともに、須恵器を模倣した土師器が広まります。また、カマドの普及とともにカマドでの調理に向いた煮炊き効率の良い長胴形のカメや蒸し器が一般化してきます。

平安時代になると特に土師器の坏(つき)やつぼなどは、須恵器や釉薬(ゆうやく)を用いた灰釉陶器に徐々に変わり、土師器は次第にその姿を消してゆきます。

藤原直人・県埋蔵文化財センター調査研究員

土器(焼き物)・土師器

代・弥生時代の土器の流れを受けて作られたものといえます。平安時代の書物である「延喜式(えんぎしき)」には「土師器(はじき)」

約800度の酸化焰(さんかえん)焼成の作用で焼かれたため、

ら平安時代にかけて日常ごく一般的に用いられたもので、長野市内

られます。長野市内の篠ノ井遺跡群は千曲川左岸の自然堤防上に位置し、長さ約2*、幅約400

ています。このうち古墳時代初頭の土器には東海や北陸地方、さらには近畿地方で作られた土器が数多く出土し、当時の交流の一端

代には地域により土器の特徴は異なりましたが、3世紀後半から5世紀代にかけての古墳時代前期・中期は弥生時代と異なり、地域的

の動きに連動している」と解釈されています。

◇酸化焰焼成 野焼きなど酸素が十分に供給された状態で完全焼成されると、粘土中の鉄分が酸素と結びついて酸化するため、赤味がかった色の土器になる。



炉が用いられた古墳時代前期の土師器—篠ノ井遺跡群(県立歴史館所蔵)



カマドが用いられた古墳時代中期・後期の土師器(左下の灰色の須恵器1点を除く)。煮炊き用のかめは熱効率の良い長胴形をしている—篠ノ井遺跡群(県立歴史館所蔵)

古代への招待状

埋もれていた遺産

11

今から約1万3000年前に登場し、長く煮炊きの道具として、周使われ続けてきた縄

文土器は、ほとんどがバケツのような形をした「深鉢形土器」で、

現在のお釜や鍋と同じく煮炊きの道具でした。ところが、数多い深鉢形土器に交じって、平べったい形の「浅鉢形土器」が存在します。古い時期からわずかな数が作られて

いましたが、それが一般的に使われ続けるようになったのは、今から5500年ほど前の縄文時代前期後半になってからです。

縄文土器は煮炊きを目的とした深鉢から出発して、さまざまな用途に向けて器種も多様になりますが、浅鉢は物を盛る器としての役

土器(焼き物)・浅鉢形土器

盛り付けやお供え用 生活変化と進展 裏付け

割が考えられていました。深鉢の表面や内面

に付いている炭や焼け焦げが、浅鉢には無い文様が付けられていま

のです。

浅鉢の表面は丁寧に

す。時には、漆で赤や黒の色付きの文様を描



赤色で飾られ独特の形をしている浅鉢形土器—松原遺跡(県立歴史館所蔵)

くことさえあるので、浅鉢の用途は食べ物を盛り付けるための飾られた土器、あるいは神の前にお供え物などをする特別な場で使われた土器であったと思われる。

地中深い遺跡や水に漬かっている場所から、木製品が発見されることから、浅鉢の存在が明らかになりました。そのほとんどが腐って残らない木製品なので、浅鉢は木製の物が中心に使われていて、それをまねた土器が作られたと考えるべきでしょう。浅鉢の表面をピカピカに磨き上げること

や漆を塗ることは、木製の鉢を作る技術との関係で説明できそうです。

その視点で松代町の松原遺跡出土の浅鉢を見てみます。写真の浅鉢は縄文時代前期後半の下島式土器に含まれます。文様こそありませんが、厳選された良質の粘土を用いて磨かれた器面が赤色に塗られていて、小さな破片でも深鉢とは一目で見分けがつけます。

それまでの煮炊きの土器中心の生活から、物を盛ったり供えたりする飾られた土器を使う生活へと、縄文人の生活実態の変化や進展を裏付けるのが浅鉢の出現です。その意味で、次の縄文時代中期に「縄文王国」とも呼ばれ隆盛を誇る地域である長野県や関東地方で、他に先駆けて浅鉢の使用が本格化するの

は興味深い事実です。

百瀬新治 県立歴史館総合情報課長

◇下島式土器 50(昭和25)年に県考古学会初代会長だった故宮坂英次氏が調査を行った茅野市下島遺跡から出土した土器に対して、前明治大学学長の戸沢充則氏が命名した。

古代への招待状

埋もれていた遺産

12

県内の15世紀〜16世紀にかけての室町から戦国時代の遺跡ではごく普通に見掛ける土鍋

があります。それは直径30センチほどの浅いバケツ型の土鍋で、縁の内側に半円形の取っ手が

2つ付く特徴から「内耳鍋(ないじなべ)」と呼ばれています。長野市内でも若穂綿内の前山田遺跡や松代町東寺尾の松原遺跡など、さまざまな遺跡から見つか

っており、考古学的にはよく知られています。が、実は多くの謎に包まれた土器なのです。まず、使い方は、内

側に取っ手があるの直接火が当たらない利点がありますが、逆にふたをすれば自在かぎに掛けにくい、つるさずに鉄製の台(五徳)に載せるなら取っ手が内側になくともよいよ

土器(焼き物)・内耳鍋(土鍋)

うにも思われます。また、この土鍋は室

も大きな謎です。とい

なぜ? 内側に取っ手 さまざまな推測 結論出ず

町時代になって現れま

時代終わりごろに堅穴住居跡ではカマドがなくなつて煮炊きの土器も姿を消し、13世紀の

す。すると、鉄鍋が普及しているのにわざわざ土鍋を作る理由が分からないのです。



謎が多い内耳鍋―松原遺跡(市埋蔵文化財センター所蔵)

鎌倉時代には囲炉裏(いろり)での鉄鍋による煮炊きが普通になつたと推測されていま

さらに、全国的にみると西日本・東海には鎌倉時代に土鍋がありましたが、室町時代に

南海東では基本的には中世を通して土鍋は作られない地域であり、地域的に様子が異なる点も謎です。こうした謎を解明しようと、これまでにさまざまな研究者がこの問題に取り組

は検証できず、一方で関西の鉄鍋生産遺跡でも土鍋が用いられていることから、鉄鍋の代わりとは考えにくいとの意見も出されました。ほかには、安い品を大量消費する西日本文



東海地方では浅いかめのような土鍋から内耳鍋に転換し、長野県を含む中部・関東・東北の一部で内耳鍋が現れるようになります。その一方で北陸や東北・

鉄(鍋)の流通の減少

化が東日本に普及し、

安さの特徴とした土製の鍋が広まったとする説、さらに遺跡から出土した内耳鍋の内側に「お焦げ」の跡があるものは少ないことや石臼と似た時期に現れることから、お湯で粉食(畑作物)をゆでたとする説といった地域ごとの主食の在り方と調理方法の関係を考える説、壊れやすい点に繰り返し使用しない宗教的用法や意味を見いだそうとする説なども出されています。

しかしながら、いまだに決定的な結論は出ていません。

市川隆之・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

13

管状の注ぎ口が付いた土器を注口(ちゅうこう)土器と呼びます。多くは、胴体が丸みのある広口のつぼに注ぎ

径30センチを超える大型まであります。

普段わたしたちは、きゅうす、やかん、燗(かん)瓶など、さまざま

な形や材質の注ぎ口付きの器を使っています。これらの注ぎ口付きの焼き物はほとんど17世紀以降の江戸時代に中国から伝わったもので、日本ではそれ以前には見られません。

きゅうす状の注ぎ口付きの焼き物を使ったのは、偶然にも縄文人と現代人だけなのです。注口土器は主に東日本で、今から約4000

0-2200年前の縄文時代後期から晩期に

口を付けた器で弦を掛ける取っ手があり、「縄文土瓶」という方がピッタリします。大きさは湯飲みくらいから直

土器(焼き物)・注口土器

作られました。それ以前にはまれな土器です。約4000年以前の縄

鉢と、赤く塗ったつぼという液体を入れる器が結び付き、後期にな

まさに縄文の「土瓶」

専門の作者の品 流通か

文時代中期の終わりころに現れたスーパ鍋のような注ぎ口付きの浅

つて土瓶形の注口土器が生まれました。

長野県では関東地方とともに縄文時代後期前半に流行した後、優れた装飾を施す東北地



村東山手遺跡＝松代町大室＝出土の注口土器(県立歴史館所蔵)

誰もを作ったのでしうか。手の入りにくい形や複雑な取っ手、独特の文様やきれいに磨き上げた作りは、多量に使われた深鉢の作り

土偶の中空の作りや首の後ろの取っ手、細かな突き刺し文のある帯状や渦巻きの文様は、驚くほど注口土器と似通っています。



実物の約1/13

注口土器と土偶「仮面の女神」(左・上高井郡高山村湯倉洞窟、右・茅野市中ツ原遺跡)報告書より転載

手とは異なっていた可能性がります。

縄文土器の多くはそのムラで自給自足されたと考えられています。注口土器もムラの

手とは異なっていた可能性がります。土偶も注口土器も祭祀(さいし)や儀礼にかかわる道具といわれていますが、普通の土器の作り手とは異なる作者が専門に作った製

品が流通したのかもしれません。

松代町大室にある村東山手遺跡は、注口土器が長野県で最も多く作られた時期の遺跡です。全土器のうち注口

器だったことは間違いないでしょう。

火に掛けた痕跡がはっきり見られる例は認められませんが、その中身は果実酒や何かの煮出し汁、動物の血や聖水といったもよい液体などが想像されます。青森県には蛇の骨が入っていた例があります。

いずれにしても、儀式の中で何人かが口にして精神を高からせるような効果のある液体を注いだ、特別の器だったのでしょう。



土器は2割以下くらいと推定されます。この用途は細い注ぎ口や形から推定して、両手で胴をささげ持つ片手で弦を持って、こぼさずに液体を注ぎ分ける

綿田弘実・県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事

古代への招待状

埋もれていた遺産

14

現在、ガラスや陶磁器、漆器、プラスチック、金属など、さまざまな形や素材の食物用

理の種類ごとに使い分けられています。こうした多様な食器を使うことは、17世紀以降の江戸時代に飛躍的に増加しました。江戸時代の末には現在の生活でも使うそばちょこ、湯飲み、せん茶わん、土瓶、とっくり、お神酒とっくり、一輪挿し、ちようず、植木鉢など、さまざまな器がそろってくるのです。

もちろん、古代から神仏や階層ごとに使う器の種類を違えることはありましたが、特定の料理や飲食物を盛る器が作られるのは江戸

こうした背景には生活文化の発展は言うま

多様な器 一気に増加 産地発展、大量輸送も

が可能になったり、生産地の増加とともに多様な器が作り出された。この背景には、生



松代城下町跡出土の陶磁器（市埋蔵文化財センター所蔵）

き物生産者や流通業者の戦略もあったと思います。

販売を増やすという点では京焼の類似品を肥前で作ったり、備

取って生産するシステムもあり、生産は一方通行ばかりではなかったようです。

江戸時代の長野市域の焼き物の様子は、松

代城跡や松代城下町跡などの発掘調査の出土品からうかがえます。研究の途中で、大

が、おぼろげながら分かってきています。



の江戸前期には越中瀬戸（富山県の瀬戸系の焼き物）、19世紀の幕末には萩焼や京焼系の陶器など、日本海経由

土器(焼き物)・近世陶磁器

容器があり、お客さんの接待から日常の食事、神仏にささげる食事、動物への給餌、料

時代の特徴の一つといえます。

でもなく、中世以来の流通の発展で大量輸送

ことがあります。特に「染付」と呼ばれるコバルトで模様を描く伊万里、多様な上薬を用

増やしたことでしょう。また、その普及には新しい専用器を作

て、販売量を増やす焼

か、少量ながら17世紀の江戸前期には越中瀬戸（富山県の瀬戸系の焼き物）、19世紀の幕末には萩焼や京焼系の陶器など、日本海経由

市川隆之・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

15

日本に土器が登場したのは縄文時代草創期で、それは今から約1万3000年前と説明

ます。しかし、土器が日本独自に発明されたものかは分かっていません。広いユーラシア大陸のどこかに、未発見の古い土器が埋まっている可能性があるからです。

約1万3000年前という年代は「放射性炭素年代測定法」によって導き出されたものです。この方法は土器に付着した炭化物や、土器と一緒に出土した炭化物などを利用して年代を測定します。最近ではこの方法の精度が上がったことや「年輪年代法」など、

土器(焼き物)・最古の縄文土器

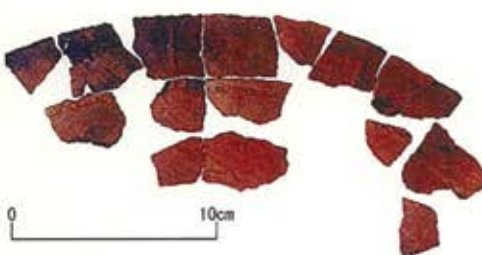
されてきました。この年代は世界の中で最も早い時期に、日本で土器が作られた可能性があることを示唆してい

ほかの年代測定法の研究が進んだことを受けて、放射性炭素の年代

ばれる補正が行われるようになってきました。その結果、青森県

に対して暦年較正(れきねんこうせい)と呼

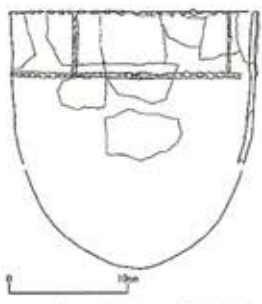
貫ノ木遺跡から出土 炭素測定で1万5000年前



の大平山元I(おうだいやまもといち)遺跡出土の土器は今から約1万6000年前のもので考えられることが分り、最古の土器の

ん。しかし、長野県で最も古い可能性のある土器が、長野市に近い野尻湖畔の信濃町貫ノ木遺跡で見つかったいます。写真がその土器

遺跡に匹敵するくらい古い年代が出ています。この土器は縁の辺りが21点の破片に分かれて出土し、底付近は見



写真の土器の復元図

放射性炭素年代測定法の年代から県内最古の可能性がある信濃町貫ノ木遺跡出土の縄文土器(県埋蔵文化財センター所蔵)

年代がさらにさかのぼる可能性が出てきました。

現在のところ、長野市ではこうした古い土器は発見されていま

で、99(平成11)年の発掘調査で出土しました。土器の内側に付着した炭化物を測定し、今から約1万5000年前という大平山元I

つかりませんでした。が、破片を基に復元すると土器は図のような形になると推測されます。また、縁に刻みを入れるほか、細い粘土

線文はこうした古い土

線文はこうした古い土



ひもの上を刻む「隆起線文(りゅうきせんもん)」と呼ばれる文様を縁から垂れ下げたり、横方向に張り付けたりしています。隆起

器に特徴的な文様の一つです。大平山元I遺跡の土器には煮炊きの痕跡が残っていました。だから、今のところ最古の可能性が高い土器の用途は「煮炊き」であつたと思われま

す。煮炊きは食べられないものを食べられるものへと変えたはずで、そして多くのものが食料リフトに加わることで、縄文の食料事情にゆとりが生まれたと考えられるのです。

貫ノ木・県埋蔵文化財センター調査
研究員

◇放射性炭素年代測定法 動植物の遺存体が放出する放射性炭素の残った量から年代を知る方法。
◇年輪年代測定法 樹木の年輪を計って標準パターンを作り、それと年代を知りたいものの年輪パターンを比較して年代を知る方法。

古代への招待状

埋もれていた遺産

16

ヒトとサルは仲間
で、それらを総称して
霊長類と呼びます。遠
い昔、樹上で生活をし

ていた霊長類は、一部
が地上に下りて二足歩
行をするようになりました。それがヒトです。

そして自由になった
2本の前足は手となっ
て道具を使うことを可
能にしました。また、
直立姿勢は頭の重さを
体全体で支えることが
可能となって脳の発達
を促し、さらに手先が
器用になって徐々に複
雑な道具を作れるよう
になり、現在のわれわ
れまで進化しました。

初期のヒトは、一体
どのような道具を手
にしたのでしょうか。木
の棒や河原の石など自
然にある物を手にして
いたことでしょうか。し
かし、木などは腐って

道具・ナイフ形石器

残らないため、実際の
ところはよく分かりま

見るができます。今
世界最古の石器は今か

ち密な石打ち欠いて カッターや包丁の起源

せん。硬い石だけが石
器として、われわれが



上ゲ屋遺跡から出土した約2万年前のナイフ形石器（左は長さ3.3cm、市立博物館蔵）

ら約200万年前こ
ろ、アフリカで発見さ
れています。
では、日本列島に人

ころから人々が暮ら
していたと考えられま
す。この時代を旧石器時代
と呼び、石器が発見さ

が住み始めたのは一体
いつ頃からなのでしょう
うか。全国的に遺跡
が発見されるのが約3
万数千年前のため、この

れる縄文時代までの約
2万年間続きます。
北信地域ではどうで
しょうか。上水内郡信
濃町の野尻湖では3万

年前の石器が多数発見
されています。長野市
域の遺跡はというと、飯
網高原で現在まで残つ
かの遺跡が発見されて

された代表的な石器は
「ナイフ形石器」とい
われる道具です。チャ
ー、黒曜石、頁岩（けつ
がん）など、ち密な河原

うな形に仕上げたもの
は、刺したりする機能
が考えられ、狩猟用の
槍（やり）であったり
もしたでしょう。



いて、その中でも有名
な遺跡が芋井の上ゲ屋
（あげや）遺跡です。遺
跡の時代は2万年前こ
ろと推定されています。

上ゲ屋遺跡から発見
とがらせて木の葉のよ

石を打ち欠
くと、鋭い
切れ口を持
った石片が
取れます。
ナイフ形石
器はその鋭
い切れ口を
利用した石
器です。
台形や切
り出し小刀
のような形
に仕上げたナイフ形石
器は物を切るなど、加
工用のナイフの役割を
果たしたと考えられて
います。また、先端を
とがらせて木の葉のよ

大竹憲昭・奥埋蔵
文化財センター主
任調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

17

石鏃(せきぞく)は矢の先端に固定された石器で、「矢しり」または「矢の根石」と呼

の道具で、縄文時代には大変多く作られました。長野市でも縄文時代の遺跡からたくさん見つっています。写真は浅川にある松ノ木田遺跡から出土した石鏃で、多くは今から約5500年前の縄文時代前期後半のものと考えられます。

石鏃の石材は硬くて割れ口が鋭い特徴の石が選ばれました。長野市の遺跡で発見される石鏃には黒曜石、チャート、安山岩などが使われています。石材は遺跡の周辺で入手でき

道具・石鏃

ぶこともあります。弓を利用して矢を放ち、離れた所にいる動物を射抜いて捕獲する狩猟

るものと遠方で産出するものがみられ、特に地があり、そこから遺跡へ持ち込まれたと考

弓で狩猟 矢の先端に 縄文時代の画期的な発明



松ノ木田遺跡から出土した縄文時代前期の石鏃

角形・二等辺三角形のもの、矢と装着する部分へこんだもの、跡では茎の部分に天然のアスファルトが付着した石鏃が発見されており、石鏃と矢を固定

えられます。また、石鏃は時期や地域によって異なる形が作られました。正三

そこに茎(なかご)が作り出されたものなどいろいろな形が認められます。東北地方の遺



基本です。縄文人が狩猟の対象とした動物の種類は実に多く、熊、イノシシ、シカ、タヌキ、ウサギ、ネズミ、ムササビなどのほ

◇アスファルト 日本海沿いの秋田県、山形県、新潟県では天然のアスファルトが産出する。

弓矢を使った狩猟は縄文時代の大きな特徴です。弓矢は縄文土器と同じ頃から約1万3000年前の草創期に出現したと考えられ、ともに縄文時代の画期的な発明と評価されています。弓矢の出現は縄文時代以前の旧石器時代に比べて約60種以上に行われていた狩猟の方法を変え、より多くの獲物を仕留めることを可能にしたと推測されます。

研究員
實田明・県埋蔵文化財センター調査

古代への招待状

埋もれていた遺産

18

弥生時代の石器、それはまさしく人間が生きたために必要とした道具の一つです。動物を狩る、魚を捕る、植

物の実や根を得る、さらには食料を調理加工するなどの用い方があり、それぞれに適した石器が存在します。身体

を飾るためのアクセサリなども石器の種類と考えるとよいでしょう。

このようにさまざまな用い方をする石器は、当然ながら食生活の違い、社会の違いによって、種類の組み合わせに変化が見られます。狩りや採集を生活の習慣としていた縄文時代と食料の栽培を習慣としていた弥生時代では、道具としての石器に違いがあります。最も大きな違いは、食料栽培のための道具が発達すること、戦いのための武器が登場することです。

食料栽培、それは米作りであったと考えら

道具・弥生石器

れますが、稲の穂を摘み取る道具、考古学で

呼ばれる石器が出現します。さらには「磨製

生きるための「道具」

米の収穫と戦いさまざま

「磨製石庖丁(ませい いしぼうちよう)」と

石鏃(ませいせきぞく)と呼ばれる武器型の石器が登場することによって、東日本を代表する遺跡の一つとなつていきます。ちなみに磨製石庖丁はおおよそ10

期の集落あとですが、量・質ともに県内随一であり、東日本を代表する遺跡の一つとなつていきます。ちなみに磨製石庖丁はおおよそ10

たのか、はっきりとは分かりません。千曲川とその背後に広がる山々の豊富な岩石が、この地に「石器作り」のムラを誕生させ、周

の動き、流通といえるでしょうが。

◇12月27日付の第17回「道具・石鏃」で、写真の松ノ木田遺跡出土の石鏃は市埋蔵文化財センター調査研究員



松原遺跡出土の弥生石器・戦いの道具①と食料栽培の道具(県立歴史館蔵)



て知られていますが、中でも長野市内の遺跡からは大量に出土しています。

0点、磨製石鏃は約200点を数え、近県の遺跡と比べ20倍から30倍に及びます。

東寺尾にある松原遺跡は、今から2000年ほど前の弥生時代中

なぜこんなにも多くの「弥生石器」が存在し

辺地域のムラへと「弥生石器」を供給させていたのかもしれません。もちろん、豊かな水と肥沃な耕土を利用した米作り文化の定着があつてこそその石器

◇磨製石鏃 この石器を武器型石製品とする点は異論がない。しかしながら、その用途については、武器のほか、祭器とする考え方もある。◇大陸系磨製石器 弥生時代に中国大陸からもたらされたと思われる石器には、磨製石庖丁に磨製石鏃、太型鋸刃石斧(はまくりばせき)などがある。

古代への招待状

埋もれていた遺産

19

現代の生活になく
はならないものの一つ
に糸があります。化学
繊維や植物繊維など素
材も豊富で、衣服・タ

って糸を作り、どんな
製品があったのでしょ
うか。

奈良から平安時代の
遺跡を発掘すると、糸
作りに関連した道具も
時々発見されます。芋
引鉄（おびきがね・お
びきかなぐ）と紡錘車
（ぼつすいしゃ）です。
芋引鉄は「コ」の字形
の鉄製刃部に木製の持
ち手が付いており、皮
の中の繊維を取り出す
のに用いたと考えられ
ています。紡錘車は、
繊維によりをかけて糸
を紡ぐ道具で、中央に
穴の開いた円盤状の紡
輪（ぼうりん）と、そ
れを差し込んで糸を巻
く軸部の紡茎（ぼうけ

道具・芋引鉄と紡錘車

オル・袋などさまざ
な製品が作られていま
す。では、8-12世紀
ころの奈良から平安時
代にはどんな道具を使
てきています。

から繊維を採集し、そ
れを基に糸を紡いで、

布は信濃の国の特産

官人の衣服にも用いる

当時は主に麻（大
麻・苧麻）からむし

布を生産していたと考
えられています。これ
らの道具は長野市内で
も、松代町の松原遺跡
や篠ノ井東福寺の南宮
遺跡、若穂綿内の榎田
遺跡・高野遺跡などで
出土しています。



上の2本は紡錘車、下の2本は芋引鉄（県立歴史館所蔵）

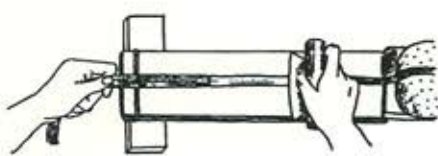
前科郷（さきしなのご
う）などの地名が記さ
れた布が今でも残され
ており、信濃国より麻
布が租税として納めら
れたことがよく知られ
ています。また、平安
時代になると「延喜式

布については、もう
一つ注意したい点があ
ります。それは信濃の
国の特産物であったと
いうことです。

奈良の東大寺にある
正倉院の御物の中に
は、筑摩郡山家郷（や
まへのこう）や安曇郡

るなど、「信濃布」が都
で普及していたことも
明らかになっています。
このほか「和名類聚
抄（わみなようるいじゅ

は、いずれも麻績郷
（おみのこう）が存在
したとあります。これ
も麻などの栽培や生産
に何らかの関連があっ



芋引鉄を使った麻かきの図
（県立犀川高校地歴クラブ「やまかい」
30号より引用）拡大図とも



芋引鉄の拡大図

紡錘車

うしゅう」という史
料には信濃国の各郡の
中にどのような郷が存
在したかが記されてお
り、伊那郡と更級郡に
北の筑北盆地

- ◇筑摩郡山家郷
- ◇安曇郡前科郷
- ◇更級郡麻績郷

現在の松本市の山辺一帯
現在の池田町付近が
現在の東筑摩郡本城村より

廣田和穂・県埋蔵
文化財センター調
査研究員

（参考文献）長野
県編「長野県史通史編
第一巻原始・古代」1
989年

古代への招待状

埋もれていた遺産

20

今から約1万5000年前の旧石器時代の終わりに、日本列島ではナイフ形石器文化に代わる文化が全国に

(さいせきしん)を道具として使うことから「細石器文化」と呼ばれています。

細石刃とは長さ2〜3センチ、幅5ミリ、厚さ1〜2ミリの細長い石器で、細石刃核(さいせきじんかく)という特徴ある形に加工された石(核)からはぎ取って作られます。細石刃核は作り方と形によって大きく2つの系統に分かれ、南ルートの細石刃核は円すい形や半円すい形で、関東地方から西日本、九州にかけて広がりました。

長野県でも南佐久郡の矢出川遺跡(やでがわ)で、

す。北ルートの細石刃核は断面が舟底形の細長いもので、北海道や

軸に並べて埋め込む 槍やナイフの替え刃に

79(昭和54)年5月、小田切の小野平(おのだ)で長野市内では唯一の細石刃核が発見されました。石材は頁岩(けつがん)で、長さ

ところでも小さく薄い細石刃はどのように使われたのでしょうか？実はこれこそ現代に通じるエッジソー(けつがわ)なもので、細石刃は木や骨で作

ことができる部品(替え刃)だったのです。一昨年、「昭和18・6・2 芋井修練道場住宅裏より出土」と書かれた石片とともに、

ろ出土したものと考えられます。当時はまた旧石器時代の研究はさされていなかった時代ですが、半世紀以上たってようやく目の見

て出土した「荒屋型彫器(あらやがたしやうき)」とよく似ています。この荒屋型彫器は、北海道から新潟県にかけて細石刃や細石刃核と一緒にたくさん見つ

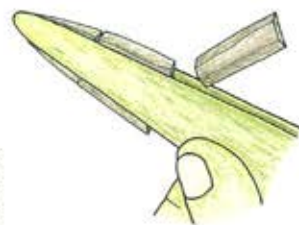
かっているものです。これにより、芋井にも掘花川対岸の小野平と同じ北ルートの細石器文化が伝わっていた証明となりました。

◇17日付の第19回「芋引鉄と紡錘車」の写真資料は松原遺跡出土のものでした。

山崎まゆみ 県埋蔵文化財センター調査研究員



芋井出土の荒屋型彫器



細石器の使用例



ある石器が見つかりました。石材は茶色の頁岩で、裏面にはやが「芋井道場出土」と「芋井道場出土」とある。この石器は、新潟県あり、おそらく同じく「荒屋(あらや) 遺跡

◇頁岩 粘土が固結した岩石。

◇荒屋遺跡 新潟県北魚沼郡にある遺跡で、多量の彫器(細い溝を掘るための道具)と細石刃、舟底形の細石刃核がセットで出土している。この遺跡から出土した特徴的な彫器を「荒屋型彫器」という。

広がりました。この文化は遠くアジア大陸の北部で誕生し、北と南から日本列島に入ってきましたが、「細石刃

わいせき)から多量の細石刃と円すい形の細石刃核が出土しています。

道具・細石刃

関東以北を中心に新潟、長野、岐阜まで広がりました。

古代への招待状

埋もれていた遺産

21

石斧(せきぐ)は旧石器時代、縄文時代、弥生時代に使われた道具です。石斧(いしお)の」といって、木を切

れていません。

例えば、旧石器時代の石斧の中にはナウマンゾウなどの動物の解体に使われたと考えられているものがあります。また、縄文時代では打製石斧、磨製石斧の2種類があり、打製石斧は土を掘る道具、磨製石斧は木を切ったり削ったりする道具と考えられています。

長野市立博物館の縄文時代のコーナーにひととき大きな石斧が展示してあります。松代町大室の宮ノ入遺跡で発見されたもので、長野市内では最古の石斧です。故森嶋稔さん

つたり削つたりする道具をイメージする人も多いと思いますが、必ずしもすべてが木を加工する道具とは考えら

道具・石斧

(前長野県考古学会会長)がこの石斧の発見の様子を、「遺物は植

語っている。採集された遺物は、すべて神子柴型石斧のみであつ

神子柴型 伝來說も 片面が平ら 断面D字型

林作業の際の小ビットから出たものであると採集者の宮本速雄氏は

て、5点である。ほかに採集されたものはない」と記しています。これらの石斧は、刃先だけを磨いているので局部磨製石斧と呼んで

考古学では神子柴型石斧と呼んでいます。そして、神子柴型石斧は大陸からもたらされたとする説があるのです。さて、宮ノ入遺跡の

石斧も、当時の人々に残されたのか、を知ることが重要です。残念ながら、すべて謎です。神子柴型石斧は全国

に、なぜか土の中に残されたのか、を知ることが重要です。残念ながら、すべて謎です。神子柴型石斧は全国

に、なぜか土の中に残されたのか、を知ることが重要です。残念ながら、すべて謎です。神子柴型石斧は全国



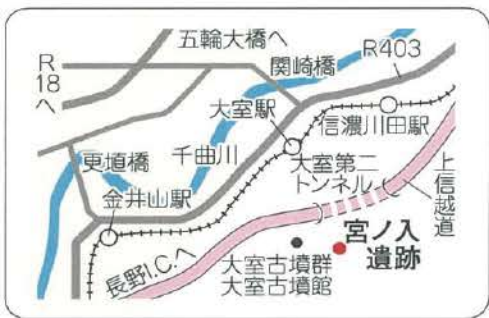
宮ノ入遺跡の石斧(清水一男さん寄託、市立博物館所蔵)

おり、片面が平らで断面がかまぼこのようにD字形をしています。今から約1万6000年前の、旧石器時代から縄文時代に移り変わる時期だけに見られるもので、

5点のうち1点は長さ約32センチもあり、とても実用とは思えません。外国では大きな石斧は宝物としての意味を備えているという例があります。宮ノ入遺跡の

◇打製石斧 石を打ち欠いて斧の形を作り出した石器。
◇磨製石斧 打製石斧に対し、最後に砥石(といし)で磨いて作られた斧形の石器。
◇神子柴型石斧 上伊那郡南箕輪村の神子柴遺跡より発見された石斧にちなんで名付けられた。

※宮ノ入遺跡の石斧は、2月29日まで県立歴史館で開催されている「神子柴遺跡の石器群」に出品されています。



鶴田典昭・県埋蔵文化財センター調査研究員

れませんが、その製作場所が分かった例はほとんどありませんし、どのような柄に付けられていたのかも不明です。小県郡真田町の唐沢日遺跡や上伊那郡南箕輪村の神子柴遺跡では石斧がまとまって出土しています。まとまってあることに何か意味があるのでしょうか。宮ノ入遺跡には、神子柴型石斧の謎を解くカギが眠っているかもしれません。

古代への招待状

埋もれていた遺産

22

上信越道須坂長野東インターチェンジ（IC）に向かうトンネル手前、若穂綿内の高速道路下には、弥生時代

後背湿地に水田、その境に墓や井戸を造り、営まれていたことが発掘調査の結果、明らかになりました。

春山ムラのSB01は

隅丸長方形で、中型の竪穴住居跡です。この住居は焼失住居であったため、当時の様子を臨場感をもって伝えてくれます。住居跡からは、たくさんの炭化材とともに、つぼ・かめ・鉢などの土器が出土し、太形蛤刃石斧（ふとがたはまぐりばせきふ）や扁平片刃石斧（へんぺいかたばせきふ）など、水稲耕作の本格化とともに普及

中期後半から後期に営まれた集落、春山ムラの一角がありました。春山ムラは千曲川の自然堤防上に竪穴住居、

道具・金属器の出現

した大陸系磨製石斧類が出土しました。

太形蛤刃石斧のう

弥生中期後半に鉄斧 善光寺平 銅腕輪や剣も

ち、5点は穴の中に固めて納めてありました。使用の痕跡はあま

長さ5.5センチの方形で、厚さ5.5センチの鉄製の斧（鉄斧Ⅱてつぷ）も出土しました。鉄斧は、扁平片刃石斧と同じ形で、機能も同じです。

善光寺平では、弥生時代中期後半ころから稲作と関係する弥生時代特有の石の道具（大陸系磨製石斧類）が本格的に普及し、併せて



春山B遺跡から検出された弥生時代のSB01住居跡（県立歴史館提供）

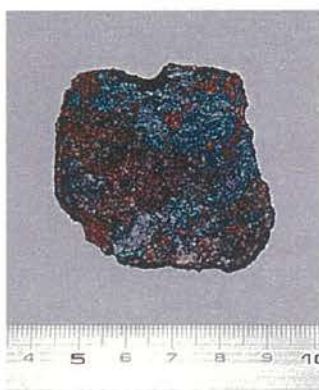
鉄という新素材の出現に弥生人はどんな思いを持ったことでしょうか。

時は今から約2000年ほど前の弥生時代中期後半です。

金属製の道具も導入されます。SB01と同様の鉄斧は、篠ノ井の光林寺裏山遺跡からも発見されています。中期後半は、栗林式という特徴的な土器が作ら

れ、大きな集落が形成されて、水稲耕作が本格化する時期です。こうした変化は、南関東の各地でも同様で、東日本の動向と共通して

器が消滅していきます。かま、すき先、くわ先、やじり、剣、刀、子、ヤリガンナ、釣り針などの農具、武器類など各種の道具に形



春山B遺跡出土の鉄斧（県立歴史館所蔵）



鉄斧の使用例

います。

中期後半に登場した鉄製の道具は、その後ノ井遺跡群からは多く飛躍的に導入され、石の鉄器が発見され、鉄

◇SB01 SBは埋蔵文化財センターで使用している竪穴住居跡の記号、01は発見順に付けられた番号。

の集中遺跡として注目されています。金属器には鉄素材のほか、銅素材の製品があります。鉄と同様、中期後半から本格的に出現します。腕輪である銅釧（くしろ）や銅鍔（ぞく）、銅剣といった武器類などが発見されています。現在、善光寺平一帯は、東日本の中で金属器を多く保有する地域として注目されています。

市澤英利・長野県埋蔵文化財センター調査部長

◇訂正 1月31日付の「石斧」の写真資料は、清水一男さん所有、市立博物館保管でした。

古代への招待状

埋もれていた遺産

23

弥生時代の布は、それまでの簾(すだれ)や蓆(こも)に似た織

則正しく上下入れ替え、その隙間に緯糸(よこいと)を入れて作る密度の細かい「織り布」が作られるようになったと考えられています。それに従って布を織る道具も、経糸と緯糸を規則正しく織る操作を能率良く行うことができる「機(はた)」が使われるようになりました。

弥生時代の機織り具は、現在も使われている「地機(じばた)」や「高機(たかはた)」のように、織り具本体が機台の上に載ったものではなく、機の部品

の一方をくいや木の幹

などに結び付けて固定し、もう一方の端を織

布の密度 細かく織る 経糸と緯糸を能率良く

道具・原始機

リ方で編まれていた「編み布」に加えて、経糸(たていと)を規

る人の腰に掛けて、織り具を保ちながら織る「原始機(げんしばた)」を使用していたと考え

あるため土器や石器などに比べて残りづらく、残念ながら機織り具一組の部品がそろつ



春山B遺跡から出土した赤漆付きの布片(県立歴史館所蔵)

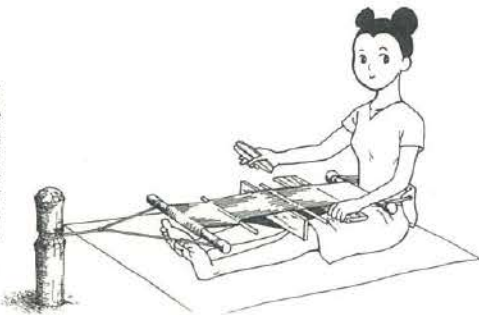
られています。原始機は幾つかの部品を組み合わせて作っていますが、木製で

て出土した例はありません。全国的には静岡県の登呂(とろ)遺跡や、大阪府の鬼虎川

(きとらがわ)遺跡などから機の一部の出土が報告されています。長野市内では、まだ

るための糸を紡ぐ道具である紡錘車の出土が報告されていることから、弥生時代の長野市で

原始機の使用例



弥生時代の機織り具の出土例はありませんが、若穂綿内の榎田遺跡などで、織り布を織

が、発掘されたわずかな布片や、土器に付いている布の圧痕から、繊維の材質や織り方の

が使われていたと思われ

も「原始機」が使われていたと思われ

弥生時代の「原始機」では、どんな布が織られていたのか。布自体はその性質上大変残りにくく、出土するのはまれです

長野市内では、春山B遺跡(若穂綿内)で今から約1900年前の弥生時代後期の竪穴住居跡から、本州では初めてとなる絹と思われる布片が見つかり、榎田遺跡では今から約2000年前の弥生時代中期の焼失した竪穴住居跡から、植物繊維で織られた炭化した布の一部が出土しています。

西香子・県埋蔵文化財センター調査
研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

24

器・金属器なども同時に
もたらしました。こ
れら伝来した道具や機
具は西日本各地の弥生
時代前期の遺跡で確
認され、次第に東日本

「弥生時代の始まり
は稲作の始まり」と、
よくいわれます。大陸
由来の稲作は、その技
術だけでなく稲作に伴
う農耕用木製品や石

に浸透してゆく過程が
遺跡の調査から明ら
かになってきていま
す。

長野県の発掘調査で
も北信地区で稲作の痕
跡である水田跡が数多
く調査され、弥生時代

中期から後期、さら
には古墳時代から平安
時代にかけての水田跡に
伴う水路などからおび
ただしい数の木製品が
出土し、そこから木製
農具も数多く発見され
ています。木製農具が
出ている長野市内の代
表的な遺跡としては石
川条里遺跡(弥生時代
中期から古墳時代前期
と平安時代の農具)、
川田条里遺跡(弥生時
代中期から平安時代の

道具・木製農具①

農具)、榎田遺跡(古
墳時代中期から後期の

耕具である鋤(くわ)
や鋤(すき)、整地に

鋤と鋤 作業の主力 土木全般にも使われる



古墳時代の農具(石川条里・
川田条里遺跡出土、県立歴史
館所蔵)＝県埋文センター10
周年図録より

これらは畑や水田に
関する農耕具であると
同時に、ある面では土
木作業全般に使われた
機具といえます。特に
木製農具の中でも鋤と
鋤は当時の農作業の中
で主力となり、そのた

の本体に鉄製の鋤先や
鋤先(耕作時のダメー
ジを受けやすい刃の先
端部分のみ)を取り付
けて使用されるように
なります。

そして5世紀中ごろ
の古墳時代中期には耕
作に画期が訪れます。
耕作力を飛躍的に増大
させるため、鉄製刃先
を鋤や鋤の先端だけ
なく、周囲をU字形に
囲んだ「U字形刃先」
の普及です。長野県内

使われるエブリ、収穫
にかかわる稲の穂を刈
る鎌(かま)、ほかに
は田や杵(きね)、田
下駄、槌(つち)など
さまざまな道具が知ら
れています。

弥生時代前期の鋤や
鋤は、すべて木で作ら
れていましたが、弥生
時代中・後期には木製

作に画期が訪れます。
耕作力を飛躍的に増大
させるため、鉄製刃先
を鋤や鋤の先端だけ
なく、周囲をU字形に
囲んだ「U字形刃先」
の普及です。長野県内

作力の向上ばかりでな
く、それまで掘削にか
なりの労力を要した造
成(岩盤や硬い地層な
ど)を効率良く、かつ
可能にしました。

鳥時代から奈良時代前
半の馬鋤が出土してい
ます。鉄や畜力(馬・
牛)の導入は稲作伝来
以後広がったといわれ
る財力の差をさらに加
速することとなり、社
会変革の要因の一端を
負っていたといえるで
しょう。



藤原直人・県埋蔵
文化財センター
調査研究員

では、榎田遺跡の5世
紀中ごろの時期の自然
の流路跡から多数出土
しています。

その形の鋤や鋤は近
現代のつい最近まで使
われていました。「U
字形刃先」の登場は耕

◇鋤 柄と刃の部分が60度くらいの角度でし
字状に屈曲した農具。
◇鋤 スコップのように柄と刃の部分が直線
的な農具。
◇馬鋤 牛馬の力で水田の耕土を破碎・整地
する農具。7世紀には畜力で耕土を起す犁
(からすき)が登場する。

古代への招待状

埋もれていた遺産

25

約3万数千年前—
万数千年前まで氷河時
代に暮らしていた旧石

器時代人。彼らはどの
ような住居に住んでい
たのでしょうか。

旧石器時代の遺跡を
発掘調査すると、石の
かけらが直径4—5㎝
の範囲にまとまって数
十点から多い時には数
十点出土します。これ
を考古学ではブロック
とか、ユニットなどと
呼んでいます。

このブロックを構成
する石のかけらは、石
槍(いしやり)やナイ
フ形石器といった石器
(石の道具)と石器を
作るうとして打ち欠い
たときに出た石片類で
す。つまりブロックは
旧石器時代の人々が石
器を作った作業の場で
あったと同時に、石器
を使用し、使用に耐え

なくなつたものを捨て
た場であつたと考えら
れています。

石器製作や調理の場 狩りをしながら遊動生活

住居・ブロック礫群

れています。
石器にかかわる製
作、使用、廃棄の場、
言い換えれば旧石器時

ブロックとは別に赤
く焼けた河原石が集中
して発見されることが
あります。これを礫群
と推定されています。



3万数千年前、野尻湖周辺信濃町日向林(ひなたばやし)B遺跡のムラの推定復元模型。ここでは屋外で作業や調理を行ったと推定される

代人の作業のいろいろ
な場面が集約されてい
る空間であつたと推定
されます。

(れきぐん)と呼んで
います。礫の表面には
おこげが観察されるこ
とがあるので、たき火

で焼かれた石の上に肉
を直接載せて焼いた
り、木の葉などに包ん
だ肉を蒸し焼きにした
ことが想像されていま
す。

つまり、礫群は調理
の場であつたと理解さ
れています。ほかに炭
粒の集中や焼け土の跡
なども発見され、礫群
とともに火の使用にか
かわる場であつたこと
が想定されています。

作業の場としてのブ
ロック、調理の場とし
ての礫群までは分かっ
てきました。では旧石
器時代人は一体どこで
寝起きしていたのでし
ょうか。現時点ではよ
く分かっていません。

掘り込んだ竪穴住居を
造り、定住生活をする
ようになりませんが、旧
石器時代は狩りをしな
がらの「遊動生活」を
送っていたと考えられ
ています。おそらく、
そう太くはない木を数
本束ねた円すい状の骨
組みに動物の毛皮や木
の皮などをかぶせた簡
易なテントの仮小屋が
彼らの住居であつたと
考えられます。

日本の旧石器時代遺
跡数は4000カ所ほ
どあるといわれていま
すが、柱穴などがあり、
住居を想定できる遺構
はわずか十数例しかあ
りません。神奈川県
田名向原(たなむかい
はら)遺跡では、ブロ
ック、礫群、柱穴を持
つ住居状遺構が隣接し
て発見される状況か
ら、作業や調理は屋外
で行い、そのすぐ隣に
住居があつたと推定さ
れます。

大竹憲昭・県埋蔵
文化財センター主
任調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

26

言っても木造の一戸建て、コンクリートの高層アパートなどさまざま

今、皆さんはどんな住まいで暮らしていますか。「家」と一言で

ますが、基礎の上に柱が建ち壁を持った構造は同じです。また、中は居間や台所などいろいろな部屋に分かれていると思います。

さて、縄文時代の人たちは一体どのような住まいに住んでいたのでしょうか。縄文時代の住まいは竪穴住居と呼ばれるものが一般的です。

竪穴住居とは地面を掘りくぼめて床とし、その中に柱を建て、草などで屋根をふいた構造の住居をいいます。住居の中央部には炉(いろり)が造られて

住居・竪穴住居

形や大きささまざま 平安時代まで使われる

います。しかし、柱材や屋根材などは長い年

月の間に朽ちて、住居の上屋構造は残っていないので、発掘調査では、住居のくぼみや柱

の形や大きさなども変化を遂げています。形では円形やた円形のものが多いのですが、時



縄文時代の竪穴住居復元図(県埋蔵文化財センター10周年図録より)

穴、炉の跡などが見つかることになります。縄文時代は約1万年もの長い期間があるもので、その間に竪穴住居

期によっては四角い住居が主体となる時期もあります。大きさもさまざまですが、直径4〜5メートル

度が一般的といえます。これは約6畳ほどの大きさとなります。6畳一間のワンルームとい

はないでしょうか。炉の構造も床をたたきとるわけではなく、掘りくぼめただけのもの、土器を埋めたもの、



縄文時代の竪穴住居跡(御代田町川原田遺跡)＝浅間縄文ミュージアム提供

ったところでしょうか。現在のようになんか家具などがなければ、一家が住むにはそれほど狭くはなかったのだ

川原石で囲ったものなどいろいろなものが時期によって流行します。ところで、長野市内

では縄文時代の住居跡はそれほど多く発見されているわけではありません。浅川の松ノ木田遺跡、松代町の松原遺跡や村東山手遺跡、県町の旭町遺跡、若穂の宮崎遺跡などで今から約6000〜3000年前の縄文時代前期から晩期の住居跡が見つかっています。

なお、竪穴住居は縄文時代だけに造られた住まいではなく、特に東日本では縄文時代以降平安時代までの長い間、一般的な住まいとして使われ続けます。

廣瀬昭弘・県埋蔵文化財センター調査第一課長

古代への招待状

埋もれていた遺産

27

長野自動車道猿狩谷ジャンクション（JA）から眺める千曲川とその両岸に広がる平地は、豊かな恵みをもたらせて

くれる大地の存在を彷彿（ほうふう）させます。それは、弥生人にとっても同じ思いだったことが、高速道建設に

先立つ発掘調査で次々に明らかになりました。

SAから善光寺平へ降り立った一帯が、石川条里遺跡、篠ノ井遺跡群、長野インターチェンジ（IC）を過ぎた一帯が松代の松原遺跡、若穂の春山遺跡、綿内の榎田遺跡と、弥生時代の大集落の一端が、約2000年の時を経てわたしたちの目の前に現れました。

千曲川両岸に広がる自然堤防上は、集落域になっていますが、その風景は弥生時代と同じでした。それは、高速道建設に伴う発掘調査だ

さて、弥生時代の集落は、どんな住まいで構成されていたのでしょうか。

「竪穴」が最も一般的な形に統一性 社会の証し

住居・弥生人の住まい

けではなく、さまざまな発掘調査から明らかになってきています。

最も一般的な住まいは、地面を掘りくぼめて

ようか。



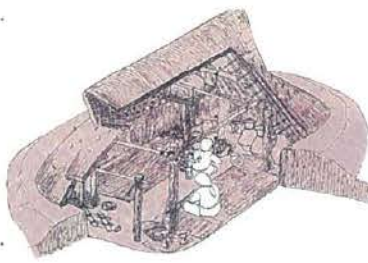
篠ノ井遺跡群の竪穴住居（県立歴史館提供）

建てた竪穴住居でした。中期後半のころの住まいは、平面形が円形、だ円形、隅丸長方形であったりします。中央に炉を置き、それを取り囲むよ

上屋を築き、柱と柱の間中下には炉を、炉の反対側の壁際には入り口施設を造りました。

土する遺物もそれぞれですが、平面形や内部施設などの基本形は同じで統一性があります。個々の竪穴住居は、それぞれの背景・目的

ています。しかし、統一性のあることは何らかの規制なり慣習なりがあったこと、それを営んでいたことを教



居のほかは平地住居、掘り立て柱の建物がありました。平地住居は、松原遺跡から150軒余発見されました。時期は中期後半で、幅約30・40メートル、深さが検出面から平均10メートルの溝が円形に巡り、内部に柱や炉がある建物ですが、後期へは継続しないようです。掘り立て柱の建物は、1間×1間から8間×1間とその規模に違いがあり、平地式建物、高床式倉庫、やぐらなどの性格が考えられています。

市澤英利・県埋蔵文化財センター調査部長

うに柱を立て、桁（け）や梁（はり）を渡して上屋を築きます。

可能性があります。篠ノ井遺跡群から発見された後期の竪穴住居を比べると、その大きさが大形、中形、小形、極小形とあり、出

を建てられ、それを持ててくれます。集落内には、竪穴住

◇竪穴住居の大きさ 篠ノ井遺跡群からは、150軒余の弥生時代後期の竪穴住居が発見され、大きさはさまざまであった。そこで、平面形で長軸9・0メートル・短軸5・7メートル程度を大形、同6・9メートル・5・4メートル程度を中形、4・9メートル・4・2メートル程度を小形、3・0メートル・2・6メートル程度を極小形としてとらえた。

古代への招待状

埋もれていた遺産

28

日本では今から約1万3000年前の縄文時代以来、竪穴住居の中央部に炉が置かれ、調理・照明・暖房・除

湿・火種保存などの機能を果たしてきました。それが5世紀中ごろから6世紀にかけての古墳時代中・後期に

なると竪穴住居内にカマドの出現という大きな変化が起こります。カマドは竪穴住居の壁際に設置された調理専用の厨房(ちゆうぼう)施設で、竪穴住居内に台所空間が成立したことになる。

カマドは中国大陸に起源を持つもので、朝鮮半島から渡来人によって日本に伝えられました。日本で、壁面にカマドを造り付けた竪穴住居が出現したのは3世紀から4世紀初頭で大阪府の遺跡で発見されています。

その後、5世紀初頭に

紀中ごろに長野県を含めた東日本に出現し始め、6世紀にはあまねく

中国大陆から伝わる 空間利用や調理法変化

住居・カマドの出現

北九州をはじめ大阪府や奈良県を中心とする近畿地方に広まり、5世紀中ごろに長野県を定着していきました。長野市上松の長野高校敷地内に当たる本村

東沖遺跡では、5世紀代の古墳時代中期の集落が発掘されました。調査の結果、5世紀中ごろにカマドが導入され、5世紀後半にはほ



本村東沖遺跡30号住居跡。上方はカマド跡、柱穴に当たる穴跡から間仕切り跡の溝が伸びる(市埋蔵文化財センター提供)

ド出現の最も早い事例の一つであり、本村東沖遺跡が新来文化を積極的に受け入れた拠点的な集落であったことがはっきりしました。西に



カマドを用いた家(県埋蔵文化財センター10周年図録より)

とんどの竪穴住居で使われていたことが分かりました。この使用例は、長野市若穂の榎田遺跡や飯田市内の遺跡とともに長野県内におけるカマ

隣接する地附山(じつぎやま)古墳は全長39mの小型の前方後円墳で、この時期にこの地域を支配した有力豪族の墓と考えられます。このように、5世紀中

6世紀には県内全域に定着していきました。カマドの出現は人々の生活スタイルに大きな変化をもたらしました。カマドを用いたことで、炉を使っていた

ころに大和政権と結び付きが強かった善光寺平南域や飯田市域を中心とする下伊那地域での拠点的な集落にいち早くカマドが導入され、

ころよりも住居内の空間利用が広がり、本村東沖遺跡の竪穴住居跡に見られるように、住居内を間仕切りすることによって目的別の空



高め、糲(もち)米を蒸した強飯(こわめし)や携行食の糲(ほしい)など、調理方法が多様化しました。さらに、カマドで煮炊きに用いる甕(かめ)の長胴化や蒸し器である甑(こしき)の大型化をもたらしました。これらカマド使用による生活スタイルの変化と時を同じくして、銘銘器(めいめいき)と思われるおわん形の「坏(つき)」という食器類の増加も見られるようになりました。

宮脇正実・県立歴史館専門主事兼学芸員

間を生み出しました。また、煙道(えんど)の併設は熱効率を上げた。煙道 煙を室外へ出すトンネル状の穴 ◇銘銘器 食物を一人一人に取り分けるための器

古代への招待状

埋もれていた遺産

29

奈良・平安時代の役所は、中央と地方のものに分かれます。中央には平城宮や後の平安宮などの宮がありました。地方には東

とに郡衙(ぐんが)が置かれていました。さらにその下の郷に郷の役所である郷衙(ごうが)があったとする考え方もありますが、これには異論もあります。

このほか、中央と地方を結ぶものとして、現在の国道に当たる官道におよそ30里(約16*)ごとに命令の伝達や公務旅行者のために馬を常備した駅家(うまや)がありました。これらの役所の中心となる政庁の建物は、国府では方形区画の北側に正殿、南側の東西に脇殿が配される「コ」の字型配置が一般的で、郡衙

住居・古代の役所

西の要衝に鎮守府(多賀城、後に胆沢城)と大宰府、現在の県に当たる信濃などの国(こと)に国府、その下の水内郡・更級郡などの郡(こ

でも同様の「コ」の字型やその変形の「品」字型、「ロ」の字型配置を取っています。地方にあつて

配置の縮小版となっており、中央の地方支配の意識が見て取れます。このほか、国府には

コの字型の建物配置 地名や遺物で位置推定

も、北側に大極殿院、その南側の東西に南北棟が並ぶ朝堂院が配された平城宮など、宮の官衙

政所・税所などの「所」と呼ばれる各種の施設、国司の住まいである館舎、それに学校などがあり、郡衙にも倉が立ち並

や木簡・墨書土器などから分かっています。長野県内には、信濃国と、奈良時代に一時分国された諏訪国の2



屋代遺跡群出土の国符木簡(県埋文センター「長野県屋代遺跡群出土木簡」表紙より)

県町遺跡出土の蹄脚硯(市立博物館所蔵「長野市の文化財」より)

んだ正倉院 郡司の住まいである館(たち、郡司の食事を用意した厨(くりや)などの施設があつたことが、文献

つるの国府、伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・水内・高井・埴科・小県・佐久の10の郡衙があつたと考えら



土などから、間接的に古代の役所の存在を推定することができると考えられます。信濃国

に官営だつたと考えられる神社や寺院の存在、国府では「こつ

府は、奈良時代に国分寺のある上田市に置かれたものが、平安時代

れますが、残念ながら飯田市の恒川(ごんが)遺跡で伊那郡正倉と見られる掘立柱建物が発掘された以外、役所の建物跡は発見されていません。

ただし、建物自体の発見はなくても、古代土などから、間接的に古代の役所の存在を推定することができると考えられます。

長野市周辺でも、千曲市の屋代遺跡群では国符木簡が出土したことから信濃の初期国府または埴科郡衙が、長野市の県町遺跡では蹄脚硯が出土したことから水内郡衙が、付近に存在したと推定されています。

◇里 令制では、1里は5町で約545坪、後に6町約655坪を経て36町約3・9坪になった

◇大極殿院 天皇が政務や儀式を執り行った所

◇朝堂院 八省などの役人が執務した所

◇国司 守・介などの中央から派遣された国の上級役人

◇郡司 大領・小領などの地元の有力者から選ばれた郡の上級役人

◇墨書土器 墨で字を記した土器

◇国符木簡 国から郡などの下級の役所にあてた命令・伝達を記した木の薄板

◇蹄脚硯 蹄(ひづめ)の形をした脚の付いた硯で高級品

記した土器

上田真・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

30

13世紀の鎌倉時代には農業技術が進歩し、水路などの灌漑(かんがい)設備が整うにつ

れ、稲作の生産力が高まると同時に、新しいムラの形が成立してきます。この「鎌倉のムラ」の

成立を前の時代に当てる平安時代末のムラと比較してみると、一度

物跡が発掘によって確認されています。上信越

途切れた後に再び造られたり、以前のムラとは異なる場所に造られるようになったことが、発掘調査からうかがい

知ることができます。この平安時代の末から鎌倉時代にかけての大

きなうねりは、新しい開発の時代の幕開けともいわれています。

この「鎌倉のムラ」にかかわる良好な遺跡は、残念ながら長野市内では調査されていません。長野市の隣の千曲

市では、この「ムラ」と思われるまとまった建

自動車道建設に先立ち更道ジャンクションよ

住居・鎌倉のムラ

稲作の拠点 開発盛ん 建て替えて柱穴無数に



千曲市屋代遺跡群での中世集落遺構
(県立歴史館提供)

と呼ばれる遺跡です。

調査の結果、13世紀

ころの建物の跡が多数見つかりましたが、その

西側には、その柱穴の位置と大きさから、

四方に庇(ひさし)を持った、集落の中心的

り南側、水田が広がる約2・3㌥の区間が発掘調査されました。更道

中でも、比較的建物跡が少ない西側と、無数にある東側に分けられることが分かりました。

建物があったと考えられます。これは「屋敷」と見ていいでしょう。それに対し、柱穴の多

が行われていたと考えられます。また、周囲には条里水田と思われる区画や畑の畝跡も見

驚くことに現在の地割りとはほぼ一致していたのです。今の水田の区画はこの時期にできていたわけです。

この一帯は、

も負けず、農業の生産

後半に幹線用水

を上げようと努め、形

の工事が行われ

たものの、洪水

によってすぐに

埋没してしま

ますが、その後、

12世紀から13世

紀の鎌倉時代に

再び水田が広が

っていたことが

分かってきたの

です。これは、

鎌倉期に用水路

の大規模な再開発が行

われていたことを推察

させます。さらに、こ

のときできた水田は、



松本市北栗遺跡の中世のムラ復元図(県埋文センター10周年図録より)

い東側は「別の建物」、例えば単純な造りの住居や倉庫などが集中し、短期間で建て替え

豊田義幸・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

32

縄文時代の住居跡は一般的には地面を掘りくぼめた竪穴住居跡と

にかけて、住居の床に扁平(へんぺい)な石を敷き詰めた「敷石住居跡」が出現し流行します。

敷石住居の形は一般の竪穴住居と同じ円形もありますが、円形の住居に出入り口の張り出し施設が付いた形態のものも多く、「柄鏡形敷石住居跡」とも呼ばれています。

こうした敷石住居の出現には、「敷石」と「張り出し部」といった住居施設の変化が関係していると考えられます。敷石は住居内に造られた石壇や石柱と

いった石を用いた施設、張り出し部は住居入り

口部に埋め甕(かめ)を設置した施設で、この2つが結合し拡大し傾向がうかがえます。

4000年前以降に流行 出入り口 張り出し付く



村東山手遺跡の敷石住居跡 (県埋蔵文化財センター提供)

て敷石住居が成立したとも考えられています。敷石住居跡が発見される地域は中部地方が

れ、時期や地域によって変化も見られます。こうした敷石住居跡の性格については、祭祀(さいし)などに伴う特殊な住居や施設で

町村東山手(むらひがしやまて)遺跡で10軒の敷石住居跡と人骨を伴う墓跡などから成る縄文時代後期前半の集



望月町平石遺跡の敷石住居跡 (平石遺跡報告書より)

住居内に施される敷石には、住居全体あるいは炉の周辺に敷くもの、張り出し部から炉にかけて敷くものなどいろいろな形態が見られます。

落が発見されています。また、千曲市屋代遺跡群でも縄文時代中期後半の敷石住居跡が見つかっています。

運び、住居に敷いたのでしょうか。

廣瀬昭弘 県埋蔵文化財センター調査第一課長

住居・敷石住居

呼ばれるものですが、今から4000年前以降の中期後半から後期

古代への招待状

埋もれていた遺産

33

長野オリンピックの開会式場となった篠ノ井東福寺の南長野運動公園。この地下には、貴重な遺跡が眠っていました。

オリンピックを機に1000年の歳月を経て、わたしたちの前に姿を現したのは南宮(なんぐう)遺跡です。ここからは、誰も予想

していなかった1000軒を超える平安時代の住居跡が発見されました。工事に伴う調査期限が迫る厳しい状況の中で、長野市埋蔵文化財センターを中心に、多くの人の努力によってわたしたちの前に当時の姿を見せました。

南宮遺跡は、平安時代とともに始まり、平安時代後期には幕を閉じてしまつ遺跡です。

仁和4(888)年、北信地方は空前の大水害に襲われたことが記録に残っています。県内ではこのころを機に、集落が急速に終息していったといえます。

住居・古代のムラ

が、南宮遺跡は逆に拡大を遂げていきます。その理由は、強力な指導者を得たことが大きな遺物や遺構など

な人物だったのでしょうか。ほかの遺跡ではあまり見られない特別な遺物や遺構など

1000軒超す南宮遺跡 遺物 強力な指導者示す

かったようです。荘園の領主の住む村、それが南宮遺跡なのです。領主となった人はど

が、具体的な人物像を教えてください。

まず名前ですが、出土した陶製の印鑑から「宗清」という人物名が分かります。身分は

の礼装用衣服に使用されたものかもしれません。八稜(はちりょう)鏡の出土も身分の高さを表しています。

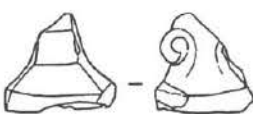
溝に囲まれた区画の中に大型の竪穴住居や掘立柱建物などが立ち並び、たくさんの鍛冶(かじ)工房を持つなど他と隔絶した力をも示す

していたと思われます。そこから出土した多くの土器や灰釉陶器などは、農業労働力を確保するための饗宴を催し、酒を振る舞うために使用されたと想像されます。

このようにたくさんの労働力を集約して生産された物は、転用硯(てんようけん)に入れた朱でチェックされ、「宗清」の印が押されて、重に管理されたのでしよう。鉄製の刀子(とうす)は、都に送る付け札の木簡を削るのにも使用されたのか



南宮遺跡とオリンピック開閉会式場
(市埋蔵文化財センター提供)



「宗清」銘の印(市埋蔵文化財センター所蔵)

役人が使用する帯金具の出土で、地方の役所(郡衙)とつながり、

東西・南北とも1100(約1町)の方形の

ので、領主と呼ぶのにふさわしい屋敷構えを

る付け札の木簡を削るのにも使用されたのか

◆帯金具 役人のベルトに付ける飾り金具。銅製や石製のものがあり、材質や大きさによって身分の違いを表した。

◆刀子 小刀、文房具のほか、あらゆる用途が考えられる。

◆転用硯 土器としての使用が終わったものを、すずりの代用品として使用したもの。

◆土鍾 漁労用の網の重りとして使用した土製の品。ひもを通せるように中空になっている。

石上周蔵・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

34

「ぶき」の民家が普通で
した。
日本に瓦を作る技術
が伝えられたのは、6
世紀後半の飛鳥寺造営
のころとされています
から、瓦が一般に普及

現代では、家の屋根
に瓦をふくことは決し
て珍しいことではあり
ませんが、瓦屋根が一
般的となるのは明治時
代以降のことです。それ
以前は「草ぶき」「板

するには、かなり時間
がかかっているわけで
す。

長野県内では奈良時
代の少し前、7世紀後
半ごろの遺跡から瓦が
出土しはじめます。東

筑摩郡明科町の明科廃
寺跡や千曲市の兩宮廃
寺跡などが知られ、古
代の寺院や役所の造営
を契機に、県内に伝え
られたものと考えられ
ます。

長野市内では、以前
から篠ノ井石川の上石
川廃寺跡や現在の善光
寺境内周辺の元善町遺
跡(善光寺の前身寺院
などが古代瓦が採集さ
れた場所として知られ
ていましたが、発掘調
査による古代瓦の出土
は昭和59年―60年に行
った若槻の「浅川扇状
地遺跡群牟礼バイパス
B・C・D地点遺跡」

住居・古代の瓦

近くに窯跡の可能性 寺院や役所造営で県内に

(以下 牟礼バイパス遺
跡)での調査などに限
られています。この遺
跡では、平安時代の集
落が確認され、竪穴住
居跡などから土器など

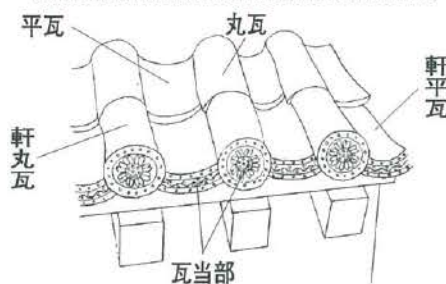
とともに、古代瓦が出
土しています。ではど
んな瓦だったのですよ

うか。

日本の瓦屋根には
「丸瓦」と「平瓦」を
組み合わせる「本
瓦ぶき」と、両方の機
能を兼ね備えた「棧
(さん)瓦ぶき」とが
あり、現在一般的に住



牟礼バイパス遺跡から出土
した軒平瓦



丸瓦も平瓦も軒先に
は「瓦当部(がとうぶ)」
という文様を持つ「軒
丸瓦」と「軒平瓦」が
用いられました。牟礼
バイパス遺跡では、こ
れら軒丸瓦・軒平瓦・
丸瓦・平瓦が合わせて

「がた」からの型抜きに
よるもので、同じ型
から幾つもの瓦を作り
出せます。生産地の窯
跡から出土した瓦と消
費地である寺院や役所
跡から出土した瓦の文
様が同じであれば、そ

宅で使用する「棧瓦」
は江戸時代に考案され
たものです。「本瓦が
き」で屋根をふくには、
軒先から棟に向けて平
瓦をふき重ね、平瓦の
列の間を丸瓦の列で覆
いかぶせます。

約200点出土してお
り、軒丸瓦には「蓮華
文(れんげもん)」、軒
平瓦には「唐草文(か
らくさもん)」の文様
が施されていました。

これら瓦当文様は、
普通、木製范型(はん
がた)からの型抜きに
よるもので、同じ型
から幾つもの瓦を作り
出せます。生産地の窯
跡から出土した瓦と消
費地である寺院や役所
跡から出土した瓦の文
様が同じであれば、そ

の流通が理解できま
す。
一方、牟礼バイパス

一方、牟礼バイパス



このように瓦の存在
は古代の善光寺平に瓦
ぶき屋根の建物があっ
た証拠であり、その建
物は寺院などの社会的
・経済的な役割を示す
シンボリックな役割を果
たしていたと考えられ
ます。

出河裕典 昭和小学
学校教諭

◇瓦塔 土製の小塔で三重や五重の塔などがあ
る。須恵器(すえき)と同じように1000度以
上の高温で焼成されるものが多い。
◇鷗尾 寺などの大きい建築物の屋根の両端に
取り付けられた魚の尾ひれの形をした飾り。

古代への招待状

埋もれていた遺産

35

かた)や居館(きよか
ん)と呼びます。長野
市内には中越館・押鐘
城・盛伝寺館(いずれ
も吉田)など室町・戦

戦いに備えて堀と
土塁(どるい)・堀で
守りを固めた中世の
武士の屋敷を館(や

国時代の居館跡があり
ました。しかし、これ
らの居館跡は、昭和40
年代に都市化が進む
と、開発によって多く
が破壊されてしまいま
した。

中野市にある高梨氏
館跡は四方に土塁や空
堀がよく残り、県下で
も随一の居館跡として
知られています。居館
の大きさは南北100
㍎、東西130㍎のほ
ぼ方形です。土塁はも
つとも高いところで
3・5㍎、空堀はよく
残っているところで幅
8㍎、深さは2・5㍎
あります。

高梨氏は永正7(1
510)年ごろ、上高

住居・武士の屋敷

土塁や空堀 庭園も 県下でも随一の高梨氏館

井都小布施町から中野
地方に進出し、中野氏
を滅ぼして本拠地とし
ました。居館跡は、昭

和61(1986)年か
ら平成5(1993)
年まで史跡公園整備の
ため発掘調査が行われ
ました。



県下で随一を誇る高梨氏館跡



高梨氏館の土塁(右)と空堀
(中央のくぼみ)の跡

個の石組みがあり、そ
の前面に池が広がって
いました。池の岸は山
石や河原石で、複雑な
線を構成しています。

例は、全国的にも珍し
いことです。
高梨氏は三条西実
隆ら京都の文化人と親
交があり、積極的に京

の屋敷をモデルとし
た屋敷が地方でも造ら
れるようになりまし
た。
また南側の土塁の

居館内の東部分から
建物跡10棟が検出さ
れ、このうち主殿とみ
られる建物の南側に庭
園が造られています。

池の周囲には回遊式
の園路が設けられ、池
中央には「中島」とみ
られる石組みもありま
した。地方の武士の居
館に庭園が残っている

都の文化を取り入れ
ました。こうして室町
時代には、京都の将軍
さ2・2㍎の築地堀
り、日常生活をする座敷がある。



(ついじべい)が埋ま
っていました。これに
より、土塁が築かれる
以前には築地堀が巡ら
れていたことが分か
りました。

出土した中世の土
器には14世紀初めのも
のもあり、庭園や建物
が見つかった面より
も下に何層かの遺構面
が存在します。この
居館跡は、高梨氏以前
の領主(中野氏か)に
よって造られ、高梨氏
によって拡張・整備さ
れたとも考えられま
す。

酒井健次・長野県
立歴史館専門主
事・学芸員

22日から14面に掲
載します

古代への招待状

埋もれていた遺産

36

鎌倉時代の僧で「踊念仏」で知られる時宗開祖の一遍が、全国行脚している様子が描か

の中に「掘立柱」と思われる建物が何棟か見えます。

上信越道更埴ジャンクション(JCT)ー五里ヶ峯トンネル間にある屋代・更埴条里遺跡では、11世紀まで見

られた竪穴建物跡が12世紀になるとほとんどなくなり、何棟かの掘立柱建物跡のみが同時にあった状況が分かりました。

中世では平安時代まで見られた竪穴建物が減少し、掘立柱建物が広く用いられていくというのが一般的な説で、このことが長野市

れた「一遍上人絵伝」には善光寺や佐久の場面があり、そこには堀や溝で囲まれた屋敷地

を含む善光寺平でも発掘の中で明らかになっ

住居・中世人のすまい

物が見られたと考えられています。

「掘立柱」が広く普及 さまざまな建物が存在

てきました。おそらく一遍上人の絵に近い建

また、他県の遺跡です。

は掘立柱建物の内部が幾つかの部屋に分けられていたと考えられる



松代町大室の小滝遺跡の建物跡（県立歴史館提供）

例が見つかれば、掘立柱建物の普及は建物内を部屋に区切る使い方も進んだと考えられま

く、四角く掘り下げた竪穴建物跡も依然としてありました。松代町大室の小滝遺跡では掘

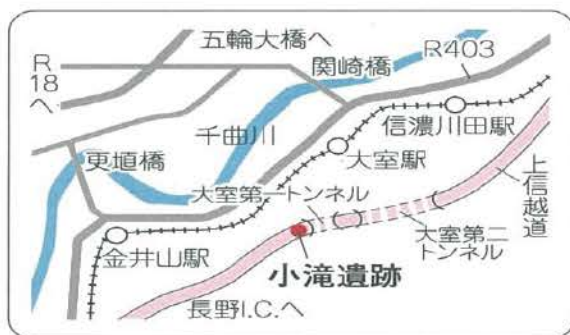
立柱建物跡のほかに竪穴建物跡が見つかっています。しかし、建物の数・規模などから生

活の中心は掘立柱に移り、竪穴は例えば貯蔵

これ以外に基礎石の上に建物を建てる礎石建物もありました。礎

石建物は梁（はり）と組み合わせないと柱は建てられず、部品の組

み合わせが複雑になることから寸法も正確に取る必要がありました。



のための「むろ」や作業小屋などとして使われたと考えられ、竪穴は「従」的立場の建物になっていったようです。

よりも礎石建物の方が複雑な構造で、より高度な技術が必要であり、この順で普及したようです。これ以外にも建物の痕跡が残りに

くいたために、長野県内では未発見ながら板壁を直接埋めて建てる建物もあったと推測されています。

このように中世にはさまざまな構造の建物が存在し、それぞれ用途や、技術・材料の入手方法をはじめ、階層や職業の違いなど住む人によっても構造や規模が異なっていたと推測されています。県内各地域で建物によって構成が違ふ様子もあり、遺跡で見つかる建物跡から土地ごとの生活スタイルや社会構成がうかがえると考えられています。

中野亮一・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

37

す。そのような生活を送っていた人々に身を飾るようなアクセサリ

旧石器時代は動物の狩りをしながら移動生活をしてきた時代で

1を着ける精神的な余裕があったのでしょか。日本全国には5000力以上の旧石器時代の遺跡があるといわれていますが、アクセサリといえるものが出土した遺跡はわずか数遺跡しかありません。

そのような中、上水内郡信濃町の日向林(ひなたばやし)B遺跡ではアクセサリの可能性がある石器が見つかっています。この遺跡は磨製の石斧(せきこ)や台形石器(たいけいせつき)と呼ばれる石器がたくさん出

アクセサリ・旧石器時代

最も古い有孔石製品 精神的ゆとり生まれる

土したこと有名な約3万年前の遺跡です。



日向林B遺跡で見つかった有孔石製品

ひん)と呼ばれています。色は赤褐色で、砂岩という岩石が使われ

の穴が貫通しています。残念ながらこの穴は人工ではなく、自然

アクセサリと思われ、中央に直径約2センチの穴が通っています。直径約4センチ、厚さ約3センチの大きさ

品(ゆづりせき)で、中央に直径約2センチの穴が通っています。直径約4センチ、厚さ約3センチの大きさ



跡を残したと考えられる旧石器時代人が持ち込んだ石であることは間違いありません。この砂岩の有孔石製品は

約1万5000年前の北海道の遺跡で10点の玉(こたま)と2点の

にできたものと思われる。しかし、遺跡内からは同質の岩石が全く出土しないことから、遺

現在の宝石のように美しい色であったり、キラキラ輝いているわけでもありません。穴の開いた石が珍しかった

のでしょうか。本当にアクセサリ

ーとして使用されたかどうかは分かりませんが、実用的な道具ではないと考えられます。アクセサリと考え

垂飾(たれかざり)が、約3万年前の千葉県の遺跡で2点の垂飾があります。日向林B遺跡の有孔石製品は、千葉県の例と並んで日本でも最も古い例となります。

まだまだ類例は少ないですが、3万年前の旧石器時代の人々は狩猟だけでなく、有孔石製品のような非実用的な道具を持ち歩く精神的な「ゆとり」を持っていたと考えてもよいでしょう。

谷和隆・県立歴史館専門主事・学芸員

古代への招待状

埋もれていた遺産

38

人が身を飾る(おしやれ)のは、世の常でしよ。それにしても、

大昔には一体どういった身の飾り方をしていたと考えられるのでしょうか。

遺跡から発掘された資料から、主に2つの方法が考えられています。一つはきれいな石、骨、貝殻などで身を飾ること、現代風に言えば「アクセサリー」です。もう一つには服装や入墨(いれずみ)などもあったことが土偶(縄文時代の焼き物の人形)などから推測されています。

ここでは、縄文時代の遺跡からよく発見されるアクセサリーについて考えてみたいと思います。現在、アクセサリーは

アクセサリー・縄文時代前期

おそらく旧石器時代にはあっただろうといわ

今から約9000年前(縄文時代早期)に

骨や貝から石に変化 種類も格段に増える



松原遺跡出土のアクセサリー
(県立歴史館所蔵)

なると、骨、サメの歯や貝殻などで作られたアクセサリーが長野県内でも高山村湯倉洞窟(ゆぐらどうくつ)、南

早期末になってアクセサリーは大きく変化します。光つてきれいで、きめが細かい石(玉・ギョク)で作ら

相木村栃原(とちばら)岩陰などで出土しています。

その後、今から約6500年前(縄文時代

れ始めました。石は、軟らかく加工のしやすい材質の滑石(かつせき)や蛇紋岩(じゃもんがん)などのほか、

滑石に比べ硬くてきめが細かい軟玉(なんぎよく)で作られたものもあります。

で、現代風にいえばピアスの一種です。また、もう少し時代が新しくなると長野市松原遺跡出土のアクセサリーの

材質が変わっただけでなく、アクセサリーの種類が格段に増えた

出たアクセサリーの

全国の幾つかの遺跡で出ています。特別な意味を持っていた人物がいた遺跡から出てくるのかもしれない。

耳飾をする女性(横沢晃・作画)



「の」の字の形、ヘラ形、帽子形などが出てきました。これからこれらアクセサリーは非常に珍しいもので、そっくりのものが伊豆諸島八丈島倉輪(くらわ)遺跡など、

ことも特徴的です。耳飾(イヤリング)、垂飾(ペンダント)、指輪などがあるようです。特に石製の耳飾(球状耳飾)は絵のような状態で耳に穴を開けて着けたと推測されているの

川崎 保・長野県立歴史館専門主事・学芸員

◇球状耳飾(けつじょうみかざり) リングにスリットの入った形が中国古代の玉製品「琀」に似ていることから、名付けられた。

古代への招待状

埋もれていた遺産

39

アクセサリーは、人類社会の中にある人それぞれが社会的立場を示すために作り出し

アクセサリーは飾りです。現代流行しているピアスは、もちろん今日のアクセサリーです。タトゥーと呼ばれる刺青(いれずみ)も身体装飾という意味で、同じ性格のものと考えてよいでしょう。

では、弥生時代のアクセサリーには、一体どんなものがあったのでしょうか。長野市松代町東寺尾にある松原遺跡を例に考えてみると、木製で赤漆(あかうるし)の塗られた縦櫛(たてぐし)、ヒスイ製の勾玉(まがたま)に碧玉(へきぎよく)

た道具です。髪飾り、首飾り、耳飾りに鼻飾り、腕輪に指輪など、人目を引く人体部分を

製造の指輪、猪牙(いのししのきば)製の腕輪

類と判断できそうです。アクセサリーの役割を

社会的立場を示す道具 役割終わると不必要に

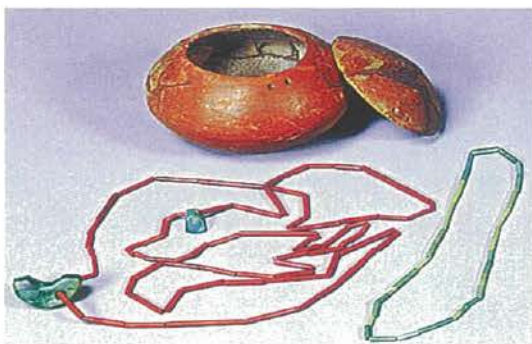
アクセサリー・弥生人と玉

製の管玉(くだたま)、蛇紋岩(じゃもんがん)

などが挙げられ、これらがアクセサリーの種

ただし、これらの種類が1、2点程度しか出土していないところ

読み取ることができません。少し場所は離れます



篠ノ井・光林寺裏遺跡出土の玉類(至文堂発行「日本の美術」第370号「弥生時代の装身具」より＝東京国立博物館所蔵)



檀田遺跡出土のヒスイ製勾玉。長さ4.2センチと大きい(市埋蔵文化財センター所蔵)



が、飯山市に小泉遺跡という弥生時代の墓地を発掘した例があります。そこには94ほどの墓跡がありましたが、ヒスイ製勾玉と管玉を

は、それぞれ管玉の数という弥生時代の墓地が違って、44個・24個・12個・9個・6個でした。ところが、墓の大きさや場所に違いはありません。

社会の大きな移り変わりでアクセサリーの役割が失われるとき、人々は、それを宝器として山中に埋めるのだと考える考古学者もいます。事の真意は分かりませんが、長野市篠ノ井にある光林寺の裏山からは、弥生時代の赤く塗られた小さな壺(つぼ)とともに、ヒスイ製勾玉2点と管玉105点が発見されています。

持つ墓はたった1つで、管玉のみを持つ墓が5つ、残りの88の墓からは何も出てきませんでした。管玉を持つ5つの墓

その後継者、あるいは祈禱師(きとうし)、勇敢な戦士などを表現する飾り物だと考えられます。そしてアクセサリーは、その人の社

町田勝則・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

40

遺跡の一角で4世紀終
わりごろの大規模な祭
祀(さいし)場が発見
されました。

長野市篠ノ井塩崎の
石川条里遺跡。長野自
動車道の建設に先立つ
発掘調査により、この

こで行われた祭祀
の特徴を示すものが車
輪石(しゃりんせき)
石釧(いしくしろ)
銅鏡・銅鏃(ぞく)
玉類といった古墳の副
葬品と共通する品々
で、遺跡の北方3*に
位置する同時期の川柳
(せんりゅう)將軍塚
古墳の被葬者との関係
が想定されています。
とりわけ注目されるの
が車輪石と石釧です。
車輪石は、江戸時代
の古記録から川柳將軍
塚古墳から出土した可
能性が考えられるもの
の、現存するものでは
県内初出土です。石釧
も県内では須坂市鎧塚

アクセサリ―腕輪形石製品

儀礼に使われる宝器

穴は小さくなり重量化

1号墳のほか、数遺跡
でしか見つかったいま

せん。
車輪石・石釧、そし

て鉄形石(くわがたい
し)は、弥生時代の貝

4世紀代の古墳の副葬
品を構成する重要な要
素となります。材料に
は勾玉(まがたま)や

主に用いられました。
考古学では腕輪形石製
品とか碧玉製腕飾りな
どと総称しています。



滋賀県安土瓢箪(ひょうたん)山古墳の腕輪
形石製品と玉類。左から鉄形石、車輪石、石
釧(京都大学総合博物館所蔵、「京都大学文学
部博物館」より)



石川条里遺跡の石釧と車輪石(県埋蔵文化財
センター発掘調査報告書より)

製腕輪をモデルにし
て、古墳時代前期、4
世紀の初めに生み出さ
れた儀礼用の宝器で、

管玉(くだたま)にも
使われる碧玉(へきぎ
よく)・緑色凝灰岩な
どの緑色の美しい石が

弥生時代の貝製腕輪
は儀式や祭りをつかさ
どった人物が呪力や権
威のシンボルとして装

着したことが推定され
ており、腕輪形石製品
はその呪的な意味や権
威を示す象徴としての
性格を引き継ぐものと
考えられます。初期に
は実際に腕にはめて使
用されたこともあった
ようですが、間もなく
穴が小さくなるとも
に重くなって実用性を
失い、腕輪の形をした
宝器へと転換します。

腕輪形石製品は、原
材料の産出地であり玉
作りの伝統をもつ北陸
や出雲で主に製作さ
れ、各地へもたらされ
ますが、その生産と供
給は畿内政権が握って
いたとみる考え方が有
力です。各地域の首長
たちは畿内政権を介し
て腕輪形石製品を入手
し、自らの威信を高め
る宝器としました。そ
して首長が古墳へ埋葬
される際には葬送儀礼
の重要な道具立てとな
ったのです。

若林 卓・県埋蔵
文化財センター調
査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

41

現在、ベルトといえど、誰でも何本かを持ち、仕事や買い物、デートなど、用事に合わせて選

んで身に付けているのではないのでしょうか。8-12世紀の奈良から平安時代にもベルトがありました。しかし、

このベルトは誰でも持てたものではなく、主に役人の身分を表す象徴として用いていたようです。このベルトには「帯金具」がついていました。

この金具は装着する場所によって幾つかの部品に分けられます。バックルは「鉸具(かこ)」、ベルトの先に付けバックルに差し込む部分は「鉈尾(たび)」、飾りの板は「丸鞆(まるも)」「(かまぼ)」「(かまぼ)」「(かまぼ)」「(かまぼ)」と「巡方(じゅんぽう)」と「巡方(じゅんぽう)」(四角い形)です。奈良時代に入ると、

アクセサリ・帯金具

国の法律が次第に整備され、特に役人の服飾

帯金具の大きさ、材質(金・銀・青銅・石など)、

主に役人の身分を表す

中央とのつながり浮かぶ

については位階を示すものとして、服の色や

使用数などが細かく規定されていきました。これらのベルトは現在に

帯、大坂府藤井寺市の道明寺天満宮には菅原の道真の遺品と伝えられ

それでは信濃国のよな都以外の国ではどのような人々がこのベルトを所持・使用したのでしょうか。各国々での有位者である国司・郡司など地域の有力者が役人で、現在の県知事や市町村長クラスの人々が持てたと考えられます。

長野市では綿内の高野遺跡で銅製の「巡方」、浅川扇状地の牟礼バイパス遺跡で銅製の「丸鞆」が出土しています。すが、特に注目

郡の斗女(とめ)郷と氷鉋(ひかな)郷との関連が深いとされ、この二つの点からみると、「帯金具」はムラにおける役人が有力者が所有していた可能性がります。

「帯金具」は各部品が住居跡から単独で出土することもあり、遺跡の特徴を直接示さない場合もありますが、南宮遺跡のような大規模集落で数多く出土する例をみると、当時の中央との行政的なつながりや、中央の文化を志向した様子が浮かび上がる資料といえそうです。

廣田和穂・県埋蔵文化財センター調査研究員

も伝世しており、奈良の正倉院には銅製の飾りの付いた漆塗りの

る「銀装革帯(ぎんそうかくたい)」(国宝)があります。

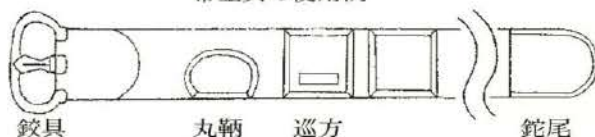
すべきはオリンピックの開閉会式場にあった南宮遺跡です。ここで

南宮遺跡は遺跡の規模や立地、遺物の質や量からみて古代の東料



南宮遺跡から出土した帯金具 (市埋蔵文化財センター所蔵)

帯金具の使用例



鉸具

丸鞆

巡方

鉈尾

古代への招待状

埋もれていた遺産

42

ヒスイの垂飾(たれかざり=ペンダント)を手のひらにのせる、ずしりとした存在

感が伝わります。

端正な形に仕上げられた表面は丁寧に磨かれて、胸に飾るための穴が1つ開けられてい

ます。太陽にかざすとより輝きを増し、透明感のある緑色に吸い込まれそうになります。

硬い原石から、この至宝を作り出したのは縄文時代中期を生きた人々です。4500年という年月を経て土中から掘り出されても、その輝きは曇ることがありません。

「硬玉製太珠(こうぎよくせいたいしゅ)とも呼ばれ、大きなものでは長さ10センチ、重さ100グラムを超えます。これを胸にした人物の姿にはヒスイ同様に、美しさとともに大きな存在感が

道礼文島にある舟泊(ふなどまり)遺跡で

ずしり 透明感ある緑

工房で加工 各地に流通

アクセサリ・ヒスイの垂飾

あったことでしょう。

日本の最北端、北海

墓の副葬品」と考えられています。塩尻市上木戸(うへき)遺跡では、縄文時代中期の穴からヒス



ヒスイの垂飾が見つかりました。このような出土例から、人が入る程度の大きさの穴から見つかるヒスイは「お



イの垂飾が5つも見つかりました。穴は角が丸い長方形で、大きさは1・4センチ×0・9センチ、深さが25センチ〜45センチ

あります。ヒスイは穴の底から、3つと2つに分かれて出土しました。調査の観察で、このヒスイは意識的に埋

められたものと判断されています。

縄文時代中期には、各地に大きな集落が造られます。集落には堅

製ヒスイと、垂飾が出土した穴(写真下)＝県埋文センター・塩尻市上木戸遺跡から発見されたヒスイ製の垂飾(写真上＝左:長さ5.3センチ)と、県立歴史館提供

穴住居のほか、このようなど田形をしたお墓の穴が多数見つかります。が、ヒスイの垂飾が見つかる穴は1〜4つほどです。まとめ役

や祈とう師といった特別な地位にあった人が亡くなった際、生前着けていたヒスイを一緒に副葬したのでしょう

か。

ヒスイの産地は、新潟県の糸魚川市や青海町を流れる川にあります。この地域には「標石」

を加工した縄文時代のヒスイ工房が見つかっていて、ここから各地へヒスイ製品(太珠)だけが流通していたと考えられています。

しかし近年、山形村の淀の内(よどのうち)遺跡では、お墓から垂飾が見つかったばかりでなく、住居跡からヒスイの原石や破片が20点も発見されました。もしかすると、ここにもヒ

◇硬玉製太珠 縄文時代に硬玉(ヒスイ輝石岩)で作られた大きな玉の意味。岡谷市出身の考古学者八幡一郎氏が命名。

◇標石 川の流れや波に洗われて小さく丸みを帯びた状態の岩石(ヒスイ)。

スイ工房があった可能性も出てきました。大規模な発掘調査により、墓穴からの出土例も増えてきました。千曲川

流域でも、豊田村の千田(せんた)遺跡や千曲市屋代遺跡群から垂飾が見つかっています。大きな力の象徴であった可能性のあるヒスイ。現代人をも引き付ける、魅力ある出土品の実像も少しずつ明らかになってきています。

柳澤 亮 県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

43

今から1800年ほど前の弥生時代後期、一人の人物が人々の前に現れた。その人物の腕には黄金色の輝きを放

心を揺さぶった腕輪と、はどんなものだったのでしょうか。

銅や鉄といった金属素材が、善光寺平にもたらされたのは弥生時代中期後半ごろ(約2000年前)です。人々は斧(おの)などの生産具、剣などの武器、ヤリガンナなどの工具等々、実用的な道具の素材に利用しました。

道具の素材を石に求めていた人々は、金属素材が示す切れ味や仕事の能率アップに接し、金属の道具を手に入れたいと強く思ったことでしょう。とはいえ、金属素材の量は限られて

つ腕輪が装着され、腕を動かすと神秘的な金属音が響きわたった。

人々は、この光景に心を揺さぶられたに違いありません。人々の

非実用的な銅の腕輪「銅釧(どうくしろ)」、鉄の腕輪「鉄釧(てつくろ)」

装着意味違う銅と鉄 千曲川流域が発信地か

アクセサリ・腕輪

おり、貴重でした。そのうち中でも人々は、貴重な金属素材を使って

の完形(かんけい)品が発見され、住居跡などから見つかった場合は、変形されている例がほとんどでした。

7ミリ、厚さ2ミリの規格がそろった鋳造製品です。85(昭和60)年に佐久市上直路(かみすくじ)遺跡で、住居跡の中に作られたお墓から性別不詳の成人の骨

れたことが分かります。成人の腕には直径6ミリの円環は通らないので、子供のころに装着されたと考えられます。生まれながらに特別の役割を担った人であっ



篠ノ井遺跡群から出土した銅釧(県立歴史館所蔵、県埋文センター提供)



佐久市上直路遺跡の屋内埋葬墓にあった銅釧の出土の様子(佐久市教育委員会提供)

跡は、本村東沖遺跡、篠ノ井遺跡群、塩崎遺跡群、檀田(まゆみだ)遺跡などがあります。遺跡の中のどんな場所から出土したか調べてみると、お墓から多く

われ方、釧が腕に装着されたまま埋葬されたこと、釧が埋葬された人固有の所有物であったことを教えてくれます。

銅釧は銅製の円環で、直径6センチ前後、幅5ミリ、厚さ2ミリの規格がそろった鋳造製品です。85(昭和60)年に佐久市上直路(かみすくじ)遺跡で、住居跡の中に作られたお墓から性別不詳の成人の骨

たのでしょう。その人が冒頭の黄金色の輝きを放つ人です。

鉄釧は、鍛造した細長い鉄板をらせん状に巻き上げて作られました。出土場所は銅釧と同様ですが、径は銅釧よりやや大きく、着脱可能なことから、成人になって装着されたと考えられます。銅釧が装着されている人と鉄釧が装着されている人では、その性格に違いがありそうです。どんな違いを考えてみてください。

銅は誰もが装飾品として装着したのではなく、特別の役割を果たす人に装着されたため、発見数も少ないのです。

これは、銅素材と鉄素材の東日本への移入経路の違いに関係しているともいえます。とはいえ、発見された資料を総合的に考えると、円環の銅釧やらせん状の鉄釧を装着する文化は千曲川流域が発信源であった可能性も指摘されています。

市澤英利 県埋蔵文化財センター調査部長

◇鋳造 金属を溶かして、鋳型に流し込んで製品をつくること

◇鍛造 金属を熱し、つちで打って必要な形にする

古代への招待状

埋もれていた遺産

44

古墳時代になると、アクセサリーの種類もその出土数も増えてきます。古墳の出土品や人物追輪の観察から、

古墳時代のアクセサリーには、頭飾り・腕飾り・足飾り・首飾り・耳飾りの存在が知られます。

この当時、アクセサ

リーは単なるおしゃれを彩る装飾品ではなく、地位や権威の象徴を示すものであり、呪術的・宗教的意味合いの強いものでもありました。頭飾りには冠や帽子がありますが、出土例は希少であり、古墳に葬られる首長層だけが身に着けられるものでした。人物追輪の観察によれば、足飾りをしてるのは巫女(みこ)とおぼしき人物だと推測されます。

こうした古墳時代の

アクセサリーに不可欠

なものが玉類です。篠

ノ井遺跡群の高速道地

点では4世紀後半の墓

穴から、人骨や鏡と

アクセサリー・古墳時代人

もに多数の玉類が出土しました。頭がい骨の直下から碧玉(へきぎ

よく)製の管玉12点、右手首付近から琥珀(こはく)玉12点以上、

首長は頭、巫女は足に

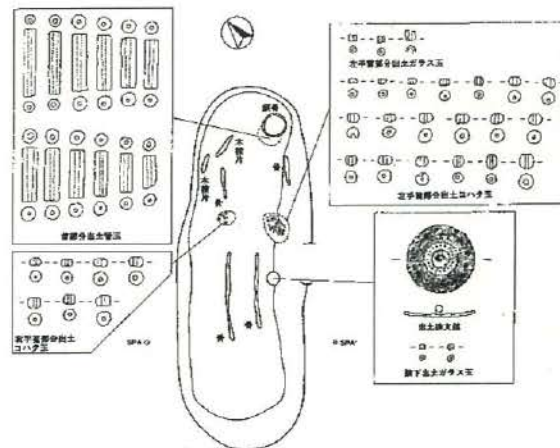
多種類の玉を組み合わせ



このことから、被葬者は首飾りには管玉を、腕飾りには琥珀玉とガラス小玉を用いていたことが分かります。

首飾りには、1種類の玉で構成されるものばかりではなく、多種類の玉をさまざまに組み合わせられているもの

松原古墳・大室25号墳から出土した耳飾りや玉類(県立歴史館所蔵=県埋文センター10周年図録より)



図版 篠ノ井遺跡群の墓穴から見つかった玉類の出土状況(県立歴史館所蔵)

管玉には碧玉・緑色の凝灰岩・滑石などが使われることが多く、勾玉は4-5世紀代には

から続くもので、前述した篠ノ井遺跡群で見られたような玉類を用いたもののほかに、鉄釧(くしろ)・銅釧な

の棒を「C」の字状に曲げて、それに金や銀のメッキを施したもので、それぞれ金環・銀環とも呼ばれます。切

少なくありません。玉類には他にも勾玉(まがたま)・切子玉・聚玉(なつめだま)などがあり、その材質も多

ヒスイ・碧玉・水晶などが見られ、6世紀代以降はメノウが多くなつてきます。また、腕飾りの伝統は弥生時代

とも発見されています。一方、縄文時代に盛んになった耳飾りは、弥生時代には見られな

れ目があるので、耳に穴を開けるピアス式とも、耳たぶに挟むイヤリング式とも考えられるものです。

松代町の松原古墳や大室25号墳など古墳から出土する事例が多いのですが、堅穴住居跡や溝跡にある事例も見られます。またこのほかにも、豪華な装飾を付けた、装飾付耳飾りといわれるものがありますが、県内では飯田市畦地1号古墳で銀製長鎖式の耳飾りが出土しているだけです。

ところで、古墳時代を最後に、日本では耳飾りの習慣はなくなりました。そして再び耳飾りが流行するのは現代になってからのことです。

桜井秀雄 県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

45

現代のおしゃれのため
の「ピアス」のように、
縄文時代の人々も
美意識で「耳飾り」を

していたのでしょうか？
日本人が「ピアス
（耳飾り）」を好んで着

紹介します。
若穂保科の宮崎遺跡

アクセサリー・土製耳飾り

わりごろ（後期・晩期）
の土製耳飾りが約15

けた時代は現代までに
3回あります。初め石
製で後に土製にと材料
が変わる縄文時代、金
や銀メッキの耳環（じ
かん）を着けていた古
墳時代中ごろ、そして
若い世代を中心にした
現代です。

本特集38回（6月5
日掲載）で、縄文時代
の石製耳飾りについて
は紹介しました。そこ
で今回は、今から約5
000年前の縄文時代
中期から作られ始め、
縄文時代後期から晩期
に最も盛んに作られた
土製の耳飾りについて

耳たぶの穴にはめる 最大9センチ 大きさ段階的



宮崎遺跡から出土した土製耳飾り（市埋蔵文化財センター所蔵、写真は飯田市上郷考古博物館提供）

化財にも指定されてい
る、透かし彫りで精密
に作られた耳飾りの仲
間も何点が見られます。
これらの耳飾りを、

かや）遺跡からは、耳
たぶに大きく穴を開け
て耳飾りをはめ込んだ
土偶が発見させてお
り、当時の着け方を教

0個見つかったいます
が、群馬県桐生市の千
網谷戸（ちあみがいと）
遺跡では、国の重要文

実際に縄文人たちはど
のように耳に着けてい
たのでしょうか？ 山
梨県都留市の中谷（な

えてくれます。また、
写真を見てもらうと分
かるように、耳飾りに
は大きささまざまな大
きさがあります。直径2
センチ前後と4センチ前後のもの
が多く見られます。

さば手の指の幅（1横
指1約2センチ）を基準に
作られていた気がして
います。
大きさに2センチ、4センチ、
6センチと段階的なまと
りが見られるのは、穴
を徐々に
大きくし
ていった
証拠と思
われま
す。4センチ
大の透か
し彫りの
耳飾りを
着けるま
では、2センチ前後の耳
飾りを着ける段階を経
ているということです。



山梨県都留市中
谷遺跡出土の土
偶のスケッチ
（西沢・作画）

長野県他の遺跡で
も、やはり直径2センチ前
後、4センチ前後の耳飾り
が多く、6センチ前後のも
の多く見られます。
最大では直径9センチを超
えます。これらの大き

現在の中谷アジヤ・ア
フリカ地域の人たちの
中には、大きな耳飾り
を着ける際、誤って耳

たぶを破ってしまうこ
ともあるようです。
耳飾りがお墓などの
遺構から出土すること
は宮崎遺跡でも3例
と、まれです。けれど
も、耳飾りは個人的な
地位や出自などの社会
的な意味を表現してい
る可能性があるともい
われています。耳飾り
に対する縄文人の思い
は、現代人のわたした
ちとは大きく異なっ
ていたと考えられます。
とはいえ、なぜこんな
に大きな耳飾りをする
必要があったのかは、
ぜひ縄文人に聞いてみ
たいものです。

黒岩 隆 長野県
埋蔵文化財センタ
ー調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

46

飯山市街地の北東部、千曲川東岸に延びる宮中丘陵には、縄文

時代後期、今から約3500年前の墓地在が広がっていました。
79(昭和54)年、飯

山東小学校の通学路建設に先立って行われた宮中遺跡の発掘調査で、長方形の穴が23カ所見つかりました。穴の深さは30〜40センチと一定していますが、長さは180センチから100センチまでさまざまです。

ある穴には、天地を逆にした浅鉢形土器が埋まっており、その下から竹製漆塗りの縦櫛(くし)が出土しました。別の穴では土製の耳飾りが2個一対見つかっています。遺体は腐ってしまいました。が、東筑摩郡明科町の北村遺跡を参考にすると、明らかに縄文人の墓穴だと考えられます。

墓・組石棺墓

集団の連帯を意識？

高度な精神生活を具象

と、明らかに縄文人の墓穴だと考えられます。

す。

宮中遺跡の墓穴は、壁面に扁平(へんぺい)

ているものや、石でふたをしてある墓穴もあります。このように、



宮中遺跡から発見された組石棺墓
(飯山市教育委員会提供)

な安山岩を立て並べている点に特徴があり、また底面に平石を敷い

た中にあたかも棺(ひつぎ)をしつらえたかのような墓穴を、「組

石棺墓(くみせつかんぼ)」あるいは単純に「石棺墓」といいます。

宮崎遺跡、千曲市羽尾の円光房(えんこうぼう)遺跡などでも組石棺墓は群をなして発見されているため、特異な埋葬施設であるというわけにはいきません。

墓地に生者の集団の社会関係を反映させようとした背景には、時代の終盤になって集団の連帯を意識せざるを得ないような社会的要請が働いていたのかもしれない。

組石棺墓は、縄文中期後半(約4500年前)に東北北部で発生し、後期以降晩期にかけて関東から中部日本を中心に流行した土葬墓(どそうぼ)の一形態です。この時期は、堅穴住居の床に石を敷いたり、弧状・環状など大規模なモニュメントを造ったりと、縄文人はとかく石にこだわりをもっていたようです。

いずれにせよ組石棺墓やその集団墓地は、縄文人の高度な精神生活を具象している記念物であることは間違いない。

今後の科学が解明していくでしょうが、個々の墓の位置や向き、組み石を含めた墓穴個々の造り方のくせなどには、おそらく、そこに葬られた縄文人の生前における集団内の位置が投影されているはずです。縄文人が、

平林 彰 県埋蔵文化財センター調査課長

ことから、被葬者を見別視する向きもあります。しかし、宮中遺跡を含めて長野市若穂の

◇北村遺跡 87(昭和62)年の発掘調査で縄文中期末から後期中ごろの縄文人骨300体が発見された。資料は現在、千曲市の県立歴史館に保管されている。

古代への招待状

埋もれていた遺産

47

今はお盆の最中です。わたしたちの遠い祖先、弥生人のお墓について考えてみましょう。

う。いつの時代も誰かが亡くなると、その死を悼んで遺体を手厚く埋葬しますが、その方法は時代や地域の違い

によってさまざまです。今から約2400年前に始まる弥生時代の人々はどのような方法で亡くなった人を埋葬したのでしょうか。

弥生時代前半の東日本では、土壙墓(どこうぼ)や再葬墓(さいそうぼ)といった縄文時代から続く伝統的な埋葬方法に加えて、大陸から導入されて弥生文化の到来とともに西日本から東日本へ入ってきた木棺墓(もつかんぼ)など、さまざまなお墓が作られていました。土壙墓は、地面に穴を掘って直接遺体を埋

行われていました。再葬墓は、土葬・火葬

何らかの階層差 発生 伝統を残しながら変化

墓・弥生人

葬する方法で、各時代法でいったん葬った遺

体が白骨化した後、再び埋葬し直す方法で縄文時代後期から行われていた埋葬方法です。

長野市の篠ノ井遺跡



塩崎遺跡群の木棺墓
(長野市教育委員会提供)



群では、白骨化した遺体のうち頭骨など一部の骨だけを複数集めて、拳大の丸い石を敷き詰めた墓穴の中に埋葬し直した再葬墓が見

と思われる壺棺(つぼかん)再葬墓が発見されています。木棺墓は、地面に穴を掘り、その中に板材を埋め込んで組み合わ

つがっています。また、千曲市の屋代清水遺跡や、力石条里遺跡群で、白骨化した遺体をつぼに拳大の丸い石を敷き

せ、箱形を作ってひとつかっています。また、千曲市の屋代清水遺跡や、力石条里遺跡群で、底に直接側面の板材を埋め込んだものや、底に拳大の丸い石を敷き

塩崎遺跡群伊勢宮地点で発見された木棺墓は約30基もあり、その形態から幾つかのグループに分けられます。木棺の中に遺体が単体で納められているもの、複数の遺体が一緒に納棺されているもの、副葬品として管玉や儀礼用に用いられた小型の土器が納められているもの、墓の内部に赤色顔料(ベンガラ)がかけられた痕跡があるものなどさまざまです。

このように、墓の形態がさまざまに分かれるということは、そこに埋葬されている人々の中に何らかの階層差が生まれてきたのでは

ないか、と考えられています。また、木棺墓は弥生時代になって西日本から伝わってきた埋葬方法ですが、遺体のひざを折り曲げた姿勢で葬る埋葬法や、多人数を一緒に埋葬したり、副葬品として多数の小型土器が入るなど、縄文時代から続く埋葬法も見られ、地域の伝統的な埋葬方法を残しながらも、新しい弥生文化を取り入れているという当時の人々の様子がうかがわれます。

西 香子 県埋蔵文化財センター調査研究員

◇風葬 死体を風雨にさらして自然に消滅させる葬礼の仕方。

古代への招待状

埋もれていた遺産

48

前方後円墳(せんぽうこうえんぶん)は、3世紀中ごろから6世紀末葉あるいは7世紀初頭ごろまでの古墳時代

をした古墳です。北は岩手県から南は鹿児島県に至る全国で造られました。

前方後円墳の名称は、江戸時代の国学者蒲生君平(がもうくんぺい)により、1808(文化5)年に書かれた「山陵志」という書物の中に記載されたことに始まります。

古墳時代にはこのほか前方後方墳、円墳、方墳などと呼ばれる古墳も土や石を盛って造られ、現在全国に約20万基以上あるといわれていますが、前方後円墳の数は、4900基

代に造られた土を盛った墓の中でも、上空から見た形が円と四角(台形)が組み合わさり、鍵の穴のような形

程度です。

この前方後円墳の特徴の一つには大きさが

墓・前方後円墳

まで並べてみると、最大規模を誇る大阪府の大山(だいせん)古墳(伝

あります。全国の古墳を規模の大きい順に50位

土を盛った鍵穴の形 市内では13基が確認

仁徳天皇陵)の全長486メートルから50位に当たる175基までの古墳のうち49基を前方後円墳が占め、唯一46位の奈

も大規模なものが突出して多いことなどから、天皇クラスの人々や大和政権で中枢を担った人々、あるいは大

いますか。確実に前方後円墳と考えられているものは47基です。そのうちの24基が飯田市を中心とする下伊那地

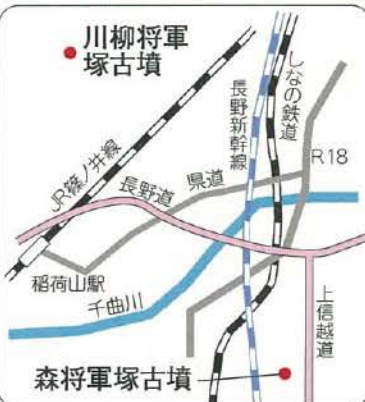
井石川にある川柳(せりゅう)將軍塚古墳をはじめ13基が確認されています。これらの分布上の特

伊那地域に集中していることです。長野県内で最も規模の大きい前方後円墳は千曲市にある森將軍塚古墳で99メートル、4世紀中ごろに造られたと考えられています。

長野市内の前方後円墳

古墳名	所在	規模	時期
1 和田東山1号墳	若穂保科	41.0m	4C
2 和田東山3号墳	若穂保科	48.0m	4C後
3 和田東山4号墳	若穂保科	41.0m	5C前?
4 三才1号墳	古里	45.0m	5C後
5 地附山古墳	上松	39.0m	5C後
6 南向塚古墳	高田	47.5m	5C後?
7 大室18号墳	松代町大室	55.5m	5C前
8 馬神塚古墳	小田切	30.5m	6C前
9 腰村1号墳	篠ノ井小松原	43.0m	6C初
10 舞鶴山2号墳	松代町西条	36.5m	5C後
11 川柳將軍塚古墳	篠ノ井石川	93.0m	4C後
12 中郷古墳	篠ノ井四野宮	53.0m	5C後
13 土口將軍塚古墳	松代町岩野	66.7m	5C中

※土口將軍塚は千曲市との市境にあり千曲市大字土口にも所在。



千曲市森將軍塚古墳(墳丘西側から撮影)(千曲市教育委員会提供)

前方後円墳は、形や規模、性格が数多い古墳の中でも象徴的な存在であるため、古墳時代のことを「前方後円墳の時

良県西山古墳は185メートルの前方後方墳です。

全国に多くの古墳がありながらも、前方後円形という特異な形で

あつたり、希少な古墳が

和政権が認めた各地域の有力者の墓と考えられています。

さて、長野県内にはどれほどの前方後円墳が発見されていると思

域に集中し、20基が飯山市から千曲市に至る善光寺平に分布します。長野市では4世紀後半に造られたと考えられている全長93メートルの篠ノ

徴は、4世紀中ごろから5世紀後半ごろまでの前方後円墳は善光寺平に集中し、5世紀後半から6世紀末葉ごろまでの前方後円墳は下

西山克己 県教委文化財・生涯学習課 教諭

古代への招待状

埋もれていた遺産

49

現在、お墓といえば、大規模な霊園から、身近な場所にある墓地まで、いろいろな場所に

れていたのでしょうか。

奈良時代の初めには、古墳の石室を利用する例があります。松

代の大室古墳群では横穴式石室の中から奈良時代の須恵器が出土しており、古墳時代以来続いてきた集団の中で追葬、あるいは石室を再利用した埋葬が考えられます。

しかし古墳は次第に使われなくなり、新たに「石組墓」という石を組み合わせた個人用のお墓が登場してきます。また、このころの葬法については、墓の

存在し種類もさまざまです。

では8〜12世紀(奈良〜平安時代)にかけては、どんな墓が造られていたのでしょうか。

ら、土葬のほかには火葬も行われていたと考え

特定の人物を埋葬か 自分の力を示す場所に

世紀後半以降になると土葬の墓が目立つようになり、松代にある松原遺跡で、具

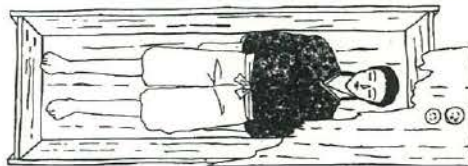
がほぼ完全な形で発見されました。おおむけに寝た状態で埋葬されており、頭は北西を向いていました。墓

この墓の中からは「土師器」の坏(つき)が9点見つかりました。出土品は頭

埋葬した可能性などが考えられます。ではこの墓に葬られた人はどのような人物だったのでしょうか。

す。12世紀後半に作られた『餓鬼草紙(がきぞうし)』の中には当時の葬送の一端が描かれています。そこにはムシロが掛けられたり、棺おけに入った死体が野ざらしになっている場面があります。多くの人たちはこのような墓を造らないで申わ

ん。こうしてみると古代の墓は死んだ人を埋めた場所であるだけでなく、村の有力者が自分の力を示す場所であったともいえるでしょう。



①松原遺跡で発見された古代の墓
(市埋蔵文化財センター提供)
②埋葬の想像図
(市教育委員会提供)

う。
長さ208センチ、幅88センチの長方形の穴が掘られ、中から壮年期の男性と考えられる人骨

穴の両側には溝のような掘り込みがあり、木棺の木枠の跡ではないかと推測されています。

は、副葬品として埋められた可能性や、墓に葬られた人の後継者が葬儀を行ったときに自分の権威を示すために

村人の墓はどこにあったのでしょうか。実は発掘ではほとんど見つかりません。手掛かりとしては古代の絵巻物が注目されま

廣田和穂 県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

50

わたしたちの近い人が亡くなったとき、わたしたちは嘆き悲しみ、日常生活に支

よう。

仏教などでは葬儀後に初七日、四十九日、十三回忌法要といった段階的な法事を設けています。このような宗教法事や社会的なしきたりは故人の冥福を祈りながら、徐々に悲しみを癒やし、残された人々が社会復帰できるようなシステムといえないでしょうか。また、宗教の違いや地域社会の伝統は遺体の葬り方や墓の造り方を規定します。

今から500年ほど前の中世といわれる時代はどうだったでしょう。

障を来します。故人との親愛やきずなは度合いが強ければ強いほど、その嘆きや痛みは大きいものとなるでしょう。

墓・中世人

うか。残念ながら考古学では正確にその答え

されるお墓の跡や人骨から、さまざまなこと

二つの異なる葬り方 集団内でも格差が存在

を導き出すことは困難ですが、遺跡から発見

が考えられます。

平安時代では、ごくわずかしが墓は造られませんでした。中世には多くの墓が造ら

た。

1つは平地の当時の道路脇に造られた土葬墓、火葬墓、改葬墓(いったん遺体を白骨

もう一つは遺跡背後

の金井山の斜面に造られた火葬骨を納めて五輪塔を建てる墓地です。ここでは山の斜面



推定復元し県立歴史館で展示している松原遺跡五輪塔群(県立歴史館提供)



松原遺跡の土葬墓(同)

れるようになります。そうした中世の墓がた

化させて再び葬る墓)から成る墓地です。出土した人骨は成人男性、熟年女性、3歳前後の女子などさまざまでした。

におおむね4段ほどの平らな面を造り、茶毘(たび)の際の異臭や排煙を避けるためか上段を火葬場とし、中下段を中心に火葬骨を木

箱や曲物などの木製容器に入れて埋葬した墓地としています。火葬骨の分析からは最低限入れるべき特定骨があるわけでも、量的な決まりもなかったようです。

こうした火葬骨を納めた墓は78基見つかり、さらに出土した五輪塔は134組あると推定されます。下段テラスは土の積もり方から、3期にわたって墓地の造り変えがあったと思われる、一時期、7-20基の火葬墓が造られて最終段階に梵字(ぼんじ)が墨書きされた五輪塔が設置されていた。下段テラスに葬られた人物が集団は、この集団墓地を造った大きな集団の中

心的な役割を担ったと想定されます。

この集団墓地が造られた背景には、墓地を営む社会集団があり、葬送のシステムや共通する思いがあったと想像できます。さらに、2つの墓地の葬り方に違いがあることは埋葬方法の変化が、集団内でも格差があったことを思わせます。死者を埋葬した墓地にも生き

た人々の社会関係や死のとらえ方などが反映されていると考えられます。

上田典男 県教育委員会文化財生涯学習課教育支援主事

古代への招待状

埋もれていた遺産

51

長野県内では弥生時代の後半(今から約1900年前)になると、墓(ぼ)の周(しゅう)り

を溝で区画した「周溝墓(しゅうこうぼ)」と呼ばれる墓が造られるようになります。そ

の溝が方形に回るものを方形周溝墓、円形に回るものを円形周溝墓と呼んでいます。

方形や円形に区画された溝の内部には、1基ないし複数の土壇墓(どこうぼ)や木棺墓(もつかんぼ)、あるいは土器棺墓などの埋葬施設が設けられます。

長野市内では篠ノ井遺跡群で、弥生時代後期の円形周溝墓がたくさん見つかっています。中でも新幹線通過地点では、弥生時代後期の住居跡が多数見つかった集落域の南側に

発見されました。

篠ノ井遺跡群の円形

周囲を溝で囲んだ棺

家族単位での埋葬か？

墓・弥生時代の周溝墓

隣接して、55基もの円形周溝墓は、遺体を収めた棺(ひつぎ)の周囲

を幅1段、直径6段ほどの溝で囲んでいました。溝の中からは、墓

に供えられていたと思われ、直径6段ほどの溝に幅1段、長さ120段と



篠ノ井遺跡群の円形周溝墓(県埋蔵文化財センター提供)

われる礎(かめ)や台付甕、高坏、鉢などの箱清水式土器が出土し、幾つかの墓域内からは副葬品として首飾

輪類、ミニチュア土器などの副葬品が見つかっています。調査された部分は新幹線ルートに当たる幅

9段、長さ120段という狭い範囲で、そこから55基もの円形周溝墓が墓域を形成していた状況は、予想をはるかに超えたものでした。

周辺の未調査の部分には相当な数の円形周溝墓が眠っていると考えられ、今後とも注意を払っていく必要がある遺跡群です。

さて、周溝墓に埋葬されたのはどのような人々だったのでしょうか。

近畿地方には、一边が20段以上に及ぶ大型で、副葬品などから社会的に地位の高い人が埋葬されたと思われる方形周溝墓があります。一方、篠ノ井遺跡群で見つかった円形周

溝墓は同じような規模のものが群をなしていること、互いの溝を共有するものがあること、また隣接する集落から

出土する遺物と墓域内の副葬品などに際立つた階層差を思わせるものが出土しないといった特徴があります。

これらのことから、篠ノ井遺跡群の円形周溝墓は、身分の高い人々のためだけに造られた墓と考えることは難しく、隣接する集落に生活

していた一般の人々が家族単位で埋葬された、共同墓地である可能性が考えられます。

◇箱清水土器 長野市箱清水から出土した、弥生時代後期中葉から末葉にかけての土器群。かめ以外の土器は赤く塗られているのが特徴。

このように、同じ周溝墓でも地域によって埋葬されていた人々には違いがあるようですが、長野県内でも弥生時代の終わりになると、特別な個人の墓として造られたと思われるような規模の大きい周溝墓も現れてきて、次の古墳時代への変化が始まっていく様子が見えてきます。

澤谷昌英・県立花田養護学校(下諏訪町)教諭、元県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

52

長野県で最初に築かれた古墳は、3世紀後半ごろに位置付けられる松本市の弘法山(こっぽうやま)古墳(全長66㍎)ですが、これ

は前方後円墳と比べると概して小規模であり、またその数も少なく、県内では10基ほど(長野市信更町田野口大塚古墳など)、全国でも二百数十基ほどを数えるにすぎません。出雲など西日本にも存在し、中には古墳時代後期の6世紀のものもありますが、東日本では古墳時代前期(3世紀後半〜4世紀)に特徴的な古墳であり、太

では前方後円墳に先駆けて築かれたことが各地で認められてきてい

東日本中心に広がり 政治的まとまりが存在か

長32㍎の前方後方墳の姫塚古墳(長野市篠ノ井塩崎)がこの地域で最初に築かれたとする見方が有力です。善光寺平北部地域でも、飯

も前方後方墳は築かれました。弘法山古墳のある松本平や瀧ノ峯古墳群がある佐久平がそれに当たります。これら

の後方墳はこの地域にみられた前方後方形の墳丘を祖形として成立・定型化し、3世紀後半ごろを契機に東海

として東日本の前方後方墳からはこの東海地域の土器を伴うことが多いこともそれを裏付けています。つまり東日本では、前方後円墳が造営される以前に

「前方後円墳体制」とも称される大和政権は、3世紀後半ごろから前方後円墳を造営してきた畿内瀬戸内を中心とする近畿以西のグループに、東海地域を中核とする東日本の前方後方墳造営グループが二次的に合流して成立したものと考えられるのです。

は前方後方墳という墳形です。方形の墳丘を2つ連接したもので、前方後円墳の円部を方形にした形状です。この名称は前方後円墳に

和政権の成立過程で大きな意味をもっていると考えられています。

長野県を含む東日本

前方後方墳

ます。善光寺平南部地域でも、県内最古の前方後円墳である森將軍塚古墳に先行して、全

築かれなかった地域に

のが濃尾平野を中心とする東海地域です。前

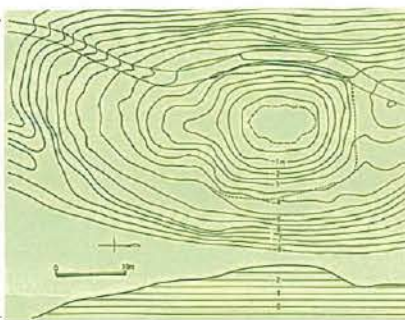
弘法山古墳をはじめ

さらに前方後円墳が築かれなかった地域でも前方後方墳が造営さ

湯ノ入山尾根上に築かれた姫塚古墳(長野市教育委員会提供)



姫塚古墳の墳丘実測図。等高線が凸字を横に倒したように回る。左が前方部、右が後方部(「長野県史」より)



は、この前方後方墳をつながりに何らかの政治的まとまりが存在していたと考えられます。

桜井秀雄・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

53

積石塚(つみいしづか)古墳あるいは積石塚とは、土を盛って造った墓などに対して、石を積み上げて造った

い時代にわたってヨーロッパから中央アジア、中国東北部や朝鮮半島にかけて分布し、ヨーロッパではケルンとも呼ばれています。日本では古墳時代に石積みされた古墳のことを積石塚古墳といひます。

現在、日本全国には1500基ほどの積石塚古墳があるといわれています。有名なものは福岡県新宮町の相島(あいのしま)積石塚群、香川県高松市の石清尾山(いわせおやま)古墳群、山梨県甲府市の横根・桜井積石塚古墳群などが挙げられます。

墓などをいいます。石を積んだ墓や塚は弥生時代あるいは古代から近世にかけても築かれ、また世界的に見ても、紀元前から長

が分布していることになりす。この中で最も著名なものは、長野

県内には700基分布 朝鮮半島と深くかわり

墓・積石塚古墳

長野県内には700基ほどがあるとされ、日本全国の約半数近く

市松代町太室にある大室(おおむろ)古墳群です。

大室古墳群にはおよそ500基以上の古墳が分布し、そのうちの約300基以上、あるいは400基ほどが積石塚古墳であるといわ

る。大室古墳群にはおよそ500基以上の古墳が分布し、そのうちの約300基以上、あるいは400基ほどが積石塚古墳であるといわ



松代町東条にある菅間王塚古墳

れています。この大室古墳群は97(平成9)年に国の史跡に指定されました。長野市内にはこの大室古墳群以外にも全国的にも著名な菅間(すがま)王塚古

墳をはじめ積石塚古墳が点在しています。長野県内最古と考えられている積石塚古墳は須坂市の八丁鎧塚(はっちようよろいづか)です。

す。300基以上の積石塚古墳がある大室古墳群では5世紀中ごろ築造が開始されたようです。

さて、この積石塚古墳はなぜ石によって造られたのでしょうか。これまでの研究から、その土地に多くの石があり、土で古墳を造るよりも合理的であったとする「環境自生説」と、当時の中国東北部から朝鮮半島にかけてあつた高句麗(こうくり)の積石塚を継承、あるいはまねて造った

と、この積石塚古墳はなぜ石によって造られたのでしょうか。これまでの研究から、その土地に多くの石があり、土で古墳を造るよりも合理的であったとする「環境自生説」と、当時の中国東北部から朝鮮半島にかけてあつた高句麗(こうくり)の積石塚を継承、あるいはまねて造った

とする「大陸起源説」の2つの考え方があります。近年の調査研究から、善光寺平における積石塚古墳の成因や系譜は高句麗をはじめ、百濟(くだら)・新羅(しらぎ)・加耶(かや)など朝鮮半島の国々と深くかわりがあると考えられ、世代交代をしながらも伝統的な墓制を2000年間守り続けた結果として積石塚古墳が造り続けられたとも理解されています。

◇高句麗 紀元前1世紀ごろから国家形成が開始され、668年に新羅・唐連合軍に滅ぼされるまで中国東北部から朝鮮半島北部を領土とした。
◇百濟 3世紀ごろ国家形成が開始され、660年に新羅に滅ぼされるまで朝鮮半島西域を領土とした。
◇新羅 4世紀ごろ国家形成が開始され、朝鮮半島東域を領土としたが、578年に唐を追い出し朝鮮半島を統一した。
◇加耶 3世紀代から6世紀代にかけて、百濟と新羅に挟まれた小国による連合国家的地域。

(西山克己・県教委文化財・生涯学習課教諭)

ただ、ここで誤解をしておけないのは、積石塚古墳への研究成果がすべて「大陸起源説」というのではありませぬし、また積石塚古墳すべてが「渡来人1世の墓」であると限定されるものでもありません。積石塚古墳の成立と発展にはさまざまな要因が絡み合っているものと考えられます。

古代への招待状

埋もれていた遺産

54

75(昭和50)年2月、篠ノ井塩崎で、市道(松節―小田井神社地)の拡張工事に先立って発掘調査が行われ

ました。この地には、新井藤四郎さん(故人)が、生涯を通して土器や石器を拾い集めた伊勢宮地籍があり、以前

から古い弥生時代の遺跡地として注目されてい

ました。発掘では、予想したとおりに古式の弥生式土器(弥生時代中期前半の土器)が出土し、

今までわれわれが見たこともない珍しい墓も発見されました。その墓は、木棺墓(もっかんぼ)と呼ばれるもので、篠ノ井塩崎では複数がまとまりをもって造られていました。

その中の21号木棺墓には、いろいろな形をした土器がたくさん入っていて、埋葬された人のちようと胸のあたりには鳥の形をした土器(写真最前列の右)も

墓・渡来系弥生人

ありました。縄文時代

いたので、その形質を調べてみました。鑑定

木棺墓から土器や歯 中国大陆から移り住む？

子が違っていました。幸いにも幾つかの木棺墓には人骨が残って

の結果、この人骨の特徴として女性には縄文時代の平均身長148センチよりかなり高い15

ていることが分かりました。このことは、塩崎の人骨が縄文人の特徴を



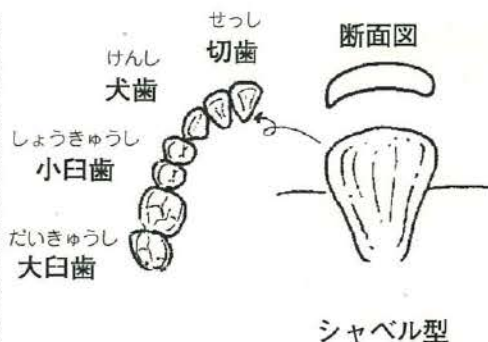
塩崎遺跡群21号木棺墓から出土した土器
(長野市教育委員会提供)

6・2センチあることや、縄文時代人にはないシヤベル型の切歯(せつしやべると大きな歯を持つ

受け継いだ形質ではなく、縄文人とは別に中国大陆の北方から日本列島にやって来た弥生

人、つまり渡来系弥生人の形質を強く示していることを意味しています。

長野に米作りの技術が伝わった弥生時代、稲作文化の幕開けを担った先進地域である塩



下あご左側のシャベル型の切歯図

町田勝則・県埋文
センター調査研究
員

◇発掘調査は、一本木、伊勢宮、中条、松節などの遺跡を含み、これらを総称して塩崎遺跡群と呼ぶ。
◇弥生時代の木棺墓は連載47回で紹介。
◇縄文時代の墓は、その一種である組石棺墓(くみいしかんぼ)を、連載46回で取り上げている。

◇弥生人には、佐賀県や鹿児島県にいた「縄文系」の弥生人と、福岡県や山口県にいた「渡来系」の弥生人がいると考えられている。

古代への招待状

埋もれていた遺産

55

3世紀後半から7世紀にかけて、北海道と沖縄県を除く全国各地では、権力を持ったごく一部の人を葬るた

なものがあります。

3世紀後半から5世紀にかけての古墳時代前期の埋葬方法としては、1人の遺体を埋葬するために石を積んで部屋を造り、木の棺(ひつぎ)を据えた後、天井にふたをして埋める「竪穴式石室」や粘土で包み込んで埋める「粘土槨(かく)」、直接埋める「木棺直葬(もつかんじきそう)」などが見られます。

しかし、6世紀から7世紀にかけての古墳時代後半期には、石で部屋を造って壁の短辺に出入り口を設け、一度埋めてもまた石の扉を開けば何度でも埋葬

めに前方後円墳や円墳、方墳など多彩な古墳が造られました。この古墳に遺体を埋葬する方法にはさまざまな

墓・横穴式石室

葬ができる横穴式石室口から奥に向かって羨門(せんもん)Ⅱ棺を置

壁の短辺に出入り口 石の扉開き何度でも埋葬

く部屋に入る通路を開ける扉」↓羨道(せんどう)Ⅱ棺を置く部屋に入る通路」↓玄門(げんもん)Ⅱ棺を置く部屋

5世紀前半になって大和朝廷の本拠地である現在の奈良県や大阪府を中心とする畿内に伝えられ、6世紀以降に

野市から千曲市にかけての善光寺平南部地域に横穴式石室が造られます。県内での初期横穴式石室と考えられて

墳の石室です。布施塚2号墳は多くが破壊され詳細は不明ですが、直径が9・5

約2・7メートルといったように非常に大きな石室であったことです。



の扉」↓玄室(棺を置く部屋)という順に配置されています。

そもそも横穴式石室は朝鮮半島にあった百済から4世紀末ごろに

北部九州に伝えられた埋葬方法で、当初は横穴式石室の一種である竪穴系横口式石室が造られました。この後、

鶴岡市 義道から玄室を見る
井ノ口古墳



松代町の大室古墳群23号墳。玄室から羨道を見る

全国に広がり始めました。

長野県内でも6世紀に入り、飯田市を中心とする下伊那地域と長

いるものは、飯田市内にある正清寺古墳・御猿堂古墳・馬背塚古墳・姫塚古墳などの石室や、長野市布施塚2号

◇竪穴系横口式石室 竪穴式石室構造の短辺に出入り口と羨道を開いたもの。

これに対し飯田市での初期横穴式石室の特徴は、大和朝廷の本拠地であった畿内と同様に前方後円墳に造られ、さらに玄室は御猿堂古墳が長さ約10・25メートル、幅約2・3メートル、高さ約2・7メートル、馬背塚古墳は長さ約8・4

西山克己 県教委文化財・生涯学習課 教諭

古代への招待状

埋もれていた遺産

56

埴輪(はにわ)は古墳に立ち並べるために作られた土製の焼き物です。埴輪というと人物や動物などを形作っ

たものを思い浮かべる方も多いかと思いますが、埴輪にはこうした形象埴輪と呼ぶ一群のほか、円筒埴輪と呼ぶ

種類もあり、数量的にはこちらの方がはるかに多いのです。

円筒埴輪というのは、墓前に供える壺(つぼ)・形土器やそれを載せる器台形土器が発達・抽象化して、土管のような筒状やラッパのように上部が広がる朝顔状の円筒形に変化したものです。

形象埴輪は人物や動物(馬・犬・シカ・猿・イノシシ・鶏・水鳥など)、家や柵(さく)、器財(楯)たて、矛・大刀・甲冑、かつちゅう、いす、船など)をかたどったものです。

奈良時代に編さんされた「日本書紀」垂仁天皇の三十二年条には皇

墓・埴輪

(はに)氏の祖である野見宿禰(のみのすくね)が従者を生き埋め

聖域を区画の円筒形

「形象」は従者の代わり？

後の日葉酢媛命(すはすひめのみこと)が亡くなった際に、土師

にするとという従来の殉死の慣習をやめさせ、その代わりに土師部百人に人や馬など、いろ

ろに知られていました。しかしながら、こころは出現し、墳丘上で聖域の内と外とを区画す

ることはできません。円筒埴輪は4世紀に出現し、墳丘上で聖域の内と外とを区画す



千曲市森將軍塚古墳で復元された埴輪列(上)前方部、下(後円部) 千曲市教育委員会提供

いろいろな物の形を粘土で作らせて、その陵墓に立てたという記事があり、埴輪の始源説話として

く出現していることが既に明らかとなつていたので、この記事から埴輪の始まりを説明す

るために立ち並べたものと考えられています。一方の形象埴輪は円筒埴輪にやや遅れて出

現します。鶏と家形埴輪がまず登場し、4世紀末ころには器財埴輪が現れます。先述した人物・動物埴輪は5世紀中ころになってようやく登場します。形象埴輪の意味については「首長霊継承儀礼」「葬送列」「生前の一場面」「死後の世界における生活」など諸説があり、決着はついていません。

県内では約3500基ある古墳のうち埴輪を持つものは約120基にすぎません。このうち善光寺平では約50基を数えます。県内で最古の埴輪を持つのは4世紀中葉ころの千曲市森將軍塚古墳で、史跡整備がなされた現在では墳丘上に円筒埴輪や家形埴輪・壺形土器などの複製品が並び、当時の姿をしのぶことができます。

桜井秀雄・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

57

石室の天井が手を合
わせて合掌している形
に似ていることから、
このように呼ばれてい

ます。この合掌形石室の
天井構造には大きく2
つのタイプがあります。
一つは古墳時代前期、

特に4世紀代の古墳の
石室に見られるもの
で、板石を小口積み

に持ち送りし、天井石を
用いない構造です。も

う一つは古墳時代中期
から後期にかけて見ら

れるもので、板石を囲
むように並べ、その上

に屋根状に板石を組ん
で天井を造ったもので

す。このタイプの石室
は善光寺平で数多く見

られることから善光寺
平型合掌形石室と呼ば

れています。

この善光寺平型合掌
形石室は現在、善光寺

平で52基、山梨県で1
基、山形県で2基、福

墓・合掌形石室

島県で1基確認されて
いるにすぎません。

2タイプの天井構造 大室に多い「善光寺平型」

善光寺平型合掌形石
室の出現は5世紀中ご

室古墳群で見られま
す。この石室は6世紀
後半ごろまで造られま

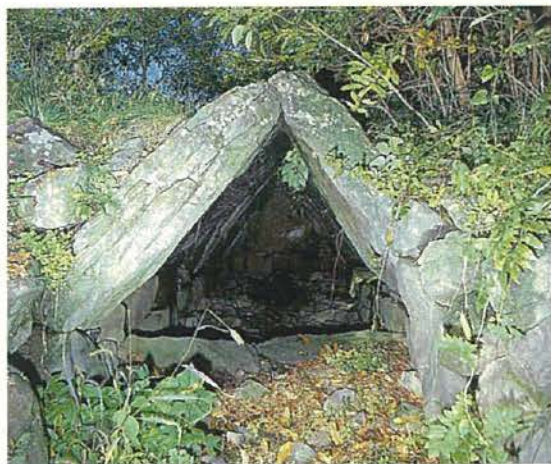
すが、6世紀中ごろ以

降には構造に大きな変
化が見られます。

大室古墳群などを中
心に5世紀中ごろから

のが多く、竪穴系横口
式構造あるいは石棺系

石室構造と呼ばれるも
のです。



後半にかけて造られた
構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

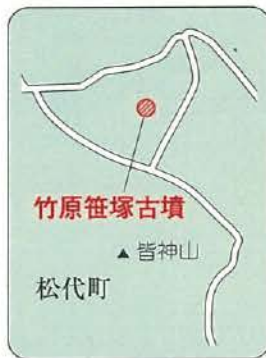
の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも



6世紀中ごろ以降に
なると、松代町竹原
塚古墳では石室の長さ
約6.8m、幅約2.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

松代町竹原塚古墳
の善光寺平型合掌形
石室(長野市教育委
員会提供)

高さ約1.9m、同空
塚古墳では石室の長さ
約6.1m、幅約1.5m、
高さ約1.7mの
規模となり、横穴式石
室構造となります。

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

この大室古墳群など
で見られる合掌形石室
は構造的・規模的にも
横穴式石室とは異なり
ますが、

横に入り
口を持つ
という意
味では、
横穴式石
室との類
似性が指
摘されてい
ます。

善光寺平以外で発見
されている山梨県・福
島県・山形県での合掌
形石室構造の類似性
については、墓制の継承

あるいは人々の移動な
どさまざまな考えられま
すが、いずれにしても
善光寺平からの影響に
よるものであろうと考
えられます。

また、この善光寺平
型合掌形石室のルーツ
については、横石塚古
墳と同様に朝鮮半島に
求めようとする考えも
ありますが、詳細につ
いては今後の研究に期
待されることです。

西山克己・県教委
文化財・生涯学習
課 教諭

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

の構造は、石室の長さが
約2.5m、幅が約1.5m、
高さが約1.5mほどのも

古代への招待状

埋もれていた遺産

58

縄文時代は1万年と長く、出土する遺物も多種多様です。中でも謎が多く、また興味深い遺物に土偶があります。

す。土偶は人や動物を表現した土製品(焼き物)です。では当時、土偶が作られた理由は、何なのでしょうか。

中野市姥ヶ沢(うばがさわ)遺跡から全体像がよく分かる土偶が出土しています。高さ19センチ、幅12・5センチ、重さは485グラム。全体に丁寧に成形され、内部は空洞ではなく、両手に載せるとずっしりとした重量感があります。土偶は女性を表していることが多く、この土偶も乳房の表現、安産型ともいえる安定した下半身、ゆったりと膨らんだおなかの様子から、妊娠中または出産を終えた女性、つまり「母親」がモデルであると考えられます。そしてもう一つの特

信仰・土偶

徴は、「立つ土偶」であることです。下半身に重心を置き、足の裏に手は真っすぐ真横に伸

多くは女性がモデル 儀式で壊して埋めた?

は平らに成形されています。立たせてみると少しだけ左に傾くのは

ばしています。顔には目とまゆ、口が表現され、頭のとっぺんが平らなことから「河童(かつぼ)形土偶」という、面白い名称で呼ばれています。顔には



姥ヶ沢遺跡の土偶(中野市歴史民俗資料館所蔵 撮影 柳澤)

ばれています。

実は国宝である茅野市棚畑遺跡出土の「縄文のビーナス」も河童形土偶のグループに入ります。

河童形土偶は縄文時

代中期に東北、北陸地方から中部高地で作られました。そのうち全体的像が分かる例は全国で十数例しかありませんが、どれも自立しま



檀田遺跡の土偶出土状況(長野市埋蔵文化財センター提供)

す。それ以前の土偶は小さく板状で、立たせることができません。「立たない土偶」から「立つ土偶」へ変換点にある土偶なのです。また土偶はバラバラ

に壊れて出土する例が多く、姥ヶ沢の土偶も30センチ四方の範囲から3つに分かれて出土していました。破片は見つかったも、それ以外の頭部と右腕、脚部が欠

たりしたのではないかと考えられています。00(平成12)年、長野市北部にある檀田(まゆみだ)遺跡から

居跡から出土し、同じ住居跡の穴から琥珀(こはく)の玉や、特殊な土器(有孔鏝付土器)を埋蔵した穴が見つかるなど、土偶を用いた祭事者のような人物が暮らした住居の可能性を示す貴重な出土例になりました。

柳澤亮・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

59

「ここという「まつり」とは神に奉仕し、供物を献する「神まつり」のことです。「祭祀（さいし）」とも称されます。

しかしながら、信仰という精神世界に属することは、物質資料から歴史を復元していく考古学的手法では最も不得意な研究分野とい

えます。ただし祭祀遺跡と呼ばれる、神まつりに使用された道具・祭具や祭場の痕跡が残されている場合があります。これが考古学から神まつりを探る上で大きな手掛かりとなるのです。神まつりでは、神に喜んでもらえる食物や貴重品（衣服や鉄など）をささげることに重きが置かれます。従って祭祀遺跡では何といっても土器の出土が目立ちます。これらにちそうや酒などを盛ったのです。

また、祭祀遺跡からは石製模造品という祭具も出土します。これ

信仰・古墳時代のまつり

は滑石などの軟らかい石を用いて、剣や鏡、玉などを模したもので、5世紀以降の祭祀

神に奉仕 供物を献上 祭祀遺跡 大きな手掛かり

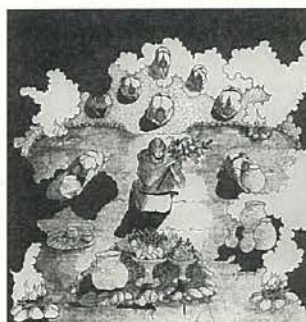
遺跡に特徴的な遺物です。神まつりを執り行う人物は、勾玉（まが

たま）や管玉（くだたま）などの玉類を身に付け、石製模造品を取り付けた神（さかき）

の枝を手にとって神を招き寄せる神事に臨んだのです。長野県内では全国的にも注目される祭祀遺跡が多く見られます。



駒沢新町遺跡から出土した土器（長野市教育委員会提供）



からは大量の遺物が出た。土し、神まつりに用いた道具を廃棄したものと考えられます。

長野市上駒沢町の駒沢新町遺跡では祭祀遺構5基が発見されまし

す。石製模造品などが出土しました。出土遺物の中身は一般集落で用いられているものと変わりありませんが、遺物量は相当

長野市篠ノ井塩崎の石川条里遺跡では、約400基の土坑群を幅約10-13mの大溝が取り囲む4世紀後半-5世紀初頭の祭祀遺跡が発見されました。土坑

鉏・車輪石など、銅鍬（ぞく）、銅鏡など前方後円墳の副葬品とも一致するような希少価値のある遺物も見られることから、近在する川柳將軍塚古墳に眠

た。このうち1号址（し）では4-2m×3mの長方形の土坑を約40cmほど掘り下げてあり、その中から500個体を超える完形土器や鉄鍬・刀子（とう

数に上るので、5世紀代の集落を挙げての神まつりであった可能性が高いと思われます。ほかに坂城町青木下遺跡や松本市高宮遺跡など、集落単位ある



古墳時代祭祀の復元想像
図11 小山内玲子・画（長野県考古学会誌79号より）

桜井秀雄・県埋蔵文化財センター調査研究員

いは複数の集落が集まって行われたと考えられる著名な遺跡が県内にはあります。石製模造品などの祭具は竪穴住居跡から出土する事例も多く見られるので、竪穴住居単位でも神まつりを行っていたと見てよいでしょう。祭祀遺跡はこのほかにも峠や道路、水田跡や畑跡でも認められます。このように古墳時代になると、さまざまな場所、また首長クラスから一般民衆の多様な階層で、それぞれ神まつりが行われるようになってくるのです。神まつりにおいて大きな画期をなす時代といつてよいでしょう。

古代への招待状

埋もれていた遺産

60

奈良の唐招提寺や東大寺大仏殿の屋根の隅に、靴の形をした大きな棟飾りがあります。ご覧になった方も多いでしょう。これを鴟尾(しび)といいます。

据え付けられたのが鴟尾です。現在日本に残っている最も古い鴟尾は、奈良時代に建てられた唐招提寺金堂西側のものです。

90(平成2)年、浅川扇状地の二ツ宮遺跡(長野市稲田)から、この鴟尾のひれの一部が見つかりました。その形から7世紀後半ごろに作られたものと考えられます。破片から想像すると、この鴟尾はかなり大きな施設に据えられていたでしょう。

古代の鴟尾は全国で約300ほど見つっていますが、県内では二ツ宮遺跡だけです。唐招提寺のほか、三重県津内(つじがい)と

信仰・長野市内の古代寺院

今から1400年前の飛鳥時代、瓦を作る技術が中国・百済から伝えられました。瓦葺きの大寺院や大きな宮殿の屋根の棟の両端に

瓦窯跡など完全な形のものが見つかったいますが、大部分は破片の一部だけしか発見され

て造られた法隆寺玉虫厨子や、東御市の両羽

屋根の棟飾り「鴟尾」

飛鳥時代 百済から伝来

ていません。古代の寺院や宮殿などは建物自体が途中で壊れたり建て直したりされ、現代まで残ることがまれだ

神社の石造齋(せきぞう)がん鎌倉時代末にはミニチュアの鴟尾が付いています。鴟尾はトビの尾を模しているともいわれますが、寺院の大棟を大きく反らせて見せる効果があ

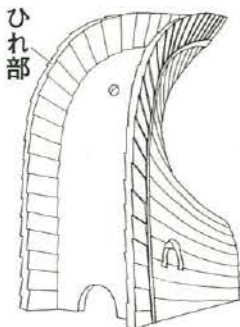
す。浅川扇状地から鴟尾が見つかったことは重要な意味があります。これまで浅川扇状地からは、古代寺院の痕跡である古代瓦がたくさん出ています。また、

す。これらの地名がいつごろの様子を伝えるものかは分かりませんが、昔寺院があったことを示す地名とも考えられます。

子地区は多古駅家(たこのうまや)があったと推定される交通の要衝でした。多古は更級郡日理(わたりひだり)から犀川を渡った水内郡の最初の駅になりました。

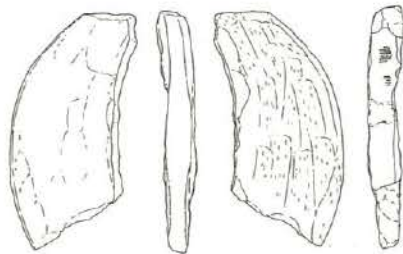
があらたらしいこと、そして寺院の瓦を焼く窯などがあったことが想像できます。古代の善光寺がどのようなものであったのか、よく分かっています。若槻の古代寺院の存在は、古代善光寺のナゾを解く鍵が秘められています。

10世紀ごろになると鴟尾は突然作られなくなり、代わって獸頭や獸面などの付いた装飾品(鴟吻しぶん)が増えます。わたしたちが知っているお城の天守閣のしやちは鴟尾が変化したものと考えられています。



二ツ宮遺跡からの出土した鴟尾の図(長野市立博物館提供)

鴟尾のひれに当たる部分の実測図(長野市埋蔵文化財センター提供)



村石正行・県立歴史館専門主事兼学芸員

ひれ部
るようです。
「年中行事絵巻」など平安時代の絵巻にも当時の寺院の装飾として鴟尾が描かれています。いにしえの人々の寺のイメージには鴟尾が欠かせなかったもので

若槻の山千寺には白鳳時代(7世紀後半)の銅造観音菩薩(ぼさつ)が伝来しています。二ツ宮遺跡周辺には寺下・寺西・権現堂・寺田など寺院にまつわる地名が集中しています。
◇**龍(がん)** 仏像などを納める仏壇の一種。厨子ともいう。
◇**東山道** 大宝律令で制定された都と関東・東北を結ぶ交通路。筑摩郡から善光寺平へ抜ける支道があった。
※古代寺院の瓦については本シリーズ第34回「住居・古代の瓦」を参照。

古代への招待状

埋もれていた遺産

61

01(平成13)年に古
代の仏教に関する重大
な発見がありました。

す。今回出土したもの
は幢身(とうしん)と呼
ぶ部分が六角柱の形を
しているの、六角木
幢といいます。

木幢はこれまで「餓
鬼草紙(がきそうし)」
などの文献史料でしか
存在を確認できません
でした。石で作られた
石幢(せきとう)は各地
に現存していますが、
中世(13世紀)以降の
ものがほとんどで、木
幢は石幢に先立つもの
と考えられていまし
た。社宮司遺跡のもの
は放射性炭素年代測定
の結果、11-12世紀末
にかけて作られたと考
えられ、古代にさかの
ぼります。

更埴市(現・千曲市)
社宮司遺跡での木幢
(もくぼう)の出土で

信仰・古代の仏教

11-12世紀の「木幢」

浄土教の普及を示す？

上から宝珠(ほうし
ゆ)・笠(かさ)・幢
身、笠からつり下がる
蕨手(わらびて)・風
鐸(ふうたく)・風招
つています。

阿弥陀如来は浄土教
で重要視されている仏
です。木幢の性格など



社宮司遺跡から出土した六角木幢
(県埋文センター提供)

(ふうしょう)という、
ほとんどの部品が出土
しています。そして残
り具合はとても悪いの
ですが、幢身の表面に
は阿弥陀(あみだ)如
来と思われる仏画が描
かれていることが分か
っています。

かっています。
長野市篠ノ井塩崎の
篠ノ井遺跡群新幹線地
点では、瓦塔(がとう)
と埴仏(せんぶつ)が出
点出土しています。



れそうです。
北信地方でも7世紀
末ころになると、仏教
に関係する遺物が見つ
ています。

土してあります。瓦塔は
寺院にある塔を模した
ミニチュア、埴仏は型
抜きした仏像のレリー
フのようなもの
です。どちら
も土師(はじ)
質の焼き
物で、信仰の
対象として集
落内にあった
ものだと思え
られます。

す。埴仏は篠ノ井遺跡
群県道長野上田線塩崎
バイパス地点からもほ
ぼ完全な形のものが2
点出土しています。

瓦塔・埴仏
ともに、その
特徴から8-
9世紀のもの
と思われるま
は、古代の人々が日々
の暮らしなかで、信
仰を持って生活してい
た痕跡といえるでしょ
う。

ほかに仏教にかかわ
るものとしては「寺」
や「尼」などが墨書さ
れた土器や仏鉢形土
器、お堂と考えられる
遺構などがあります。
また、神に関係する遺
物が見つかることも少
なからずあり、仏教だ
けではなく神に対する
信仰も盛んだったと考
えられます。

寺内貴美子 県教
育委員会文化財・
生涯学習課専門主
事

古代への招待状

埋もれていた遺産

62

95(平成7)年度と96年度、国道406号と県庁大門町線の改良

工事に伴い、善光寺の門前、長野遺跡群西町・東町遺跡の発掘調査

査が長野市によって行われました。旧裾花川の段丘上、湯福川の扇状地で立地条件がよく、縄文時代や古墳時代から集落があったことが判明したのです。

善光寺との関係で注目される中世のものとしましては、多くの銭貨や中世陶磁器などの遺物が出土したのをはじめ、鎌倉時代の溝跡、倉庫の跡と思われる室町時代の竪穴状遺構や中世に何度か経験したと伝えられている火災の痕跡なども認められました。

応永7(1400)

信仰・中世善光寺の門前

五輪塔 死者を供養 葬送・納骨の地 花岡平

年、善光寺門前の様子を「大塔物語」は「善

光寺は三国一の霊場にして生身弥陀(みだ)の浄土、日本国の津と

を問わず多くの人々が集まり、まさに善光寺の門前市が開かれていたこ

とがつか

がえ、発

掘成果か

らもその

にぎやか

な様子は

裏付けら

れつつあ

るといえ

るでしょ

う。

その一

方で注目

されるの

は、数百

点にも及ぶおびたし

い量の五輪塔の部材が

江戸時代に、建物の床



花岡平の五輪塔群

下施設を造るための石積みや参道の側溝、町屋の基礎に利用された状態で出土したことです。

じんいっき)との間に対立が生まれ、ついに現在の篠ノ井塩崎辺りで激しい合戦となりました。世にいう「大塔の合戦」です。守護方は敗れ、多くの将兵が自害しまたは戦死したといわれています。このとき死体を火葬し、埋葬・供養したり形見の品々を妻子方に届けたりするといふ行為を行なったのが善光寺妻戸の時衆、十念寺の聖(ひじり)たちだったのです。

かけて善光寺では時衆の僧が進出し、葬送・通信にかかわっていたといえます。

遺跡から出土した五輪塔がこのときのものであるとはいえませんが、われわれがよく知っている近世以降の善光寺とは違った姿や性格をうかがい知る貴重な資料になるのではないだろうか。

入沢昌基・県埋文センター調査研究員

◇国人一揆 国人領主同士の連合体。信濃では村上氏、高梨氏、井上氏など有力国人と大文字一揆の人々が連合し、室町幕府から派遣された守護小笠原氏と対立した。

して門前市をなし…」と描いています。男女、貴賤(きせん)の上下

点にも及ぶおびたし

命された小笠原長秀と信濃の国人一揆(こく

古代への招待状

埋もれていた遺産

64

古墳時代には風変わりな勾玉(まがたま)が出現します。普通の

あたかも子供のようないな勾玉(まがたま)が伴っている形状から「子持勾玉」と呼ばれてきました。

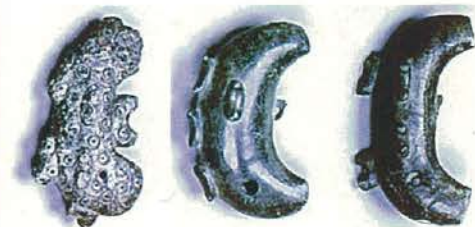
江戸時代には石剣の柄頭と考えられていましたが、明治時代には子持勾玉の名称が用いられ、信仰・祭祀(さいし)に係る遺物であるとの見方が有力になりました。出土事例は

信仰・子持勾玉

勾玉よりも大型で、その側面や腹面・背面に小さな勾玉状の突起物を作り出したもので、

非常に少なく、全国で約450点を数えるにすぎません。

長野県では三十数点にのみ子持勾玉の多く見



観音寺遺跡出土の子持勾玉(長野市立博物館所蔵) = 「長野市の文化財」より

が確認されており、全国でも群馬県、奈良県に次ぐ出土数といわれ

られる地域といえます。篠ノ井東横田の観音寺遺跡からは昭和13年の墓地移転工事の際に3点がまとまって出土し、現在は東横田神社の社宝となっていています。いずれも長さは8-

市内で十数点が出土

信仰・祭祀に関する遺物?

9センチほどで、石材に加工しやすい滑石や粘板岩が使われています。

また、遺跡からの出土品ではありませんが、松代町東条の玉依比売命(たまよりひめのみこと)神社には多数の玉類とともに9点

もの子持勾玉が所蔵されています。この玉類は「児玉石」といわれ、毎年正月七日に「児玉石神事」が行われます。これは神社の所蔵する児玉石の数を数える神事で、昨年よりも増

6点と増加しています。年々増えてきたことを不思議に思うかもしれませんが、これは新たに奉納されるものや割れたものがあつたからです。玉依比売命は神武天皇の母ですが、

加すれば豊年で、減少すれば凶年とされま

その名前にあやかり、採集された玉類が奉納されたのでしよう。

この「児玉石神事」では玉類の増殖の有無が大きな柱をなしていること、また子持勾玉のうち3点は「三ツ石」といわれて神事で重要

な役割を果たしていることから、子持勾玉の用途・性格論にも大きな影響を与えてきました。

つまり、呪力あるものと考えられた勾玉に、さらに呪力ある子持勾玉を付け、呪力の強化を持たせたものではないか。それはさらに転じて多産・豊穰(ほうじょう)・増福などの意味も併せ持つようになったものではないかと考えられるのです。とはいえ、まだまだ謎の多い遺物といえます。

◇勾玉 古代の装身用の玉で、ヒスイやメノウ、碧(へき)玉などを材料にした。端にひもを通す穴がある。

桜井秀雄・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

65

奈良時代から平安時代の初めに当たる8-

10世紀の間、集落内で食器に字句を書き記す

行為が行われていました。筆で墨書きしたものを墨書(ぼくしよ)

土器、釘(くぎ)状の工具で刻み記したものを刻書(こくしよ)土器と呼んでいます。数の上では墨書土器が圧倒的に多く、県内の出土数は5000点を超えていると思われます。

墨書土器が現れる8世紀代には、人名・地名・施設名などと推定できる字句が多く、具体的・実用的な目的で記されたものと思われるが、墨書土器が盛行する9世紀になると、意味を確定できない

い漢字・文字のものが圧倒的になります。ま

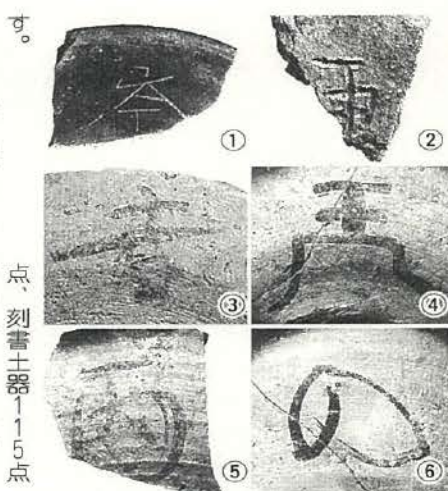
集団で特定の字共有

10世紀半ばには消滅

信仰・墨書土器

た、特定の字句が多数記されたり、通常の漢字にはない特殊な字形・字痕(④⑤)が見られたりするのも特徴的で

世紀には集落そのものが消滅してしまう例が大変多いのです。長野市篠ノ井遺跡群では墨書土器475



ところが、遅くとも10世紀半ばころまでには急速に姿を消してしまいます。何よりも10

点、刻書土器115点が出土しています。ここでは、8世紀末に形成された集落景観を基に9世紀後半まで集

落が拡大し大集落を形成します。しかし9世紀末には一気に縮小し、10世紀半ばにはかつての面影がなくなつてしま

ます。

土器に墨書した「の」「丙」「吉」「山」「車」「谷」の7種類の文字が、長野市篠ノ井遺跡群から出土した墨書土器の大部分は、集落が最大規模となり、そこから一気に縮小する9世紀半ば-10世紀初頭の数十年間に残されます。

これは県内のみならず、東日本の集落遺跡に共通して見られる特

徴です。土器への墨書行為が盛んに行われる9世紀は、次第に拡大した集落が、安定期から縮小または消滅に向けて大きく変動する時期なのです。

9-10世紀は、戸籍・計帳による人身把握を基本とする律令地方制度が崩壊し、国郡支配を離れた在地の有力者による私的な経済活動が活発化する時期に当たります。また、気候の面では相対的に低温の湿潤期となり、天候不順による不作や自然災害が多発した時代でもありました。

社会的にも自然的にも不安定な時代、人々

は集団ごとに特定の字句を選び、それを共有することによって集団の結びつきを強めようとしたのかもかもしれません。めでたい意味を持った字句や特殊な字形の文字が多いのは、文字に対して現世利益を実現する呪的効果を期待したのではないでし

ようか。

墨書土器の消滅は、そのようにして維持されてきた集団内秩序の解体を示しているのではないかと思われる

金原 正・野沢南
高等学校教頭

古代への招待状

埋もれていた遺産

66

古代(ほぼ7-12世紀)から中世(ほぼ13-15世紀)では、「呪

木札がまじないに使われていました。

古代では地方の役所跡やその周辺から見つか

かるのに対し、中世では集落内の井戸や穴の跡から出土するのが一般的で、出土数も古代より圧倒的に多くなります。これは、古代では役所などで一部の人だけが使用していたのに対し、中世は庶民にも浸透していたからと考えられています。

中世庶民信仰の資料として重要なものの一つで、記載されている内容には、呪句(じゅく)まじないの言葉、

符木簡(じゅふもつかん)と呼ばれる木や竹の札に呪文を書いた

符録(ふうろく)道教の秘文)や祭儀に關係す

まじない 庶民に浸透

災いよけを願った木札

る図、神仏の名号などがあります。

長野市篠ノ井塩崎の石川条里遺跡では6点

(符録) 鬼 鬼急々如律令 北



6点出土した石川条里遺跡の呪符木簡の1枚。長さ25センチ(県立歴史館提供)

の呪符木簡が、木製の容器と一緒に溝跡から見つかり、そのうち3点からは「急々如律令」「鬼」「西」「南」「北」

してよく使われていました。もともとは中国の後漢代までさかのぼることができる古代中国の公文書の終わりに

などの文字が読み取れました。

「急々(急)如律令」は呪句の決まり文句と

記された語句でしたが、道教が国家権力を表す言葉を呪句に取り入れたため、呪句とし

て使われ、中世になると、くしゃみをした後の凶事避けるまじないとして「休息萬命(くしゃみの意味)、急急如律令」などと唱える習慣があるくらい広がったようで、一切の悪魔魔事邪道を行うことを戒める意味を持つよう

「鬼」は、災害をもたらす人界以外に住む魔物・悪神のことを指しています。また、3点の木簡にはそれぞれ「西」「南」「北」の文字が読めることから、残りの3点の中に「東」がある可能性があります。そうすると、これ

ら呪符木簡は屋敷などの4方向にそれぞれ置いて「速やかに鬼・悪霊よ(ここから)去れ」と、まじないをしたのではないかと考えられます。

そして、呪符としての役目を終えた後、まとめて容器に入れられ、溝に棄てられたものと思われます。

中世末から近世の初めころになると呪符は紙に書かれることが多くなり、呪符木簡は減少していきました。

寺内貴美子 県教育委員会文化財・生涯学習課専門主事

信仰・呪符木簡

古代への招待状

埋もれていた遺産

67

が、「塚」とは一般的に円形に盛り上がった丘状のものを指しま

「塚」というと、街道沿いに造られた近世の一里塚を想像します

す。

塚には①民間信仰に基つき村境などに築き神を祭った塚(狐塚・塩塚など)②仏教思想に基つく塚(供養塚・十三塚・礫(れき)石経塚など)③山岳信仰に基つく塚(富士塚・御嶽塚など)——といったように幾つもの種類があり、特に中世から近世にかけて全国各地でたくさん造られました。北信濃は塚が多く分布する地域として有名で、山中を歩くと尾根や丘陵でこんもりとした盛り上がり(土まじゅう)を見ることが

ができます。

近年、北平1・2号

北信濃には多く分布 多様な願いを込め造営

信仰・中世の塚

飛山遺跡(下水内郡豊田村)、月岡遺跡(中北平1・2号塚では、何回も土を盛り上



豊田村飛山遺跡の塚の内部から出土したおびただしい河原石(県立歴史館提供)

塚(長野市松代町)、浪人塚(長野市若穂)、野市)で塚が発掘調査されました。

げ、その都度堅くたたき締めて造られていたことが分かりました。浪人塚では塚の内部から火葬骨を埋めた墓、飛山遺跡ではおびただしい河原石や方形の石列と土坑(穴)、月岡遺跡の塚では經典を河原石に1字書き写した礫石経が多量に見つかりました。

内部施設の発見により、浪人塚・飛山遺跡は何らかの宗教行為もしくは信仰行為が行われていたものと思われます。月岡遺跡の塚は礫石経を積み上げることで教典の埋納を意味する仏教的色彩の強いものといえます。

このような塚の構造は、塚の分布と密接な関係があります。北平1・2号塚や旗塚遺跡(長野市豊野町)は、尾根や丘陵上に直線的に並んでいるものです。「境界」「傍示」などを示し、一定区域を区画もしくは規則的に並べることに意味があった民間信仰に基つた塚であったと思われる。これらは土盛り塚で、出土遺物が極めて少ないものです。茶臼峯岩跡の塚(中野市)では、塚の頂上に何らかのものを立てたと思われる穴が見つかつています。

一方、浪人塚、飛山

河西克造・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

68

現在、わたしたちが使っている鏡は板ガラスに凸面が映る鏡がほとんどで、古墳時代の鏡は銅鏡で、凸面鏡はほとんどありません。

凸面鏡はゆがみがありませんが、広い範囲を写すことができます。

こうした銅鏡は弥生時代に登場しますが、当時から単なる化粧道具ではなく呪術的な霊力のある祭器として考えられていました。古墳時代になると鏡を愛好する傾向がますます高まり、古墳の副葬品として出土する例が飛躍的に増え、全国で4000面以上を数えるほどです。

このうち中国製のものが3分の1ほどで、

スに水銀膜を張った平面鏡ですが、古墳時代

信仰・古墳時代の鏡

愛好増えて副葬品に 篠ノ井でも数例出土

残りは日本で作られたもの(倣製鏡)ほうせ

いきょう)です。

鏡の裏側を鏡背といいますが、いろいろな文様が描かれています。古墳時代の鏡には非常に多くの種類があります。



異県=鏡文花行銘内日月体字
長野県教育委員会提供
異県=鏡文花行銘内日月体字
長野県教育委員会提供

が、こうした文様の違いで鏡の種類を分けています。また、この鏡背には年号や文字が刻まれていることもあり、製作年代などを知る大き

鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう)は古くから注目されてきました。それは中国の史書である『魏志倭人伝(ぎしわじんでん)』に

な手掛かりにもなっています。

中でも縁の断面形態が三角形を成し、神像や獣形が文様として描かれている三角縁神獣

「邪馬台国(やまたいこく)の女王の卑弥呼は魏王から百枚の銅鏡を賜った」という記述があります。この魏王から賜った鏡が三角縁神獣鏡であるとの見方が有力であるためです。

三角縁神獣鏡は全国の主要な前期古墳(3世紀後半〜4世紀)から約500面も出土していますが、それは魏王から下賜されたものが一括保有された後に、大和政権により各地の主要な首長に配布され、古墳に埋納されたものと考えられています。そのため邪馬台国の所在地をめぐる論

争や大和政権の成立過程を探る大きな手掛かりとなっています。

県内でも最古の前方後円墳である千曲市の森將軍塚古墳から、破片ですが出土しています。

県内に見られる古墳時代の鏡は約120面余を数えます。そのほとんどは古墳からの出土ですが、阿智村神坂峠(みさかとうげ)では祭祀(さいし)遺跡から獣首鏡片が、長野から獣首鏡片が、長野市篠ノ井塩崎の松節(まつぶせ)遺跡からは住居跡から内行花文鏡(ないこうかもんきょう)片が出土しています。

現在、川柳將軍塚古墳出土と伝えられる鏡は6面あり、中でも内側に12単位の花文(円弧文)を配し、その外側には18文字の漢字が刻まれている内行花文鏡は資料的価値の高い見事な逸品です。

古墳では、江戸時代の書物によると27面の鏡が出土したといわれていますが、その実態ははっきりしません。もしこの数字が本当であるとすれば全国で5番目に多い出土数の古墳となります。

松井秀雄 県埋蔵文化財センター調査研究員

69

廣田和穂・県埋文
センター調査研究
員

古代への招待状

埋もれていた遺産

70

成岩です。破片の割れ口が鋭いので石器の材料に適し、北海道白

黒曜石は黒色透明で光沢があり、ガラスに近い化学組成を持つ火

滝・東京都伊豆諸島の神津島・長野県和田峠・島根県隠岐島・佐賀県腰岳が産地として知られています。中でも和田峠周辺の黒曜石は不純物が少なく良質で、埋蔵量も豊富だったことから、古くから石器時代人たちに利用されてきました。

蛍光X線分析装置などの機械を使って黒曜石の元素組成を調べると産地を知ることができます。

上水内郡信濃町の野尻湖遺跡群で出土した約3万年前から1万5000年前の黒曜石製

流通・黒曜石

和田峠周辺など産地 石器 野尻湖遺跡群でも

の石器や石片約1万6000点について分析

を行った結果、ほとんどが和田峠や霧ヶ峰周辺の産地であると推定されました。

野尻湖と和田峠周辺



の黒曜石原産地との距離は直線でも80㌾程度、歩いて運んだとすると100㌾以上の道のりはあったことでし

野尻湖遺跡群大久保南遺跡の黒曜石集中。約3万年前に和田峠周辺から持ち込まれた黒曜石で、47点が直径50㌾程度の範囲に集中して出土した。総重量は2㌾。



べき事実です。野尻湖で黒曜石が使用され始めるのは、約3万年前のことです。遺跡には原石や大きな塊

遺跡がありません。恐らく当時の人たちは原産地に赴き、黒曜石の原石を採集して、野尻湖周辺に持ち帰り、そ

よう。道さえ整備されていない時代にこれだけたくさん黒曜石が運ばれていたことは驚く

のまま持ち込まれて、石器が盛んに作られた痕跡が見られます。その一方で、黒曜石原産地周辺にはあまり

ここで打ち割り作業をしたと考えられます。2万年前ごろになると様子が変わります。野尻湖遺跡群には完成品が多く持ち込まれ、石器製作が少なくなりま。黒曜石による石器製作の場が黒曜石原産地周辺に移るので

小県郡長門町の鷹山遺跡群や和田村の男女倉(おめくら)遺跡群では、一般的な遺跡をはるかに上回る石器製作の痕跡が残されています。このような遺跡群を黒曜石原産地遺跡群と呼んでいます。ここで作られた石器は野尻湖遺跡群のほか、

谷 和隆・県立歴史館専門主事・学芸員

もっと遠くの北陸や関東、東海地方へもたくさん運ばれています。

信州産黒曜石は信州だけでなく、中央日本

古代への招待状

埋もれていた遺産

71

近年の発掘調査によつて、千曲川の沖積層に埋もれた縄文時代の

遺跡が数多く発見されています。
長野市の石川条里遺跡(篠ノ井)や松原遺

跡(松代町)、千曲市屋代遺跡群の縄文時代の生活面は、ともに地表下3・5メートル以上の深さから見つかりました。千曲川は、この地域で河川こう配がかなり緩やかになります。このことから、大きな「ムラ」が営まれる背景には、河川や河川沿いの道の往来による、交易中継地としての役割が考えられます。

屋代遺跡群の縄文時代中期の集落からは、千曲川流域を中心に分布する地元の土器とともに東北や北陸、関東地方の特徴を持つ土器が多数見つかりまし

河川の近くで交易 東北や北陸系の品が多数

た。東北系の土器は、信濃川をさかのぼって

もたらされたり、北陸の土器とともに関川沿いにもたらされます。

ただ、すべての土器やその情報が動くわけではありません。この

するという現象があります。地域の個性は作る集団の個性です。そこには、かなり強い規制が働いていたはずです。例えば、地元の庄痕



出東史
から後葉の
屋代遺跡群
千曲市縄文
土器(長野県
北系土器(立
館所蔵・写真提供)

ような現象の背景には、縄文社会のどのような実態が反映されているのでしょうか。

文様、形、粘土が似通った個性の強い土器が、一定の地域に分布

隆帯文(あっこんりゅうたいもん)土器の場合、粘土ひもの上に圧痕を付け、三角や四角ではなくて渦巻き文様を描き、粘土は千曲川左岸で採らなければな

らなかつたようです。地域の人々に共有された掟(おきて)があったのでしょうか。

縄文時代は、採集や栽培によって確保された植物質の食料に依存することの多かった時代と考えられます。明

科町北村遺跡では、人骨のコラーゲン分析の結果、タンパク質の70%以上を粟、トチ、コナラなどの植物から摂取していたことが分かりました。

女性の労働によって確保されることの多い植物質食料によって支えられる社会には、妻方居住(つまかたきょじゅ)の結婚形態が目立ちます。生活上の技

術は母から娘へと代々伝えられていきます。女性の労働とされる土器作りの技術も、生まれ育った地域のネットワークの中で長く伝えられたと考えています。

一方、一定の地域を越えて遠くへ運ばれる土器や石器があり、地域の個性が強ければ強いほど他地域からもたらされた土器の特徴は際立ちます。

東北系や北陸系土器の一部には、胎土の特徴から地元以外で作られたと考えられるものがあります。さらに、運ばれた土器をまねて地元

の粘土で作ったと推測されるものも現れます。

土器やその他の地域の資源を持つて遠くのムラへ旅する集団。その集団を受け入れる旅先のムラで行われる交換。世界の民族例を参考にすると、交易は男性の仕事です。そして持ち込まれた土器を手に別々の土器を作るのは女性です。土器が流通し、受け入れられる背景に何かが見えませんか？

水沢教子・県立歴史館専門主事兼学芸員

◆妻方居住 結婚生活が妻の生まれ育った所で営まれること。

流通・土器と「ムラ」

古代への招待状

埋もれていた遺産

72

私たちは、日常生活の中で必要であったり、欲しかったりと思う物

先も行ってきました。善光寺平一帯で水田稲作を主な生業(なりわい)として営んだ弥生時代の人々も、煮炊きをする鍋やよく切れる刃物、身を飾る美しい玉が欲しいとか、光り輝く腕輪をしたい、強力な武器を持ちたいなど、手に入れた物がいろいろあつたと思います。

品を手に入れようとしたとき、手作りもしますが、ほとんど流通や交流を通して入手していま

流通・渦巻文裝飾付鉄剣

必要な物 流通などで 朝鮮半島との関連も視野

り出してもきました。しかし、手作りしよう

とその原材料をどんなに探しても、善光寺平一帯からは調達できなかったり、技術がなくて作ることができない場合があります。

その場合には、流通や

つたり原材料であつたという場合はあるでしょうが、国内のどこから流通や交流を通して善光寺平一帯にもたらされたものです。

玉(管玉)が副葬されていました。また、遺跡内B地区からは2本の鉄剣が出土しました。そのうちの1本の鉄剣は3

を分析した結果、3本は朝鮮半島で作られたことが分かりました。弥生時代の善光寺平一帯で行われていた流

通や交流の実態は、発見された土器や石器、金属器などを通して、近隣地域や国内各地とのかわりを整理していくことで大半は明らかにできるでしょう。しかし「渦巻文裝飾付鉄剣」の存在は、流通や交流について朝鮮半島のこと

も視野に入れながら考えていく必要があることを教えてください。

市澤英利・県埋蔵文化財センター調査部長



X線写真▼



渦巻文裝飾付鉄剣(木根島平村教育委員会「根塚遺跡」報告書より)

交流によって入手しました。本連載でこれまでに取り上げてきた「鉄斧(てつふ)」 「鉄釧(てつくし)」 「銅釧(どうくし)」 「銅釧」などの金属製品やヒスイ製の「勾玉(まがたま)」などは、製品であ

資料として、96(平成8)年、木島平村根塚(ねづか)遺跡での発見があります。根塚遺跡の円形墳丘墓は弥生時代末葉に造られ、埋葬主体の木棺には一振りの鉄剣・多量のガラス小

確認され、「渦巻文裝飾付鉄剣」(うずまきもんそうしよく)と命名されています。出土した3本の鉄剣について、渦巻文の文様構成を検討したり、鉄素材の成分

を分析した結果、3本は朝鮮半島で作られたことが分かりました。弥生時代の善光寺平一帯で行われていた流通や交流の実態は、発見された土器や石器、金属器などを通して、近隣地域や国内各地とのかわりを整理していくことで大半は明らかにできるでしょう。しかし「渦巻文裝飾付鉄剣」の存在は、流通や交流について朝鮮半島のこと



◇円形墳丘墓 弥生時代の後半、円形に盛り土をして高まり構築し、そこに坑(あな)を掘って遺体を埋葬した古墳の前段階の墓。根塚遺跡は長野県史跡指定候補として最近、県文化財審議委員会に諮問されている。

古代への招待状

埋もれていた遺産

73

弥生土器は地域ごとの特色を持っていて、同じ用途の土器でも地域によって器の形やデザイン、製作技法が違います。

もちろん、隣接する地域の土器が似るのは

当然で、東から西へ、北から南へ、地域色がグラデーションのように移り変わって行くのが実態でしょう。しかし、遠い地域の土器と比べてみると違いは明確です。ある地域の多くの遺跡から、遠隔地の特徴を持つ土器が出土した場合、それは何を表しているのでしょうか。

弥生時代から古墳時代へ移行するころの多くの遺跡から、遠く離れた地域の土器が見つかるという現象が日本各地で認められています。しかも、この3世紀後半という時期にな

流通・土器の移動

全国統合の動き波及 畿内から流入 地元に着

って、にわかに急増するのです。とりわけ、東日本では北陸と東海

の土器が顕著に出土しており、そうした遺跡は関東から南東北までも分布しています。

長野県内では、北陸系土器は千曲川流域を



長野市鶴前遺跡から出土した北陸系の甕(県埋蔵文化財センター10周年記念誌より)

中心に出土しています。長野市篠ノ井の鶴前遺跡では、地元の土器を圧倒するほどで、北陸からの移住者による土器製作が考えられ

ていました。時代終末期の墳墓である長野市松代町の北平1号墳では東海系の壺(つぼ)と甕(かめ)が埋葬儀礼に用いられていた。



長野市北平1号墳から出土した東海系のひさご壺と甕(県埋蔵文化財センター報告書より)

器の広域的な波及は、単なる経済的交流の活発化という次元ではなく、え切れない問題です。やはり、全国の統合を目指す畿内勢力の

動きを考えると、東海系土器が出土する遺跡は、天竜川流域はもとより善光寺平北部にまで及び、県内全域に分布します。弥生

動きを考えると、東海系土器が出土する遺跡は、天竜川流域はもとより善光寺平北部にまで及び、県内全域に分布します。弥生

動きを考えると、東海系土器が出土する遺跡は、天竜川流域はもとより善光寺平北部にまで及び、県内全域に分布します。弥生



を促し、それが信濃を含む東日本へ東海・北陸系土器が流入する要因となったのではないだろうか。

全国的な政治・社会体制に組み込まれてゆくのです。

信濃では、東海・北陸系土器の後を追うように畿内の土器群が本格的に流入し、地元

をもたらし人々の動きは、地域ごとに独自性を保っていた弥生社会を揺り動かし、古墳時代の幕を開ける大きな波となりました。

若林卓・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

74

長野市周辺の中世の遺跡からは珠洲(すず)Ⅱ石川県、常滑(とこなめ)・古瀬戸Ⅱ愛知県

Ⅱをはじめ、はるか遠く中国まで、各地で作られた焼き物が出土し、中世では物流が発達し

ていたことがうかがえます。特に中国産の陶磁器が長野県にも大量に入っていることは海運が大きな発展を遂げ、海沿いの港から陸路・河川などによって内陸まで物資が運ばれる流通網ができていたことが推測されます。

しかしながら、誰がどのように物流を担っていたのか、どのような手段で販売したのかは明らかになっていません。

例えば、焼き物は重くて割れやすいので販売のたびに大量に運べません。当時は今のようないくつかの単位で、

円・10000円など大きなお金の単位がなく、売り上げもすべて硬貨

流通・中世の焼き物

物流の実態つかめず

誰がどのように販売？

(銅銭)で持ち歩かなければならぬため、生産者が直接販売するのは困難とされます。

また、善光寺前の西町遺跡のように流通にかかわる町場的な可能性のある遺跡もありま

ところで、長野市周辺で焼き物の「すり鉢」の出土量や分布を調べると、鎌倉時代は珠洲焼を主として少量の東海地方の釉(うわぐすり)のない焼き物など遠隔地から運ばれたすり鉢が見られますが、室町時代には両者共に出土量が減り、一方で地元産の石製すり鉢が増加している様子が知られます。

これは、石鉢などの地域生産品の増加が広域流通品を駆逐したとも考えられますが、江戸時代には再び唐津などの焼き物のすり鉢が用いられるので、石鉢が焼き物のすり鉢よりも値段・機能的に勝つて普及したといえます。

その背景には、現代の市場原理と異なるモノの価値や交換のルール、流通を担う人々の在り方の変化などが関係すると思われるが、詳細はこれからの研究課題です。



千曲市屋代遺跡群から出土した中国産の青磁・白磁の碗(わん)や皿(県立歴史館所蔵)



屋代遺跡群出土の珠洲焼のすり鉢(県立歴史館所蔵)

こうしたことから地域ごとに物資を集積・貯蔵して販売する拠点を販売を担う人(商人)

明らかにできて、遺跡にもたらされた経緯は明らかにしにくいところではあります。

ですが、具体的な店や町がどんな姿なのか実態をつかみかねているところではあります。

市川隆之・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

75

日本では10世紀半ばに銭の発行が中止され、江戸時代に「寛永通宝(かんえいつうほう)」

が発行されるまでの約700年間、中国などから商人が輸入した銭や日本国内で私的に造

流通・埋納銭

られた「模鑄銭(もちゅうせん)」などの銭が流通しました。当時は朝廷や幕府が銭の発行に關与していなかったもので私的に銭を輸入したり、造るのは悪いことではなかったのです。ところで鎌倉時代から戦国時代には、大量の銭を木箱や甕(かめ)などに入れ、地中に埋めた「埋納銭(まいのうせん)」と呼ばれるものが多く見つかっています。全国では275例・350万枚の埋納銭が見つかり、実際に流通した銭の量はこの3〜5倍と推定されます。

地中に一時的埋める 戦乱の世 財産守る手だて

長野市内で1000枚(一貫文)以上の埋

納銭が見つかった例として松代町寺尾で114枚出土したものが唯一ですが、隣接する中野市では9カ所で埋納銭が発見され、市町



中野市西条・岩船遺跡群で89年に出土した埋納銭。木箱に収められ、皮のようなもので蓋をしている(左半部)＝中野市教育委員会提供



中野市西条・岩船遺跡群で95年に出土した銭。珠洲焼の甕に収められている(中野市教育委員会提供)

村単位の出土例としては全国最多です。その一例として中野市西条(にしじょう)・岩船(いわふね)遺跡群では、89年と95年の発掘

種類)の銭が、100枚すべてをひもで通した緒(さし)という状態で納められていました。そして、この木箱から25ヶ所離れた所で、

記録から分かりますが、西条・岩船遺跡群で見つかった2つの埋納銭でもっとも新しいのは、元(げん)二蒙古(ふたもこう)で1310

調査で見つかった埋納銭があります。89年に発見されたものは、縦33センチ・横43センチ・深さ21センチの木箱の中に3万4000枚(52

95年には8600枚(57種類)の銭が入った珠洲(すず)焼Ⅱ石川Ⅱの甕が発見されました。

年に鑄造された至大通宝(しだいつうほう)です。至大通宝が輸入され流通するまでの期間を考えると、埋められたのは14世紀の前半

ります。埋納銭は一纏(ひと)ごとに束ねた銭を木箱や甕に入れ、いつでも取り出せるように埋めていました。中世は戦乱が相次ぎましたが、戦乱から財産を守るため一時的に銭を備蓄し、何らかの理由で掘り出されなかったのが埋納銭だと考えられています。



世の中が平和になり、土蔵が造られるようになった江戸時代には、埋納銭は認められなくなります。

酒井健次 県立歴史館専門主事・学芸員

古代への招待状

埋もれていた遺産

76

今からおおよそ2800年前の弥生時代前期、朝鮮半島から九州北部に農耕技術が伝えられます。それまでの狩猟、

採集中心の生活から穀物生産中心の生活に移っていくことで、人口が急激に増えました。しかし、そのような

農耕社会は、気候の変動を直接受けやすい危うさがあり、急激に増える人口を安定して賄うだけの耕地がもつと

必要になります。それぞれの集団が、同じような状況で新たな耕地をほかの耕作しやすい限られた土地に求めますから、そこに他の集団との「土地争い」が生じることになります。

互いに自らの集団の命運がかかっている中で、その争いは一対一の小競り合いのレベルをはるかに超えた総力戦となり、集団同士の戦いに拡大していくこととなります。

戦い・弥生時代の農耕社会

文字がまだ使われていなかった時代の集団

設を備えた「環濠集落」がこの長野盆地でも確

農地求め集団で「戦」、溝や土塁で集落囲み守る

同士の戦いの痕跡として、環濠(かんこう)と呼ばれている防衛施

認されています。

写真①は長野市松代の松原遺跡で、およそ2400年前の弥生時代中期の集落遺跡です。円形あるいは四角



①松原遺跡の弥生時代中期の集落跡 (県立歴史館提供)

真左側)の大きな溝は長さ約70m、幅約3m、深さ約1・2mで、南側(写真上側)の大きな溝は長さ約65m、幅約6m、深さ約1・8



②二重に巡る水内坐一元神社遺跡の環濠跡 (市埋蔵文化財センター提供)

13区画に分けた環濠集落を造っています。

また、当時の戦いを象徴する遺物である磨製(石)鏃(せきぞく)「石剣(せつけん)」「石

す。この遺跡からは、敵から身を守る2種類の木製の盾(うち1点は縦109cm×横45cm(復原推定)×1cmのベンガラ装飾)や武器形木製品(槍や、もしくは鏃)が出土しています。

残された戦いの痕跡から、弥生時代の人々が日々の暮らしの中で「あらいそい」に組み入れられていった流れを考えることができます。

(白沢勝彦・県埋蔵文化財センター調査研究員)

くくぼんでいるのは住居跡で、幾重にも重なっていることから何回も建て替えられていて比較的長期間営まれていました。

この集落の東側(写真左側)の大きな溝は長さ約70m、幅約3m、深さ約1・2mで、南側(写真上側)の大きな溝は長さ約65m、幅約6m、深さ約1・8

「二重、三重の大きな溝や土塁、くいや柵で囲んだ集落」

◇石戈 木製の長い柄の先に、柄とほぼ直角になるようにあてがい、相手の首や腕を引っ掛けるように切る武器。本来は中国の銅製武器だが、日本に伝わり実用品から武器に転化していったと考えられている。磨製石鏃・石剣も同様で、実用品と武器の両方があったとされている。

古代への招待状

埋もれていた遺産

77

皆さんは「馬」とい
った何が頭に浮かび
ますか？
一時大ブームになっ

た競走馬「ハルウララ」
を思い浮かべる方が多
くいると思います。し
かし、中には「馬刺し」

という長野県ならではの
ものもあるかと思いま
す。この馬刺し、日本
では長野県のほかには、
九州の熊本県で多く親
しまれているそうです。

前置きが長くなつて
しまいました。5世
紀ころ、朝鮮半島では
強力な騎馬軍団を持つ
高句麗が南下し、その
戦乱を避けて人々が北
部九州に移り住み、同
時に馬にかかわるさま
ざまな技術や、道具で
ある馬具が伝えられた
という説があります。

戦い・馬具の登場

実用的な品多く出土

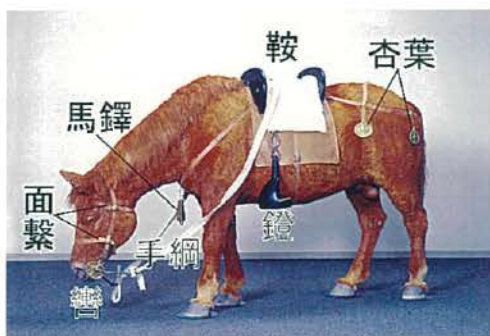
大室周辺では牧場営む

騎手が馬をコントロ
ールするものには、口

にはめる轡（くつわ）
や、轡を固定する面繫
（おもがし）、手綱など
があります。鞍（くら）
や鐙（あぶみ）などは

ングのような杏葉（ぎ
ようよう）があります。
さらに、馬の防具とし
ては額や顔面に着ける
馬面や、かぶどがあり

善光寺平に多く存在し
ます。特に伊那谷は、
馬具の副葬と馬の埋葬
が全国的に見て最も多
い地域の一つです。



古墳時代の飾り馬と馬具の
名称（県立歴史館提供）



長野市榎田遺跡から
出土した6世紀代の
木製の轡。黒漆が施
されている（県埋蔵
文化財センター報告
書より）

馬に乗るためのもので
す。装飾性のあるもの
には馬鈴（ばれい）や
馬鐙（ばた）など音
が出るものや、イヤリ

ます。
長野県は全国的に見
ても馬具の出土する古
墳が多い地域で、5世
紀後半では、伊那谷と

一方の善光寺平周辺
では、大室古墳群など
に見られる積石塚古墳
や合掌形石室の存在が
注目されます。伊那谷

の前方後円墳に副葬さ
れる装飾的な馬具に対
して、善光寺平周辺で
は実用的な馬具が出土
する古墳が多く、被葬
者と馬との関係が近い
ことが推定できます。
この地域には、その
後「大室牧（おおむろ
のまき）」が置かれる
ことから、これらの古
墳は牧場経営に従事す
る集団の墓域とも考え
られます。

6世紀後半以降にな
ると、松本平や佐久平
などでも馬具を副葬
する古墳が多くなりま
す。馬の生産が盛ん
に行われ、存在がより身
近になっていったこと
が分かります。
これらの馬は、高句
麗の騎馬戦を知ったこ
とで、戦いにも使われ
ました。科野の騎馬兵
は672年の壬申（じ
んしん）の乱に参戦し、
大海人皇子軍の勝利に
貢献しました。やがて、
律令時代の信濃国には
官営の牧が数多く造ら
れ、全国で最も多くの
馬を朝廷に献上するよ
うになります。

土屋哲樹・県埋蔵
文化財センター調
査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

78

つい最近まで中野ひな市などのひな祭りが行われたというのに、このころ豪華絢爛(けんらん)で勇ましい、端

午の節句の折り込みチラシをよく目にします。5月5日の「こどもの日」。端午の節句の飾り物といえば、歌に

もあるこののぼりがありませんが、武家では男子の成長を祈って、武者のぼりや鎧兜(よろいかぶと)を飾っていました。このうち、鎧兜は、身を守る道具の象徴です。

戦国武将などいわゆる「武者」が身に着けるイメーシの強い冑(かぶと)や甲(よろい)などの甲冑(かっちゅう)ですが、金属製のものが日本列島に入ってくるのは、今から1600年ほど前の古墳時代ごろとされています。

当時、朝鮮半島は高句麗(こうり)の南下によって緊張状態にあり、それは

倭(わ)と呼ばれた日本列島の有力者に影響

を与えました。中国の歴史書には、5世紀に

金属製の甲冑増える 新技術流入 次々と新型

戦い・古墳時代の武具

5人の倭王が軍事的称号を求めて、中国皇帝

に使者を送ったという記事が見られます。日本列島の各地でも、古墳の副葬品に、

に使者を送ったという記事が見られます。日本列島の各地でも、古墳の副葬品に、



それまであまり見られなかった武器や武具が納められるようになって、軍勢力を備えた武

人的な首長が増えたと考えられます。このような武具の代表的なものに胸を守る短甲(たんこう)があります。

5世紀ごろの副葬されました。1つ



千曲市の倉科2号墳から出土した三角板革綴(さんかくいたかわとじ)短甲の前||写真右||と後ろ||同左(千曲市教育委員会提供)

5世紀ごろの武人復元模型(県立歴史館提供)

前方後円墳、倉科將軍塚古墳(千曲市)や土口將軍塚古墳(長野市松代町)には、そろって三角板革綴(さんかくいたかわとじ)短甲

◇小札 長方形の小さな鉄板で、頂部となる一つの短辺が、半円形にな

5世紀の半ばになると鉄板を生産する技術が進歩し、鉄板同士をびょうで留める、より堅固な鉄留(びょうどめ)甲冑が作られるようになります。

5世紀後半に前方後円墳が集中して造られる伊那谷には、全国的にみても大変多くの甲冑を埋葬する古墳があります。伊那谷地域は馬や馬具を埋葬する古墳も多いことから、馬を生産する地域の首長に、畿内の王権が優先的に多くの甲冑を与えていたと考えられています。

その後、馬が戦いに使われるようになるにつれて、掛甲(けいかう)が作られるようになります。このように、古墳時代には新しくもたらされた技術によって、次々に新型の甲が作られていきます。やがて平安時代になると、この掛甲の技術を基にして騎馬戦を得意とする武者のために、日本独自の鎧兜が作られるようになっていきます。

土屋哲樹・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

79

インターネットの起源は、アメリカ国防総省が軍事目的で作ったコンピュータネットワーク

詐欺などの犯罪がある
とよく耳にします。

時代はずっとさかの
ぼって古墳時代の武器
の話です。3世紀か
ら4世紀ごろの古墳に
は、有名な三角縁神獸
鏡などの銅鏡や、碧玉
(へきぎょく)で作ら
れた玉や装身具など
を中心に副葬されて
います。5世紀にな
ると、このような祭
器は
少なくなり、武器・武
具が増加し、やがて
副葬品の主体とな
ります。

武器・武具は首長と

戦い・古墳時代の武器

ワークといわれていま
す。今や広く普及し、
生活を豊かにしていま
すが、便利さの半面、
また、鉄という非常に

しての軍勢力を示し、
また、鉄という非常に

の経済力や技術力を持
って、その地を治めた

副葬品の主体となる 武人的な首長像へ変化

重要な資源で作られた
製品を手に入れるだけ

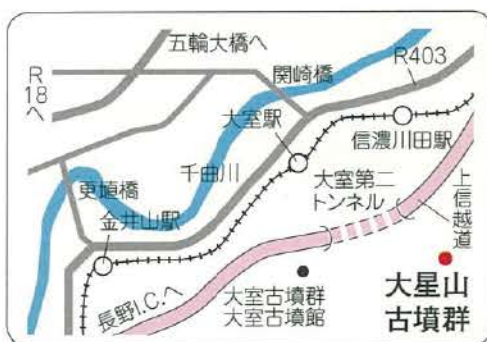
この象徴であるとい
えます。こうした変化
の背景には、首長の性
格が祭祀を執り行う司
祭的なものから、より

古墳に副葬されます。
それらから、当時の武
器の様相や移り変わ
りを知ることができま
す。

となつて副葬されまし
た。これが5世紀にな
ると、短剣に替わって
刃が真つすくの長い太
刀が増えます。



長野市大星山古墳群出土の
鉄鏡。上段・3号墳Ⅱ4世
紀後半Ⅱの柳葉形の鉄鏡。
下段・2号墳Ⅱ5世紀中ご
ろⅡの長頸鏡(県立歴史館
所蔵)



強い権力を持った武人
的なものに変化したこ
とがあると考えられて
います。

4世紀には、弥生時
代からの銅の鍔(やじ
り)と、それに形が似
た鉄の鍔が付いた弓
矢、やり、短剣が中心

銅鍔(どうぞく)は
姿を消し、鉄鍔(てつ
ぞく)は形が変化し、
朝鮮半島の技術的影響
から重厚な鉄鍔が多く

なります。その後、細
身で非常に長い形の長
頸鍔(ちようけいぞく)
が現れ、鉄鍔の主体に
なりました。多数の古
墳から出土することか
ら分かるように、鉄
鍔を付けた弓矢は多く
の兵士が装備した戦
いの主力武器であつた
と考えられます。

長頸鍔と鉄留(びょ
うごめ)技術が使われ
た甲冑(かっちゅう)は、
ほぼ同じ時期に出
現します。このことか
ら、防御力に優れた鉄
留甲冑の出現に対して
鉄板を貫通するように
鋭い形の長頸式の鍔が
開発され、使われるよ
うになったと考えられ
ます。

こうした新式の武器
や武具は、朝鮮半島南
部との接触によって得
られました。その後、細
身で非常に長い形の長
頸鍔(ちようけいぞく)
が現れ、鉄鍔の主体に
なりました。多数の古
墳から出土することか
ら分かるように、鉄
鍔を付けた弓矢は多く
の兵士が装備した戦
いの主力武器であつた
と考えられます。

鍛鉄技術も、冒頭で
紹介したインターネッ
トも、同じように光と
影を持っているように
思えます。現代でも古
代でも、技術や道具は
人間にとって「もう刃
の剣」なのかもしれま
せん。

土屋哲樹・県埋蔵
文化財センター調
査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

80

NHKの大河ドラマ「義経」は平安時代末期が舞台ですが、もし

弓矢が使われる場面が出たら、矢の先端に注目してみてください。今回は先端に装着した

鉄鏃(てつぞく)の話です。

古代の集落を調査すると、鉄鏃が出てくる

ことがあります。しかし集落内での出土状況を見ると、特定の区画や住居跡で発見されたり、時代により出土量

が変化するなど、どの住居でも所有できる品物ではなく、武器として生産・管理されていたことが判明してきま

した。この様相を松代町の松原遺跡で見たいと思います。

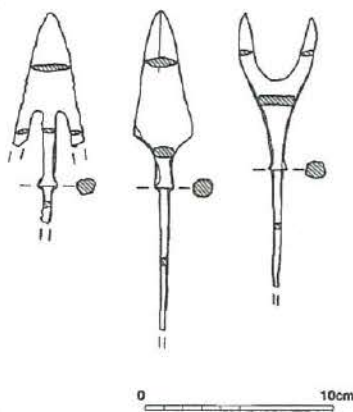
戦い・古代の武器

在地の有力者が台頭 武装化して地域を支配か

住居跡が調査され、鉄鏃は20点出土しています。

す。しかし、その中の約4分の3は平安時代の中でも11世紀以降の住居跡から出土し、特に集落の中でも大きい

多く見られ、集落内で鉄鏃の鍛造や調整などが行われていた可能性も指摘されています。もう一つ中信地域の



長野市松代町松原遺跡出土の古代鉄鏃の実測図(資料は長野県立歴史館蔵)

住居跡からまとまって出る傾向があると報告されています。

また、松原遺跡では住居内部に鍛冶炉(かじろ)が造られる例が

事例ですが、塩尻市の吉田川西遺跡では11世紀代に集落内に大きな区画溝が造られたことが分かりました。この溝の外側には一辺が3

15メートルほどの住居が点在する一方、溝の内側には一辺が10メートル前後の大型住居や、鍛冶工房、大型の掘立柱建物跡が発見されました。

出土遺物も当時の高級品である緑釉(りょくゆう)陶器が多く見られるほか、刀を飾る金具や多数の鉄鏃も出土し、遺構の構造や規模などと合わせて考えると、吉田川西遺跡には区画溝の外側の集落や近隣の集落をも支配する領主が住んでいたと考えられます。さらに、この領主は多くの鉄鏃を有する点から武装化して地域を支配したとも推測されています。

こういった鉄鏃の出

土傾向の背景には何があるのでしょうか。

まず奈良時代から平安時代の初めにかけては、鉄鏃は集落からあまり出土しません。これは律令制度の下で軍団が組織され、武器は官営の工房を中心に生産され管理されていたためと考えられています。

しかし平安時代に入ると鉄鏃の出土例も増加し、既述のように分布傾向にも特徴が見られます。このころは律令制度が次第に崩れ、国家による地域の統制がだんだんと緩んで地方政治も乱れ、在地の有力者が台頭する時期に当たります。こういった人たちは

私的に武器を所有し始め、勢力を拡大し、やがて一族を武装化させ武士団を結成してゆきました。ついには平将門の乱(935年)の

ように、直接国司や朝廷に反旗を翻す事態も生じます。以後、鉄鏃を装着した弓矢は中世に至るまで武器の一つとして使用されていきます。

こうしてみると、遺跡から出土する鉄鏃からも当時の政治・社会情勢が、わずかながら見えてくるのではないのでしょうか。

廣田和穂・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

81

旧石器時代の人々といつと、槍(やり)を片手にナウマンソウやオオツノシカに立ち

向かう姿を想像しますが、鋭利な刃部を持ち、大型動物にも立ち向かえることのできた狩猟

道具が石槍です。石槍

は旧石器時代の後半から縄文時代に移り変わるころ(およそ2万1万2000年前)に

盛んに使われ、その後弓矢の発達とともに次第に少なくなっていく石器です。

その槍先に使われた石器を槍先形尖頭器(せんとうき)といいます。

県内では、左右対称形で、木の葉のような見事なプロポーションを持った南箕輪村御子柴(みこしば)遺跡の槍先形尖頭器(国指定重要文化財)が特に有名ですが、ほかにも野尻湖、和田峠周辺など各地で

発見されています。

旧石器時代の遺跡が

鋭利な刃部 狩猟道具

黒曜石原産地近くに遺跡

戦い・石槍の生産

少ない長野市周辺では、塩崎城見山砦遺跡の中世砦施設が築かれた尾根上から、安山岩や頁岩(けつがん)製の尖頭器8点が出土し

として入手したものと考えられます。

石器製作遺跡は黒曜石や黒色安山岩などの石器の材料が豊富で、かつ容易に入手できる



塩崎城見山砦遺跡出土の槍先形尖頭器(県立歴史館所蔵)

たことは注目されます。しかし、塩崎城見山砦遺跡は石器製作遺跡ではないことから、これらの石槍は製品として、あるいは準製品

原産地の近くにあります。群馬県境の上信越自動車道八風山トンネル長野県側入り口に当たる佐久市下茂内(しももうち)遺跡は石



石槍を生産した下茂内遺跡の景観想像図(「上信越自動車道発掘調査報告書1下茂内遺跡」より)

す。石槍の製作の際に出た10万点以上のおびただしい量の石くずや石槍の欠損品・未完成品がまとまって発見され

槍の製作遺跡の一つです。谷筋の小河川で採集した八風山で産出する黒色安山岩の転石を材料に、石槍を生産したと考えられています。

るにもかかわらず、完成品がないということからは、その場で多くの石槍を作り、持ち出したことを物語っています。

また、黒曜石の原産地では「縄文時代の黒曜石鉱山」で知られる長門町星葉(ほしくそ)峠ふもとの鷹(たか)山第1遺跡などがあります。

石槍の製作には、石器の原石を選ぶ↓石器の素材となる石核や剥(は)く↓片を作り出す↓形を整える、という石器製作技術に熟練していなければなりません。特に石槍は、石の厚さを減らすために薄皮をむくような割り方が必要なのです。

軟らかい石・シカの角・木のハンマーを使い分けたり、たたく面(打面)を作り出して有効に打撃の力が伝わるように丹念に形を整えながら石槍作りが行われたわけです。

完成品を目指してコツコツカンカンという音が響く中、一打撃ずつ薄く石をむくように打ち欠き、ひっくり返しては打って厚みを減らす工程を繰り返し、裏表面面を満遍なく加工することで木の葉のような先のがった石槍が完成していったのです。

小林秀行・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

82

武士が独自の権力を形成し、社会を實力で動かした中世という時代の中で、特に武田信

玄と上杉謙信が善光寺平で衝突した戦国時代は、日本列島各地で争乱が最も激化した時代でした。そこで戦国大

名や在地の国人(こくじん)は、戦国乱世を生き抜くために「城」という軍事施設を造り、身の安全を図りま

した。その中には自然の要害を防御として最大限利用して築かれた山城があり、長野市域では現在、約80カ所確認されています。

長野市篠ノ井の塩崎城見山砦(とりで)遺跡は、県内では珍しい全面発掘された山城跡です。調査では、山頂や斜面から兵士などがこもる平坦地の曲輪(くるわ)や塹壕(さへん)のような堀切、土を盛った土塁などの

戦い・中世の山城

自然の要害を防御に 土木工事大半の「土の城」

防御施設と、山頂の主郭(近世城郭の本丸に

当たる)から掘立柱建物跡と門跡、戦時に備えて保有したと思われる礫(つぶて)が見つかりました。

棟存在する程度です。天正7(1579)年、織田信長の築いた安土城が完成します。この城は天守(主)閣・

(石垣)と、建物を安定させるためにふかれた屋根瓦(金ばく瓦)が城郭では初めて使われました。



塩崎城見山砦の全景

(県立歴史館提供)



松代城跡 本丸戌亥隅櫓台の石垣。野面(のづら)積みで積まれた石垣で、城内で最も古い

中世の山城は山全体を切り盛りする土木工事(普請)で大半が完成する「土の城」で、建物は簡易なものが数

御殿・櫓(やぐら)などの恒久的建物がそびえる居住機能を備えた城です。これらの建物を支えるための土台

従来とは全く異なる「石の城」の出現は、日本城郭史の中で一大画期といわれます。豊臣秀吉は信長の城

郭に対する思想を受け継ぎ、大坂城を築城します。天正18(1590)年、秀吉の天下統一最後の信濃には、石川氏(松本城)、仙石氏(小諸城)、日根野氏(高島城)などの秀吉予飼いの大名が入封し、今まで土造りだった城が「石の城」に変わります。

度を増すために石の長辺と短辺とを互い違いに向けて積み上げた、算木積みが見られます。

今から約640年前、南北朝の動乱期に出現した山城は、戦国時代までに日本列島に約4万カ所以上造られます。織田・豊臣政権は各地に「石の城」を誕生させました。信濃では天正末年―慶長初年に近世城郭が成立します。本来の性格を変えて「権威の象徴」として築城された近世城郭は、徳川家康が築いた江戸城で完成することになります。

最近復元・整備が完成した松代(海津)城跡の戌亥(いぬい)隅櫓台は、このころ築かれた石垣です。石垣の隅の部分には、隅角部(くまかくぶ)の強化

河西克造・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

83

弥生時代は、日本列島に住む人々が本格的に米作りを開始した時代です。穀物栽培の根

ます。

栽培穀物の多くは、

もともと日本に自生し

ていたものではなく、

大陸から渡来した植物

です。殊にイネは、今

から3000年前の縄

文時代後期となる青森

県八戸市風張遺跡でそ

の存在が確認されてい

るものの、本格的な水

田耕作の証拠が認めら

れるようになるのは2

500年前の縄文時代

晩期終末(弥生時代早

期)の福岡県板付遺跡

の水田跡からです。

米作りの本格的な始

まりは、土地の開墾な

ど自然の改変を促進

し、水の管理や分配な

幹をイネやムギ、ある

いはヒエなどの雑穀類

が担い、次第に人々は

米作りに専念してい

生産・稲作の始まり

社会の仕組みを形成

農具など弥生文化も開花

と新しい社会の仕組み

を形成していきまし

た。木製農具の発達

や大陸系磨製石器の渡

きの器)の出現、赤い

土器、鉄や銅の釧(く

しろ)腕輪)に碧玉製

の古い水田跡は発見さ



あぜで区画された小さな田んぼ(川田条里遺跡Ⅱ県立歴史館提供)



稲穂を摘み取る石製の道具(磨製石包丁Ⅱ県立歴史館所蔵)

勾玉(まがたま)、布の出

現など、い

れも弥生文

化のため

のです。

長野県で

来、金属製武器の登場、

甗(こしき)土製のせ

いろ)や高坏(たか

つき)食物を盛る足付

の茅野市御社宮遺跡

出土の土器表面に残る

れていませんが、弥生

中期の中ごろ、今から

2100年ほど前のか

んがい用水施設が、千

曲市更埴条里遺跡で見

つかっています。

この施設からは、イ

ネのプラントオパール

と三日月形をした立派

な穂摘み具(磨製石包

丁)が、つばと一

出土しています。

弥生中期の終わりが

ら後期、2000年ほど

前になると、長野市川

田条里遺跡や石川条里

遺跡に代表される立派

な水田が出現します。

まさに紀元を前後して、

長野でも本格的な米作

り文化が定着してい

たと考えられます。

町田勝則・県埋蔵文化財センター調査研究員

◇弥生時代早期 弥生式土器である「夜(ゆ)白式土器」が使われ、稲作農耕が行われた時期を弥生前期と呼ぶ。それ以前の縄文時代の流儀で作られた板付式土器(刻目凸帯文Ⅱきさめとつたいもん)が使われた時期は、縄文時代晩期と定義されてきたが、北部九州で弥生時代の特徴である水田稲作の証拠が発見されたことにより、その時期を「弥生早期」と仮称する。

◇プラントオパール イネ科植物は、土中から吸収したケイ酸分を茎や葉に多量に沈着させて組織全体を形成・硬化させる。この細胞ケイ酸体をプラントオパールと呼び、植物が枯れても土の中に残る。イネのプラントオパールは特有の形(イチヨウ形)を持っているので、土の中からそれが発見できれば、イネが生えていた証拠となる。

古代への招待状

埋もれていた遺産

84

太平洋戦争中の短期間と、戦後の47(昭和22)年に発掘調査された静岡市の登呂遺跡で

は、矢板やくいで補強した畦畔(けいはん)に区画された、水田1枚の平均が1000平方メートルを超える弥生時代の水田跡が発見され

ました。その後、西日本各地で発掘調査された水田跡では明確な畦畔は見つからなかったこともあり、ほぼ唯一の例である登呂遺跡の広々とした弥生時代の水田のイメージが、長く定着していました。

このようなイメージを一掃したのが、73(昭和48)年から始まった上越新幹線や関越自動車道の建設に伴う群馬県内の水田遺跡の発掘調査です。

高崎市の日高遺跡では浅間山の火山灰によって埋没した水田1枚の面積が41346平方メートルとつきがあり

層水田と、1枚が22144平方メートル、平均約

小区画から条里型へ 時代経るごと整った形に

生産・古代の水田

ました。平均約10080平方メートルの弥生時代の平方メートルの平安時代の上

下層水田が発見され、

その後各地で見つかる小区画水田の先駆けとなりました。

長野県でも上信越自



川田条里遺跡A3地区第3水田(県立歴史館提供)

川田条里遺跡、春山B遺跡、浅川扇状地遺跡群、小布施町の飯田古遺跡内の一部の地区のみに見られた不整形の



半折型に区画された川田条里遺跡C地区第4水田の実測図

代中期か水田が、弥生時代後期から近世までは遺跡の調査区全体での各時代に拡がりました。水田代の水田の形は不規則ながら、大畦畔と小畦畔に区切られた1012平方メートルの小区画水田となります。

このうち、長野市若穂川田の川田条里遺跡の洪水砂で埋まった水田跡は、ヨシの繁茂する湿地を開墾して造

分した半折型の段に分ける。

期、奈良時代と時代を経るに従って、不規則だった大小の区画は整った形になりました。

長方形の定形的な大区画の中に整然と小区画水田が並んだり、大畦畔の中央に水路、脇にかんがい用の区画が設けられるなどの変遷が見られます。

特に奈良時代後半1平安時代初期ころの水田跡は、それ以前の水田と大きく異なっています。1町(約109畝)四方を1坪とする大区画と、それを東西に5分割、南北に2分割する半折(はおり)型を基本とした小区画の「条里型水田」が現

れました。このように水田の区画が変遷するのは、次のような理由によるのでしょうか。

傾斜地で田を平らにして同じ深さに水を張るためには、耕作面積が減っても1区画が小さい方が動かす土量が小さくて済むこと。田の所有権の明確化や負担すべき租税の算出には、面積が均一な方形区画の方が適していること。田に水を引いたり落としたりする水利の関係などが考えられます。

上田真・県埋蔵文化財センター調査研究員

◆条里制 古代に始まる耕地の地割法。6町四方の里を1町四方の36の坪に分け、1坪を東西に10等分した長地型や、南北に2等分、東西に5等

古代への招待状

埋もれていた遺産

85

長野市豊野町石地区の粟野(あわの)平には粟野神社が鎮座し、その境内と周辺にかつ

て神護寺と呼ばれる律宗の寺院が存在していたといわれています。66(昭和41)年、上

水内郡誌」の編さんに伴い、豊野地区の史跡調査が行われました。そのとき、この粟野神社も調査され、35個から成る大きな建物の礎石が発見されました。それぞれの礎石は直径約60―75センチ、厚さ約30―40センチで、上面は平らに加工されています。5間(約9メートル)四方の建物が存在していたことが判明し、神護寺の建物跡ではないかと推測されたのです。

神護寺は江戸時代の宝永7(1710)年

まで確実にこの地に存在していたことが確認され、これらの礎石群

はこの時点のものであるといえます。しかし、

豊野は太田荘の中心

神護寺と密接な石村堰

生産・中世の開発

その由来は少なくとも鎌倉時代までさかのぼることが文献の上で分かっています。

豊野町の辺りは、か



神護寺の礎石群 (豊野町石)

つて11世紀ころに成立した信濃国太田荘(おたのしょう)という、広大な摂関家領の中心地となっていました。13世紀、鎌倉時代に

入ると鎌倉の有力御家人島津氏や金沢称名寺が、それぞれ地頭に任命され、神代(かしろ)郷、石村南郷、大倉郷、金沢称名寺は武蔵国六浦荘(むつらのしょう)に現在の横浜市にあり、鎌倉幕府の実力者金沢(かねざわ)北



コンクリートで固められた現在の石村堰 (同)

石村郷など太田荘の中の村々を支配するようになったのです。石村郷と呼ばれた現在の石地区の領主は金沢称名寺でした。

僧侶

◆撰閥家 撰政・閥白を輩出した藤原家 ◆長老 律宗寺院を代表する

の石村郷支配の中心機関にもなっており、現地の経営に当たったのが、神護寺長老に任命された尊如房(そんによぼう)という律宗の僧侶でした。

さて、現在の石地区を潤す基幹用水になっているのが、鳥居川を水源とし、浅野・豊野地区を通して石地区に至る石村堰(せぎ)です。石村堰の成立はどこまでさかのぼるのでしょうか。

91(平成3)年から始まった豊野町誌編さん事業の中で荘園遺構調査が行われました。調査の結果、太田荘の

条氏が保護した律宗の有力寺院です。石村郷の神護寺は金沢称名寺

入沢昌基・県埋蔵文化財センター調査研究員

律宗の僧侶たちは土木工事を組織する方法を知っていたのでしょうか。用水路を開けるような開発技術と寺院や神社の宗教活動は、密接に結び付いていたのです。

古代への招待状

埋もれていた遺産

86

戦後、家庭から姿を消した道具に石の粉挽き(こひ)き臼がありま

す。戦前からの世代に下臼との間ですりつぶされ、臼の表面に刻まれた溝を通じて粉となり、周りに落ちてくる仕掛けです。

こうだった回転式の粉挽き臼は、今から2000年以上前から西アジアやヨーロッパで使われ始め、日本にも1500年ほど前、聖徳太子のころ伝わりま

した。ただ日本は米文化だったため、庶民に普及するにはそれから1000年近くかかりました。以前は江戸時代中期

とって、団子やうどんなどは粉挽き臼からできる庶民の食べ物で、多くの一般家庭にありました。

生産 石工たちの活躍

中世に普及した石臼 大事にされた特殊技術

になって広まったといわれていたが、最近20年ほどの発掘調査

で、中世の遺跡から数多くの石の粉挽き臼が出土し、その時代は戦国時代ごろにさかのぼると考えられています。

上信越道建設の際に



ひき手を付け替えた跡のある前山田遺跡出土の石臼(県立歴史館所蔵)

脇遺跡では集落が中世末で途切れたのに対し、前山田遺跡は近世にも墓石や石仏、石鉢、石垣製作など豊富でし

た。江戸時代には大工



粉挽き臼の仕組み

が使われていたことは周知の事実です。

石臼の仕事は、ほかにも墓石や石仏、石鉢、石垣製作など豊富でし

た。江戸時代には大工

が使われていたことは周知の事実です。

石臼の仕事は、ほかにも墓石や石仏、石鉢、石垣製作など豊富でし

た。江戸時代には大工

行っていたと考えられています。

前山田遺跡では、最初の刻み目がすり減ったため違う方向へ刻み直したり、挽き手を付ける穴を開け直すなど、修理の跡がある石臼が出土しました。修理されている石臼が多

く見られることから、かなり頻繁に職人たちは村々を回っていたと思われま

す。また、目や穴の一切ない未製品も見つかっています。1点しかないことから、ここで集中的に作られたという

より、石工が販売する場所へ持ち込んで仕上げる手順だった可能性が高いと考えられます。

古来、食べ物を生み

出す石の粉挽き臼は大切にされ、結婚式で床の間に飾る風習もあるほどです。大事な物だからこそ修理して使い続け、そのための特殊技術を持つ石工たちが大事にされ活躍していた様子が、修理された石臼からうかがえます。

石臼を捨てる際には2-3つに割って魂を抜き、ただの石としてから捨てたといわれています。一つ一つの道具にそこまでの思い入れがあった昔の生活に、使い捨ての時代といわれる今こそ、思いをはせてみてはどうでしょうか。

中野亮一・県埋蔵文化財センター調査研究員

中野亮一・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

87

現代に暮らすわたしたちは「水田」というと規則的に植えられた稲が田んぼ一面に広がる風景を想像します。

しかし、全国各地で行われている発掘調査の成果によると、弥生時代や古墳時代の水田稲作は今の水田景観とかなり違っていたこ

とが分かっています。このことは、歴史学者の故網野善彦氏が「食生活の中で、米は中世までは大きな位置を占めていなかった」と指摘したことと密接な関係があると思われる。

稲には現在約20万の品種が知られています。大きくインディカとジャポニカという2種類に分けられます。ジャポニカ種には、縄文時代に渡来したと思われる熱帯ジャポニカ(焼き畑の稲作)と、弥生時代ごろに渡来したと思われる温帯ジャポニカ(水田稲作)の2つがあります。

従来、稲の品種は大きさや形などから判別

していましたが、最近では親子関係が分かることから犯罪捜査など

技術向上で水田一変 姿消した熱帯ジャポニカ

でよく使われる、DNA分析(遺伝子レベル)

で品種や稲の起源・渡来経路について研究されています。

総合地球環境学研究所の佐藤洋一郎氏(当時静岡大学)は、炭化米などのDNA分析に



川田条里遺跡の近世水田から見つかった稲株列。写真左側にあぜがあり、筒状の高まりは稲株が倒れないように残したもの(県立歴史館提供)

より、弥生時代の遺跡に熱帯ジャポニカがかなりの量存在すること

本列島の水田稲作を見直す大きな切っ掛けとなりました。この問題は、実は長野県にも関係しているのです。

長野市若穂川田の川田条里遺跡は、千曲川



稲株の断面。根はやや斜めに植えられ、根周辺は酸化鉄により赤色化している(同)

の自然堤防背後の後背湿地に広がっています。この水田遺跡は上

で連綿と水田が営ま

は出土遺物から、松代

では、あぜに沿って並ぶ無数の稲株が見つかり、株の配置から数人があぜ沿いに並び、後ずさりして植えた田植えの方法が明らかになりました。

川田条里遺跡で確認された約2500個の稲株の中から6点をDNA分析したところ、面白い結果が出ました。第1は1つの株から熱帯ジャポニカが見つかったこと、第2はその株で熱帯ジャポニカと温帯ジャポニカが混在していたことです。2種のジャポニカは区別されることなく、同じ水田の中に混ぜて栽培されていたことを示すものでした。

享和元(1801)年から嘉永4(1851)年にかけて、上田藩領中水飽村に残された坪刈りの記録を見ると、1830年を境に1坪当たりの株数が減少しています。これは品種改良や多くの肥料の投入により、少ない株数を多く分蘖(ぶんけつ)することで収穫量アップが可能となったことを示すもののようにです(「長野市誌 歴史編近世1」)。

縄文的な熱帯ジャポニカは、品種改良によって水田から姿を消したと思われます。稲作の技術と生産性が向上し、水田の姿が一変した近世(特に後期)は、日本の水田稲作史上で大きな画期といえます。

河西克造 県埋蔵文化財センター調査研究員

生産・近世の稲作

古代への招待状

埋もれていた遺産

88

旧石器時代と縄文時代の人々は、動物の狩猟と植物の採集によって食を得てい

ました。
縄文時代は現在とほぼ同じ気候で、豊かな森林から得られる植物資源が食の主

体となっていたと考えられています。一方、旧石器時代は氷河期のため寒く、今より平均気温で7〜8度くらい低かったと考えられており、生えている樹木や草木は現代や縄文時代とは大きく異なりま

す。そのため、得られる食料も違ったと思われま

す。特に、マンモスなどの絶滅した大形

食・旧石器時代

大型動物 狩猟対象か 野尻湖周辺 豊かな資源

動物が目立ちます。日本にもナウマンゾウやオオツノシカ



復元されたナウマンゾウ
(県立歴史館所蔵)



遺跡から出土した磨製石斧(同)

がいたことは知られていて、これらの大型動物が狩猟の対象

が存在します。また、

と狩猟とが直接結び付く証拠はありません。

遺跡からは、動物の解体に用いられた道具と考えられる磨製(ませい)の石斧(いしおの)が60点も見つかっています。旧石器時代の磨製の石斧は、日本全国で650点くらい発見されていますが、そのうち半数近くが野尻湖の近くで見つけられており、日本で最も多いのが日向林B遺跡です。

狩猟で捕ったナウマンゾウなどの大型動物を中心に囲んで営まれた生活の跡と予想できます。

野尻湖の湖底からナウマンゾウの化石が出土することから、湖底には有名な食料資源があったからではないかと考えられます。日本でのナウマンゾウの絶滅年代は約2万年前なので、今から3万年前後くらい前に野尻湖周辺でナウマンゾウの狩猟が行われていた可能性は十分にあります。

成獣のナウマンゾウは体重約4ト、肉として食べられるのは2トくらいと思われま

日向林B遺跡からは、約4万年前ごろで、周りの遺跡の年代は古くても3

日向林B遺跡には環状ブロック群と呼ばれる、人々が直径25メートルの輪になって活動した痕跡が残されています。磨製の石斧の数が多

となっていた可能性が考えられます。

万数千年前というところから、現時点ではナウマンゾウの化石

野尻湖から南に約1キロ離れた日向林(ひなたばやし)B

日向林B遺跡には環状ブロック群と呼ばれる、人々が直径25メートルの輪になって活動した痕跡が残されています。磨製の石斧の数が多

谷和隆・県立歴史館専門主事

古代への招待状

埋もれていた遺産

89

「原始人」とひとくくりにされる縄文人は、弓矢を持って山野を駆けずり回り、獣を狩って血の滴る肉をほお張る、

縄文人たちは、縄文時代の全期間を通じて狩猟員である石鏃(ぞく)や骨鏃を大量に保有し、イノシシ、ニホンシカ、ニホンザルなどを狩って日々の糧を得ていたようです。

平地の縄文人にしても、例えば前期の松原遺跡(長野市)や晩期の佐野遺跡(山ノ内町)のように、石鏃や解体用の刃器に対して採取具の打製石斧(おの)や粉砕具の磨石・石血類が少なく、狩猟生活に比重が置かれ

というイメージをもたれていた時代がありました。

湯倉洞窟遺跡(高山村)のように、山岳地帯に暮らした

曲市)出土のサケ、コイ、ドジョウや大清水遺跡(長野市)

植物採集具が増える 「遊動」から「定住」へ進化

貝類も捕獲の対象としていたことは疑いないことでしょう。ただ、縄文時代の

貝類も捕獲の対象としていたことは疑いないことでしょう。ただ、縄文時代の

解体具と採取具+粉砕具との比率が逆転し、植物質食料の獲得と調理にかかわる道具が多くなる傾向にあります。

旭町遺跡(長野市)では7本の打製石斧が後生大事に土器に埋納してありまし



栗林遺跡復元想像図。採集した木の実を干し、あく抜きのために水さらしする風景(県立歴史館提供)

た。これなどは植物採集具に対する

遺跡数が最も多くなる中期から後期前半にかけては、屋代遺跡や筏遺跡(小川村)のように、狩猟具+十数年前、北村遺

跡(東筑摩郡明科町)から出土した縄文人の食生活を調べるため、人骨を構成するコラーゲンの分析を行いました。その結果、北村縄文人たちが日常的に摂取した食料の7割は、木の実を主体とする植物質食料であることが判明しています。

縄文人とはそもそも列島の中で最初に土器を用いた人々です。土器には、貯蔵や運搬、供献(きょうけん)といった用途のほかに、食材の調理という重要な役割があります。旧石器時代までは食材を焼く、干す、いぶす程度にとどまっていた調理法は、土器の発明によって煮る、

蒸す、漬けるといったことまで可能になりました。殊に「煮る」という調理によって、食材を複合させて新たな味覚や栄養価を得ることができたとともに、食材の幅を広げることにも役立ちました。こうして先史時代の列島の

人たちは、食材を求めて歩く遊動生活から、身近な食材を利用し管理する定住生活へと進化を遂げたのです。後期の栗林遺跡(中野市)からは、定住集落に面した斜面や低湿地から100力所もの貯蔵穴が発見され、中からクルミやトチノミが出てきました。さらに、

集落内を流れる小河川によって開析された谷あいのゆる水地からは、クリの丸太と板を組み合わせた「水さらし場状遺構」が見つかりました。ムラの周りには落葉広葉樹の森から食材を得て、虫害を防ぐために湿地に設けた穴に保存したり、必要に応じて製粉し、あるいは粒のまま水さらし場であくを抜いて団子にし、他の食材とともに土器の中でグツグツと煮る…。タゲの香り立つ「栗林ムラ」の情景が浮かんできませんか。

平林彰・県埋蔵文化財センター調査第一課長

食・縄文人

古代への招待状

埋もれていた遺産

90

石皿は食料を盛り付けるための石で作られた「お皿」では

います。食料となる品々を置いて、磨石ですりつぶすとか、粉にすることに使われたと考えられています。

セットとなる磨石は、主に手ごろな大きさの川原石が利用されました。石皿と磨石は弓と矢の関係に似ていて、両者を組み合わせて使うことで効力を発揮します。

縄文時代の主な生業は、狩猟と漁労と植物採取です。それ

ありません。通常、平らな石の中央が浅くくぼんだ形をして

食・石皿と磨石

すりつぶして粉状に 木の実や根などを加工

では、石皿と磨石ですりつぶされたのはどのような物でしょう。また、明科



中野市栗林遺跡59号貯蔵穴。脚付き石皿が裏返しで出土した縄文時代後期の貯蔵穴で、底にクルミの殻が残っていた(県立歴史館提供)

うか。狩りで捕った鳥獣の肉や、捕れた魚などを細かくしてハン

町北村遺跡では採取した食料の7割が木の実を主体とする植物質の食料であるこ

とが報告されています。すから、採取した木の実のほかにはキノコや山菜、そしてクズやカタクリなどの木の根が加工されたのでしょうか。

縄文時代に石皿や磨石が普及するのは、前期のことです。

このころは先土器時代と比べて気候の温暖化が進み、現在とほぼ同じような森林相になりました。このような森の樹木から得られる木の実をつぶし、または粉にして、団子状あるいはパン状にして食べ

たのでしょう。

現在、縄文時代の食用植物は60種ほど確認されています。木の実の堅い殻が土中で残りやすいため、クルミや栗、トチなどが遺跡から出土しています。

ところで、木の実を食べるには渋み(アクリン)がない栗やクルミなどのほかに、アクリンを抜く作業が必要な種類があります。民俗事例からは、東日本の落葉広葉樹林帯に多いクヌギ類やナラ類のドン

粉または加熱して、さらに水にさらしてアクリンを抜きます。トチはこれに灰を加えてアクリンを抜く作業が加わり、より複雑な工程になります。

また、アクリン抜きには口でできず、外側の厚い皮を腐らせて取り除くため、新しいうちには脂肪分が強いので、一定の保存期間が必要だったようです。

岡村秀雄・県立歴史館専門主事
兼学芸員

古代への招待状

埋もれていた遺産

91

縄文時代の遺跡を調査すると、赤っぽく変色した石がよく見つかります。さらに、それらの石が数十個、数百個まとまって見つかることも

あります。こうした石がまとまった状態で発見されるものを「集石遺構」とか「焼礫(れき)集積遺構」などと呼んでいます。

集石遺構には、平面的に石が集積しているものや、地面を掘りくぼめた穴の中に石が充填しているもの(「集石土坑」「集石炉」等と呼ぶ)などがあります。

人間は太古の昔から生活のいろいろな場面でも石を利用してきました。といって、すぐに思い浮かぶのは、道具や装飾品の素材であったり、建築部材であったり、モニュメントなどでしょう。これらは、石の持つ硬さや重さ、割れ口の鋭さや長い年月を経ても形を変えない、腐らな

いといった特徴のほか、石の色や希少性などに着目し、利用したものといえるでしょう。

食・集石遺構

を取るために用いられたカイロの「温石(おんじやく)」や冬の風物詩「石焼き芋」、新潟は粟島名

熱伝導を利用の証し 「石蒸し調理施設」が優勢

このほか、石には「熱を保持する」「伝導する」という特性があります。中世のころから医療用や暖物として名高い「わっぱ汁」などが代表的な例です。

集石遺構も被熱した石が集められた遺構で、縄文人が熱の伝導を利用して何らかの行為をした証しとなるものといえる



集石遺跡の単位(縄文時代前期)。個々の石群がいくつか集まってグループを作ったもの

でしょう。今のところ集石遺構に対しては「お墓」説、「蒸し風呂」説、「石蒸し調理施設」説、「熏製調理施設」説などがあり、研究者の間では「石蒸し調理施設」が優勢を占めて

いるようです。

ここでは、集石遺構を調理に関連する遺構として考え、現在の調理法と比較してみましよう。「わっぱ汁」は「わっぱ(おけ)の中に海水と食材を入れ、そこ



阿久遺跡103号集石断面。縦横145×115センチ、深さ55センチの穴に237個の礫を詰め込み、壁の一部が焼けている

火に掛けることができないう容器でも、中身を沸騰させることができる方法があるということ、こうした調理方法または焼けた石の利用方法は縄文人も知っていただろうと考えられま

す。石焼き芋は、食材に直接火を当てずに、熱した石の熱で食材を焼く(「蒸し焼き」調理方法です。この方法は、遠くミクロネシア地域などで現在も実践されて

いる調理方法と同様で、こちらは穴を掘ってその中にたくさん熱した石と食材を入れ、土をかぶせて蒸し焼きにするという調理方法です。穴の中に焼けた石が充填した状態で発見

される「集石炉」によく似ています。塩尻市の竜神平遺跡では、複数の焚き火跡と集石炉が見つかっています。たき火で石を熱した後、食材とともに焼けた石を穴に投入していたことを物語る事例でしょう。

こうした縄文時代の集石遺構は、今からおよそ1万年前(4000年前(縄文早期-中期末葉)の遺跡から発見されて

おり、これは竪穴住居の中に使用頻度の高いしつかりとした炉を作らない時期から、石囲い炉など構造的にもしつかりとした炉を設ける時期まで使われていたことを示しています。

ムラ(集落)単位で同時に食事をする際の調理施設として、また祭りや祝い事など「ハレ」の儀式的の一環として集石遺構が使用されていたのではないかと考えられます。とはいえ、集石遺構から食材が出土した事例はなく、考古学的に言えば、まだまだ推定の域を脱していないのが現実なのです。

上田典男・県教育委員会文化財・生涯学習課教育支援主事

古代への招待状

埋もれていた遺産

92

が始まりました。大陸から伝わった稲作が定着し始め、それまでの狩猟採集生活から、栽培によって食物を

長野県内では、弥生時代中期(1世紀)に各地に水田が造られ、おコメを食べる生活

得られるという、大きな画期が訪れた時代といわれています。しかし、おコメ以外には狩猟採集時代とそれほど変わらないものが食べられていたとも考えられています。古墳時代を経て飛鳥・奈良時代になると、都の朝廷を中心とした政治が行われ、全国から多くの税(物品)が徴収されるようになります。長野県(信濃国)からは鹿、イノシシ、キジなどの動物やサケ(加工品)、植物ではクルミやナツメなどさまざま

食・古代人の食生活

コメ以外は変化なし

雑穀やフナ、タニシなど

まな山の幸が送られていることが当時の木簡や史料から分か

べていたのでしょうか？ 遺跡の発掘調査によって、当時の食べ物に腐らずに出土するといふのは、



奈良時代の庶民の食事 (©(株)新潮社「芸術新潮」=奈良文化財研究所、復元・奥村彪生、撮影・松藤庄平)

つてきており、都での食生活はある程度復元されています。では、一般に人々はこのような物を食

野県では貝塚の調査を期待することばできません。そのため内陸部の遺跡の調査では、竪穴

まずありません。遺跡から出土する食生活の痕跡を示す代表的なものに貝塚がありますが、山国の長

住居内の施設であるカマドやイロリの土と、火事で焼けた家の土を採取し、中身を調べることが有効な手段といえます。火事に遭った家や、カマドやイロリの土には、蓄えていた食物と調理中に吹きこぼれた植物の種、動物や魚貝類の骨と殻が炭化して残っていることが多いからです。その一例として、古墳時代後期から平安時代(6-11世紀)の集落遺跡である、小諸市と佐久市にまたがる中原・芝宮遺跡群を見てみましょう。調査された竪穴住居跡385軒中、71軒の

カマドなどから採取した土を洗浄し分析したところ、さまざまな炭化した動植物が確認されています。植物では、コメをはじめとして雑穀の麦やヒエ、アワ、豆類などが、動物ではフナをはじめとした魚類やタニシなどの貝類、小型の力エル類や鳥類が確認されています。これら以外に特異なものとして、マイワシと考えられる骨や海産種の貝類が出土しています。海産物の出土は海辺の地域との交流を裏付ける資料として興味深いものです。また、ほかの遺跡の

分析では、弥生から平安時代では意外とイネの割合が高く、平安末期以降から中世には雑穀、特に麦の割合が高くなる傾向を示しているとの報告もあります。近年、集落遺跡で調査される竪穴住居跡の土の分析から、さまざまなことが確認できつつあります。今後、この土の洗浄分析からわれわれ先祖の食生活の一端を垣間見ることができるようになる日は近いと思います。

藤原直人・県埋蔵文化財センタ―調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

93

長野市周辺の中近世遺跡でよく見る遺物に、すり鉢や石臼があります。すり鉢は

平安時代終わりごろから、石臼は室町時代以後見られ、これらの道具の出土から中世には穀物を粉にした

り、抹茶やみそ、豆腐作りなど、すりつぶす調理法が普及したことが分かります。

このすり鉢や石臼は中国との交易・交流が活発になる中で日本に伝えられましたが、石臼はやや遅れて石工が各地に根付いた室町時代に普及しました。また、中世には鉄鍋も用いられるようになり、東日本では囲炉裏(いろり)で煮る調理方法へ変化したと考えられています。

食・中世人の食

ところで、中世には食事がさまざまな人間関係をつなぐ社会的行為として行われることがありまし

人間関係つなぐ行為 主従関係や並列確認で宴

味同心(いちみどうしん)や、西日本での一揆などに際し神前で起請文を燃やして神水を回し飲む「一味神水(いちみしん水)」はよく知られていますが、また、武士たちは同じ集団であることや、主従関係を確認するために杯事や宴会では同じ力ケラケで飲食しながらも、席順や料理の種類・数で上下関係が示されていたのです。



長野市窪川原遺跡出土のすり鉢(県立歴史館所蔵)

また、武士たちは同じ集団であることや、主従関係を確認するために杯事や宴会では同じ力ケラケで飲食しながらも、席順や料理の種類・数で上下関係が示されていたのです。

主従関係ではなく寄り合って供されるものもありました。こうした飲食と関連し、身分関係が厳密に守られる場とが、室町時代には部屋のしつらえを異にする建物として造られるようになりま

す。中野市高梨氏館跡では、庭園に面した建物跡が連歌や宴会、飲茶を行う「会所(かいしょ)」と呼ばれる寄り合っための建物で、その横の広場に面した建物跡が主従関係で対面して杯事をする「主殿(しゅでん)」という建物と推測されています。

さらに、中世人は「食」についてさまざまな宗教意識も持っていました。例えば地獄を想像した絵には、鬼たちが人間をすり鉢や臼ですりつぶし、釜で煮たり、包丁で切り刻んでいる様子が描かれています。人間が調理している姿を鬼に置き換えたともみられます。

「食」は他の生物の命を取る行為として罪悪感もあつたのでしょうか。定説ではありませんが、中世には鉄製の鍋や釜、すり鉢を使い、わざと壊れやすい素

焼きの土器で命を煮たり、すりつぶすことにまつわる宗教行為を行つたと考える説もあります。これと関連するのが、みそなどは魔をよける呪術的な食べ物と考えられていたようです。

中世には食べることでできずに何万人もの死者が出る大飢饉(ききん)が何度かあつたといわれますが、中世に形成されたさまざまな「食」の文化は途切れずに現代にも影響を与えています。

市川隆之・県埋蔵文化財センタ
ー調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

94

地球の長い歴史の中で、地球全体規模で暖かな時期と寒い時期が繰り返していったことが分かつて

います。恐竜のいた時代も暖かな時期で、今から1500万年前の日本は熱帯だったようです。しかし200万年

前くらいになると急激に寒い時期に入ります。それを氷河時代と呼びます。北極と南極の氷は拡大し、また、降り積もった雪は万年雪となり、氷の塊になって氷河を形成します。氷河は1カ月に数センチから数十センチ流動して、氷河特有の地形を大地に刻みます。現在の生きた氷河は標高5000メートル以上でないと残っていないため、ネパールのヒマラヤなどに行かないと見ることができません。けれど

環境・旧石器時代

も、日本アルプスの千畳敷カールのように、かつての氷河が

日本にも氷河が形成されていたことが分かります。

高冷地のような気候 大陸と地続き 動物が移動

存在していた地形に残っていることから、氷河時代の寒冷期に

200万年前に始まった氷河時代は1万年前まで続きました。そして現在は、氷河時代が終わり、暖かい時期に入って

などから古気候を推定できます。また、深海に堆積した土や北極近くの氷などには、木の年輪と同じように毎年



氷河時代の旧石器時代の景観は、標高1700メートルの霧ヶ峰高原と同じだと推定される

昔の気候を推定する方法は幾つかあります。氷河の名残の地形や、植物の化石やサンゴ化石の分布

毎年縞(しま)が残ります。その縞の中に残されている小さな虫の死骸や、水に溶け込んだ酸素の成分を調べることで寒暖

の差が判明します。それらのデータによれば、氷河時代といってもずっと寒かったわけではなく、数万年から十数万年のサイクルで暖かな時期と寒い時期が交代でやってきたようです。気温が低下すると海面も下がり、日本列島は大陸と地続きになりました。北からは大陸からマンモスやヘラジカ、ヒグマ、ナウマンゾウ、オオツノシカ、ニホンシカ、イノシシ、また中国南部からは海岸沿いにトウヨウソウ、サイ、ツキノワグマなどがやって来ました。当然、動物たちの移動とともに、ハンターであった旧石器時代

の人々も大陸方面から渡って来たと考えられます。旧石器時代の2万年前ごろは、現在よりも気温が7〜8度低かったと推定されています。標高にたとえると、現在より1200〜1300メートル高いところを想像すればよいでしょう。菅平や霧ヶ峰のような気候だったと考えればよいわけです。この時期、古くから日本列島にすみついてきた動物たちの多くは、日本列島の寒冷な気候、その後の急激な温暖化に伴う激しい環境変化などの影響を受けて急速に姿を消していききました。その一方で、人類は寒さに順応し

て生活を拡大していききました。

便利になった現代社会。しかし自然の猛威にはいまだに悩まされます。はるか旧石器時代から人々は自然の脅威に悩まされながらも、克服し、自然と共生してきました。

つまり環境への順応こそが生き残りの最大の武器でした。自然環境に調和し、共生していくことが大切であることを、われわれは旧石器時代の遺跡や遺物から読み取っていかねればいけません。

大竹憲昭・県立歴史館専門主事
兼学芸員

古代への招待状

埋もれていた遺産

95

少し前まで「縄文時代には開発などなかったのだから、原生林に覆われた大自然の下に住んでいたんだろう」と単純に

整えるための大規模な土木工事が盛んに行われていたことが分かってきています。また、ムラの周囲では自然の森に手を加え、広い範囲がクリ林に改変されていた可能性も指摘されてきています。

このように、周囲の自然環境に大幅な手を加え始めたのが、縄文時代だったのです。では、どうしてクリ林があったと推測できるのでしょうか。それには、クリをはじめとする動植物がなくならずに残って

想像していたものです。しかし近年の発掘調査によると、縄文時代中期後半(約4500年前)ころから「ムラ」の形を

いる場所を発掘する必要があります。低湿地遺跡と呼ばれる水辺の遺跡です。

環境・開墾始まる縄文時代

の時を経て青々とした葉っぱや、黄金色に光る虫の羽などが見つかります。た

そのため、この感動を味わえるのは発掘現場の最前線に立つ人たちだけの楽しみでもあります。

そのために、この感動を望む台地上に縄文時代後期(約4000年前)の集落があり、すぐ脇の低湿地でクルミなどの堅

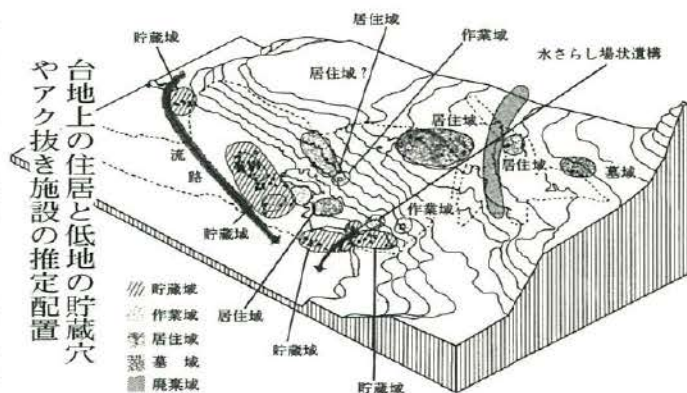
果類が入った貯蔵用の穴、クリ材で作ったアク抜き用の施設(トチの実のアク抜き用)が見つかりました。これ以外にも、コナメシ、ゴミムシなどの昆虫が発見できます。大きめの雑草の種なども肉眼で見つかります。さらに顕微鏡でのごく

きます。こうした想像を巡らしながら、掘り出した土に目を凝らしてみると、オサムシ、コナメシ、ゴミムシなどの昆虫が発見できます。大きめの雑草の種なども肉眼で見つかります。さらに顕微鏡でのごく

や貝は重要な食料源です。また、丸木舟を使った交易にも川は重要な役割を担っていました。

クリやトチなど植林

暮らしやすい水辺のムラ



栗林遺跡で見つかったクルミの入った貯蔵穴(県立歴史館蔵)

だし、これらは玉手箱を開けた浦島太郎のように、空気に触れた途端に一瞬で色あせてしまいます。

長野県内ではまだ数少ない縄文時代の低湿地遺跡の調査が、志賀中野有料道路の建設に伴い中野市・栗

林遺跡で行われ、クヌギかアベマキ、ケヤキ、アサダ?

果類が入った貯蔵用の穴、クリ材で作ったアク抜き用の施設(トチの実のアク抜き用)が見つかりました。これ以外にも、コナメシ、ゴミムシなどの昆虫が発見

できます。大きめの雑草の種なども肉眼で見つかります。さらに顕微鏡でのごく

た。ここには千曲川を望む台地上に縄文時代後期(約4000年前)の集落があり、すぐ脇の低湿地でクルミなどの堅

果類が入った貯蔵用の穴、クリ材で作ったアク抜き用の施設(トチの実のアク抜き用)が見つかりました。これ以外にも、コナメシ、ゴミムシなどの昆虫が発見

できます。大きめの雑草の種なども肉眼で見つかります。さらに顕微鏡でのごく

水辺は、縄文人たちにとって最も暮らしやすい環境だったようです。水は豊富で、飲み水やトチの実のアク抜きなどに使えます。水を求めて来る鳥や獣、水中の魚

このように、水辺と、クリやトチが優越する人手の加わった森、その周囲の原生林、それが縄文人の好んだ世界だったと思われま。千曲川の河川堆積(たいせき)はさまざま、長野市内では数十数以下に未発見の遺跡が眠っている可能性がありま。将来、縄文時代像を塗り替えるような発見があるかもしれません。期待したいものです。

寺内隆夫・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

96

自然の災害は大きな被害をもたらすことがありますが、その一つが地震です。善光寺平はその両脇に断層

が走っていることが知られていて、古くから何度も地震が起きているようです。遺跡からも地震の痕跡(地震遺跡)が発掘さ

れることがあります。

地震の痕跡にはいろいろありますが、写真のように噴砂(ふん

さ)という、遺跡の下にある砂が液状化して噴出した痕跡があります。こうした地割れを遺跡でよく観察してみると、砂がぎ

つしり詰まっていた。この地割れに伴う噴砂の特徴は、掘っても掘っても簡単に底が出ないことです。砂自体は遺跡の

地面のかなり下にある自然の砂が、地震で揺すられて噴き出したものなのです。

ただ、地震による地割れが見つかったからといって、そ

環境・古代の自然災害

れがいつ起こった地震であるかを決めるのはなかなか難しい

うな新しい時代の地震の場合は、古文書などの記録が多く残っています。それゆえ、発生した時刻や地域など詳しい状況

ったといふことばいしか分からないことが多いようです。ところが、長野市篠ノ井遺跡群の発掘調査で、地割れが壊

遺跡に噴砂や洪水跡

たくましく何度も復興



篠ノ井遺跡群の噴砂 (写真中央に見える白い筋)



千曲市屋代遺跡群の洪水砂 (▼は水田のあぜ) III層が平安時代の洪水砂 (2枚とも県立歴史館提供)

この地割れは、841(承和8)年2月に信濃国から大地震があったという報告が、時の「朝廷」に提出されていた。今のところこの地割れは841年の地震によるものと推定されています。

その約50年後の887年あるいは888年に善光寺平一帯は、今度は洪水砂で埋まってしまうようです。この地割れは835年から888年の間にできたものであると限定できました。この時期の歴史書を調べてみると、8

この地割れは835年以降に発行されたと思われる古銭「承和昌宝(しょうわしょうほう)」が出土しました。さらに

この地割れは835年から888年の間にできたものであると限定できました。この時期の歴史書を調べてみると、8

のときのものと思われる砂層は佐久市白田、浅科から坂城町、千曲市、長野市などで見つかっています。当時の人々にとっては迷惑な災害でしたが、この砂層は現代の考古学では遺跡の年代を知る上で一つの目安になっています。

洪水後も、人々は洪水前の条里制地割の水田(約100畝)の方形地割、6月4日掲載の第84回記事参照)を復興しています。災害に負けない古代の人々のたくましさがかがえます。

川崎保・県立歴史館専門主事兼学芸員

が分かるので、遺跡での状況と対比しやすいのです。しかし古代の場合、文献が限られているので、信濃国に大地震があ

している住居跡から835年以降に発行されたと思われる古銭「承和昌宝(しょうわしょうほう)」が出土しました。さら

この地割れは835年から888年の間にできたものであると限定できました。この時期の歴史書を調べてみると、8

のときのものと思われる砂層は佐久市白田、浅科から坂城町、千曲市、長野市などで見つかっています。当時の人々にとっては迷惑な災害でしたが、この砂層は現代の考古学では遺跡の年代を知る上で一つの目安になっています。

洪水後も、人々は洪水前の条里制地割の水田(約100畝)の方形地割、6月4日掲載の第84回記事参照)を復興しています。災害に負けない古代の人々のたくましさがかがえます。

古代への招待状

埋もれていた遺産

97

豊野町大倉地区、鳥居川の左岸に大倉城跡があります。94(平成6)年、採石のため一部破壊される

というところもあり、旧豊野町教育委員会が堅堀(たてぼり)や堅土臺(たてどい)、曲輪(くるわ)など

を調査しました。大規模な堀り切りや堅堀の様子から、1回目の川中島合戦(1553年)のころ上杉氏により築城され

たものと推定され、1578(天正6)年ごろには既に使われなくなっていたことが分かりました。

1582(天正10)年、この年信濃に大きな勢力を及ぼしていた武田氏が滅亡し、天下統一を成し遂げようとする織田信長が、いよいよ北信濃平定に動きだします。信長の家臣、森

濟的拠点となっていた長沼城に乗り込ん

信長勢の支配に抵抗 農民ら大倉城で立てこもる

環境・中世の権力攻防

長可(ながよし)が、できたのです。長沼北信濃の軍事的・経

しい城下町となっていました。

数千の浪人・農民からなる一揆勢が芋川親正を大将に、森

た大倉城だったので

しかし、一揆勢も織田の精鋭軍にはかなわず、敗走する者



大倉城跡(豊野町大倉)



1200人ほどが討ち取ら

将であった芋川親正が一向宗浄土真宗であり、その下に多くの農民たちが結集したのだという見方が注目されています。

となっていたようです。石山戦争の折には多くの兵糧米が石山本願寺に送られており、本願寺勢力の強い影響下にあったこともうかがえます。

は恐怖と映ったのではないのでしょうか。同じ年の6月、本能寺の変で信長も家臣の明智光秀に滅ぼされてしまうのですが、近世という時代へ移り変わる中で、一向一揆のような横のつながりが力を失い、新しい権力の下に編成されていきま

こもった芋川の乱は信濃の一向一揆というべき性格を持っていたのかもしれない。地侍をリーダーとし、村を基盤に頑強に抵抗する一向宗の姿を目の当たりにしてきた信長勢にとって、芋川の乱

長可の支配に対し蜂起したのはその年の4月でした。一揆勢が立てこもった城が既に役割を終えてい

いた女子供1000人余りが切り殺された記録には残されています。

近年、一揆勢の大浄興寺が中心の一つ

で続いた石山本願寺と織田信長との戦い。

入沢昌基・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

98

近ごろの異常気象による自然災害を目の当たりにすると、決して自然だけが原因ではないことに多くの人が気付いてい

る。異常気象の原因である地球温暖化を引き起こしている張本人が人間だからです。

しかし、それは決して現代社会だけに特有のものではありませんでした。「ヒト」は長い歴史の中で活動範囲を全地球規模に広げてきました。その過程で、さまざまな「開発」を進め、そのリスクとして自然災害に遭遇してきました。

鎌倉時代から江戸時代にかけては、山間地の開発が盛んに行われ、広葉樹が激減して松林が全国的に拡大していったといわれています。遺跡の土に含まれている花粉を調べるこ

とによって、長野市付近も例外ではないことが分かってきてい

環境・江戸時代の開発

跡が水田に、中州が畑などに開発されるものこのころです。

人々の活動範囲拡大

災害の痕跡刻まれた地層

ます。また、千曲川に沿う低地や古い河道

保水力の低下した山々、そして堤防もない川岸ぎりぎりまで迫る田んぼや畑、そして人家等々。それ以前には洪水が起

上信越自動車道の更埴ジャンクションとなっていた千曲市窪河原遺跡は、90(平成2)年と94(同6)年に調査が行われま

その中で、年代が確実にとらえられるのが1847(弘化4)年に起こった善光寺地震による液状化現象とその直後の

代を絞ることができました。

液状化現象というのは、大地震のときに地盤の弱い場所ので、大地震のとき

の跡を発見するだけでなく、地震や洪水と人々のかかわりを知ることと可能です。善光寺地震による液状化現象が見られた遺跡は長野市内にもあり、江戸時代の洪水跡は長野市川田条里遺跡、小布施町飯田古屋敷遺跡、中野市(旧豊田村)川久保遺跡などでも見つかっています。

さらに地震直後の洪水砂層は、地震で岩倉山が崩壊して崖川がせき止められ、それが決壊して起こった大洪水の痕跡の可能性があります。窪河原付近まで洪水災害に見舞われた様子が、松代藩に保管されていた「信州地震大絵図」にも描かれているからです。

このように、発掘調査では建物や墓



窪河原遺跡の鎌倉時代から明治時代までの耕地開発と洪水・地震痕跡 (県立歴史館提供)



窪河原遺跡付近の洪水状況(真田宝物館所蔵「信州地震大絵図」より)

こつてもほとんど被害にならなかった場所に、人々の活動範囲が進出して行ったため、災害を招く要因になったのです。

した。ここには、鎌倉時代から明治時代ころまでの開発と洪水災害の痕跡が、地層に繰り返し刻まれている。

洪水痕跡です。この地層の直下からは、17世紀の磁器(茶碗のかけら)が出土し、上層からは明治時代の焼き物が見つかったため、年

こつした発掘資料から、過去における人々の開発の進め方と災害との因果関係を解明し、わたしたちの未来にも生かしたいものです。

寺内隆夫・県埋蔵文化財センタ
ー調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

99

遺跡の調査では、過去の人間と森とのかわりを調べるために、さまざまな科学的な分析が試みられて

れています。長野市若穂の榎田遺跡や千曲市屋代遺跡群などの上信越自動車道の発掘調査では、低湿

地から出土した木材や花粉、住居跡などから見つかった炭化木材の分析によって当時の植生が研究されています。

90(平成2)年から95年に発掘調査が行われた屋代遺跡群では、縄文時代から中近世までの地層に含まれる花粉や、当時の住居跡などに残る炭化植物を採取し、各時代の植物について植生復元が試みられました。こうした分析が全国各地で行われ、人と森とのかわりが解明されつ

環境・人と森とのかわり

つあります。人が森に本格的な

共存共栄の関係築く 破壊に歯止め掛ける動き

変化を与えたのは弥生時代の水田開発だ

といわれています。続く古墳時代以降に

は、須恵器生産などの窯業・木工・鉄生産などさまざまな手工業の発達、官衙(かんが)や寺院建設、大規模集落の出

れ、次第にマツ類に取って代わっていき

ます。近世になると、マツ・ナラ類の森は人の管理によって維



ナラやブナの落葉広葉樹林(戸隠)

現によって森林が大量に消費されていきました。その結果、そのころの日本に広く分布していた落葉広葉樹林は消費さ

持されるようになりまし。マツ類・スギ・ヒノキなど市場価値の高い針葉樹を中心に植林され、人為色の強い植生へと

変化していきます。いわゆる「里山」の成立です。

里山では、森は単に木を木材として利用するためだけでなく、燃料としての薪や木炭、肥料となる下草、さらに山菜などを供給してくれる生活に欠かせない存在でした。

こうして里山は昭和30年代ぐらいまで日本各地に見られましたが、戦後の高度経済成長に伴う社会の変化は、化石燃料や化学肥料の普及、輸入木材の増加などで、森に対する人々の意識まで大きく変化させ、人と森の関係は大きく変ぼうし

てしまいました。弥生時代以降、人間は森に影響を与え、植生までも変化させました。近世には里山を発達させ、森なしには生きていけないほどの共存共栄の関係を築き上げたといえます。

しかし、戦後の社会の大きな変容は、それまでの静的な森への干渉を飛び越え、一気に森の破壊へと突き進んでいきました。最近では、そういった森の破壊に歯止めを掛けようという動きが各地に見られます。さらに森を生態学的な観点から考え、復元していこうという動きが始ま

っています。

戦後の森林破壊を負の遺産としないためにも、全国的な環境保全活動が必要な時期に差し掛かっているのかもしれない。過去の人々がどのように森と接してきたか、未来に向かうわれわれはどのように森と接すればいいのか。過去をひもとくことのできる遺跡の調査の中に、そのヒントが隠されているように思えます。

藤原直人・県埋蔵文化財センター調査研究員

古代への招待状

埋もれていた遺産

100

「昨日は大きな土器を見つけたな」あのペンダント、どんな人が着けていたのかな」「今日はどんな発見があるのか

な」と感動や期待とともに、発掘現場の一日は始まります。発掘現場では、大型重機が地面を掘削し、その掘削した土を盛り上げた土山

があり、工事現場のように見えます。しかし、中では土器を掘り出す作業をしたり、石組みの様子を図に描いたり、何枚も写真を撮ったりと、神経を使う細かな作業が行われています。

多くの場合、わたしたちは自分が立っている地面の下に祖先の生活痕跡(埋蔵文化財)などが埋もれていることを知らずに生活しています。しかし、道路や建物などの建設のためだけに地面を掘り返してしまうと、埋

埋蔵文化財が語るもの

もれていた埋蔵文化財は壊され、消滅してしまいます。こうなると祖先がどんな

道具を使い、どんな家で寝起きし、どんな思いを持ちながら

祖先の生活痕跡記す

感動や期待の発掘現場

生活痕跡をできる限り詳細に記録にとどめる発掘調査を、多くの方の協力を得て実施するわけです。

発掘調査で発見さ



千曲川べりの縄文時代集落跡の発掘調査(中野市千田遺跡)

基に、類例や広がりなどを重ね合わせていきますと、わたしたちには想像できないような祖先のたくましさや豊かさなど

載は出発し、都合45人で執筆してきました。03(平成15)年9月6日の第1回より2年余、11のテ



細かな作業は未知の発見へとつながる

れるのは、祖先が大地に働き掛けた痕跡(遺構)や、祖先が使った道具類(遺物)です。遺構・遺物が、発見場所(遺跡)に存在していた事実を

が具体的に分かってくれます。埋蔵文化財が語ってくれる祖先のたくましさ、豊かさを多くのの方々と共有したいの思いから本連

マ(土器・道具・住居・アクセサリー・墓・信仰・流通・戦い・生産・食・環境)に沿って、長野市周辺で発見された遺構や遺物から分か

る、祖先の生活の様子やたくましさ・豊かさを描いてきました。いかがだったでしょうか。本連載が、数万年來続けてきた祖先の絶え間ない営みの結果や成果を具体的に語ってくれる埋蔵文化財について、一層の興味、関心を持つて接していただくきっかけになればうれしい限りです。

資料提供などでお世話になった多くの方々、機関、長野市民新聞社の編集スタッフに心より感謝申し上げます。1月5日からは、県環境保全研究所の研究員による長野市周辺の環境をテーマにした連載がスタートします

(おわり)

市澤英利・県埋蔵文化財センター調査部長

この土を掘ってきれいにしてみてください」「きれいにしてみただけ、これ何だいやす」「おー、これは縄文時代でもすごく珍しい物だなあ」

発掘現場では、今日もこんな会話が飛び交う中、埋もれていた遺産がわたしたちの目の前に姿を現しています。